
魔法少女リリカルなのはStrikerS はじまりの魔法 番外編

阪本 葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers はじまりの魔法
番外編

【Nコード】

N8720J

【作者名】

阪本 葵

【あらすじ】

魔法少女リリカルなのはStrikers はじまりの魔法の
番外編です。

なのは達が小さくなり、しかもなのは達と瓜ふたつの子供が！
更には近藤の恐るべき能力が開眼する！？

この物語は基本本編とは関係ありません。
やりたい放題です！！

第1話 パパとパパリン（前書き）

すいません、本編を放って番外書いてました。

そして、これはあくまで番外であり、本編とはなんのつながりもありません。

しかも、設定などが目茶苦茶です。

もうやダこの作者という人や、目茶苦茶な設定の話なんか見るか！という人は見ないほうがいいです。

でも、菩薩のような心の持ち主の人は見てください。

第1話 パパとパパリン

「キヤーーツ!？」

こんな奇声からフェイトの一日が始まった。

遡ること早朝、なのはが一人早く起き、キングサイズのベッドと一緒に寝ているヴィヴィオとフェイトの寝顔を見た時、なのはは違和感を覚えた。

(・・・なんか布団の膨らみが小さい?)

フェイトがヴィヴィオを抱いて寝ているのは目視で確認済みである。ちゃんと二人で寝ている。

なのに、フェイトの布団に隠れている部分が小さい。どうみても大人のサイズではない。

よく見ると・・・フェイトの顔が子供っぽい。

なのははいやな予感がして、掛け布団をバツと勢いよくめくった。

そして、なのははフェイトを見て叫んでしまった。

「フェイトちゃんが子供になってるー!？」

朝、はやての部隊長室に隊長、副隊長が集まり、緊急ミーティングを行った。

議題は、『何故フェイトが子供になったのか?』である。

2つのソファ対面に配置され、ひとつははやて、シグナム、ヴィータが座り、対面になるもうひとつのソファにはなのはと、今回議題の元である小さくなったフェイトが座っていた。
近藤はフェイト達の座るソファの後ろに立っている。

「・・・ほんまに小さなったんやな・・・」

はやてがマジマジとフェイトを見つめる。

「大体9歳か10歳くらいか?」

シグナムが腕を組みながら言った。

「しかし・・・なんで急に子供の姿になったんだ?」

ヴィータがソファに深く座り、ため息をつく。

「そんなの私が聞きたいよ!」

フェイトは泣きそうな顔で声を荒げた。

今フェイトの体は9歳から10歳くらいの体格になっており、服はとりあえず制服の上着だけを着ている。

それでもブカブカで、袖を何回も折っている。
靴は履かずに代わりにスリッパを履くが、それも大人用のために、
歩く度にパカパカ鳴る。

今もソファに座っているが、地面に足が届いておらず、ブラブラ足を揺らしている。

「・・・ぷっ」

「笑い事じゃないんだよ！ヴィーター！」

おもわず吹き出したヴィータに、フェイトはプンプンと怒る。

「まあまあ、フェイトちゃんも落ち着こうよ」

なのはが優しく諭すのだが、なのはの手はフェイトの頭を撫でていた。

「なのはも子供扱いしないで！」

頬をプクーっとな膨らませて手をプンプン振り回すフェイトに、はやてはおもわず

（あかん・・・イジりたい・・・！めっちゃイジりたい・・・！！）

と心の中で叫んでいた。

そこへ、いままで黙っていた近藤が口を開いた。

「しかし、こうなったからには何か原因があるはずですよ。フェイト隊長、昨晩は何か普段と違うことをしましたか？」

「え？うーん・・・特に変わった事をした覚えは・・・・・・・・あ」

フェイトは何か思い出したように顔をあげた。

「なんだ、何かしたのか？」

シグナムが尋ねると、フェイトが少し困ったような顔をした。

「・・・変わった事をしたわけじゃないんだけど、変な夢を見たの」

「夢だあ？」

ヴィータが呆れたようにフンと鼻をならす。

「うん。私達が小さいとき・・・『闇の書事件』の時の夢」

フェイトの言葉にはやてが目を見開く。

「ああ、でも、少しおかしい夢だったな・・・リインフォースが消えずにはやての側にいたんだ」

フェイトの言葉に場の空気が重くなる。

「それで、何故か私そっくりな子がいたんだよ」

「ん？それは夢の中のお前ではないのか？」

シグナムが空気を変えようとあえてフェイトの話しにのる。
しかし、フェイトは首を横に振る。

「うっん、私じゃない。そっくりだったけど、髪が青くて意地悪そうな目つきしていて・・・なんかバカっぽい子だった」

フェイトがそう言つと、突如部隊長室のドアがドカーンという音と共に蹴破られた。

「こらー！誰がバカっぽいだ！僕はつよいんだぞ！泣かすぞおまえたち！！」

突如の侵入者に皆が固まってしまった。

何故なら、その人物があまりにも似ていたから。

誰に似ているのか？

「・・・フェイト隊長？」

そこにはフェイトにうりふたつの少女が立っていた。

ただ、髪の毛の色が青くツインテールにまとめ、少女時代のフェイトのバリアジャケットを着用している。

そして、自信満々といった顔つきで踏ん返り返っていた。

「僕はフェイトじゃない！『雷刃の襲撃者』だ！！つよいんだぞ！！エッヘン！」

『雷刃の襲撃者』と名乗るフェイトそっくりな少女はブイサインを

しながら自己紹介した。

そして、部隊長室にいた全員が思った。

ああ・・・この子はバカなんだ・・・と。

とにかく、雷刃の襲撃者を加えてミーティングを再開した。

雷刃の襲撃者曰く、自分は『闇の書の残滓』による『闇の欠片』だという。

なのは達の手により闇の書の暴走部分である防衛プログラムの分離に成功し、それをアルカンシェルで消滅させ事件は終結した。

フェイトが闇の書事件に関わったときにフェイトは闇の書に飲み込まれたそうだ。

そして、その時に僅かに『闇の書』による『闇の欠片』が張り付いていたのだとか。

そのフェイトに張り付いていた闇の欠片が、なぜか防衛プログラムへ戻らず、封印されずにこの10年間ずっとフェイトに張り付き隠れていたのだ。

「どこに張り付いとったんや？」

「え？んーと・・・眼球の裏？」

はやての質問に指を顎に当てながら応える雷刃の襲撃者。

「こええな！おい！？」

ヴィータのツツコミ対し、雷刃の襲撃者はよくわからないという顔をしていた。

しかし、10年経って今更な話である。

何故今頃その闇の書の残滓による闇の欠片が発動したのか聞いてみた。

「そんなの僕が知るわけないだろ！」

雷刃の襲撃者はフェイト達に逆ギレした。

そして、そんな雷刃の襲撃者は呑気にも近藤に肩車してもらいご機嫌だった。

当然、フェイトはそんな雷刃の襲撃者の行動を見過ごすことはできない。

「こ、近藤さんから離れなさい！」

フェイトがピョンピョン飛びながら肩車されている雷刃の襲撃者を引きずり降ろそうとする。

「なんだよ！僕は凄いいんだぞ！コイツはかっこいいから僕のモノなんだー！」

肩車されている雷刃の襲撃者は近藤の頭にしがみつく。

「ダメー！近藤さんは私のなのー！！」

フェイトは近藤の体をよじ登り、肩車されている雷刃の襲撃者につかみかかる。

「なんだよ！僕に齒向かうのか！？お前なんて僕にかかれればちよちよいのプーなんだぞ！」

「意味わかんないよ！いいから近藤さんから降りなさいー！！」

「なんだよー！」

「なによー！！」

雷刃の襲撃者とフェイトは近藤の頭の上でギヤーギヤー喚き、喧嘩を始めた。

なのは達はただオロオロするのみである。

そして、とうとう近藤の堪忍袋の尾が切れた。

雷刃の襲撃者とフェイトの襟首を掴み、持ち上げる。

二人を目の前に持って行き、怒鳴った。

「頭の上でギヤーギヤーやかましいー！！」

雷刃の襲撃者とフェイトは揃ってひいっと悲鳴をあげた。

こつてりと絞られた雷刃の襲撃者とフェイトは正座させられたままミーティングを続けた。

「しかし・・・『雷刃』の言うことが本当だとして、何故フェイト隊長が子供になるんだ？」

近藤は顎に手を当て、首を捻る。

「こいつがそう望んだんじゃないのか？」

雷刃の襲撃者が正座しながら隣のフェイトを指差す。

「望む？どういうことだ？」

シグナムが雷刃の襲撃者を睨む。

闇の書の残滓による闇の欠片というだけで、あまり歓迎できない来客なので当然といえば当然か。

少し殺気が混じっているが、当の雷刃の襲撃者は知らん顔である。

「そのままの意味さ。闇の書の基本理念は、ざっくり言って『闇の書』に蓄えられた膨大な魔力データの魔力を使って主の願いを叶えることだ。そこで、10年もこの小娘に張り付いていた闇の書の残滓による闇の欠片がこいつを主と誤認したんだろっよ」

「うーん・・・ざっくり言い過ぎちゃうか？よけいわからんわ・・・闇の書の基本理念か・・・でも、闇の書って破損しとるせいで、とにかく混沌や深い闇を望むんやなかったか？」

はやてが腕を組み、雷刃の襲撃者を見遣る。
すると、雷刃の襲撃者はぷいとそっぽを向いた。

「ふん、僕がそんな難しいこと知るわけないだろ。この小娘が『子供に戻りたい』と願ったから闇の書の残滓による闇の欠片は願いを叶えた。それだけだよ」

「闇の書プログラムがそんな簡単に誤認して、意味の無い願いを叶えようとするか？ いや、そもそもそんな物理的に願いを叶えるなどそんなプログラムあったか？」

シグナムは鋭く雷刃の襲撃者を睨み続ける。

「だから！僕は知らないって言ってるだろ！でも、現に僕はこうして出てきたんだ！つまり、そういうことさ！」

雷刃の襲撃者はシグナムの言い方が気に入らなかったようで、ガーンと吠えるように言い返した。

近藤は、そんな雷刃の襲撃者の頭を撫でた。

いきなりの事に雷刃の襲撃者はビクツと体を硬直させた。

「おまえ、いい奴だな」

近藤に褒められ、雷刃の襲撃者はカーツと顔を赤くした。

「な、なにがだよ！？僕はいい奴なんかじゃない！僕は闇だぞ！それがいい奴なんて・・・」

撫でられている手を振り払い、近藤に噛み付く雷刃の襲撃者だったが若干にやけていた。

「でも、質問には素直に答えてくれるじゃないか。わからないものにははつきりわからないって言うし」

「い、いや、ちがくて！これは親切じゃなくて！あ、の、その・・・」

わたた慌てるが段々声が小さくなっていく雷刃の襲撃者。それを見ていたシグナムやヴィータは少し驚いていた。

「・・・アレは本当に闇の書の欠片なのか？」

「・・・信じたくないな。あんなバカが不本意とはいえ、闇の書の中に一緒にいたんだよな・・・」

シグナムとヴィータはため息をついた。

子供に戻りたいと願った？

この言葉にフェイトはハッとなった。

「まさか・・・」

フェイトの呟きを聞き逃すはずもなく、なのはがフェイトに詰め寄

る。

「フェイトちゃん、何か心当たりがあるの？」

なのはは優しくフェイトに尋ねるが、フェイトの顔はみるみる赤くなり、ボソボソと話し出した。

「その・・・エリオやキャロが、近藤さんをお父さんと呼んでるのを見てて・・・いいなあって・・・その、私お父さんいないし・・・」

「ほほう？」

はやてがものすごくダンディーな顔でフェイトを見る。

なのはやシグナム、ヴィータもニヤニヤしている。

フェイトはますます顔を赤くし、縮まる。

「・・・ということは、フェイト隊長の願いが成就すれば、フェイト隊長は元に戻るのか？」

「あ、ああ。闇の書の残滓による闇の欠片とはいえ、残りカス同然だからね。願いが成就したらプログラムは完遂とみなして終了するはずさ。」

これによる人体に影響する負担もそんなに多くないと思う。だけど、まだ戻らないって事は、成就してないんじゃない？」

なんとか平常心を取り戻した雷刃の襲撃者と近藤はフェイト達を放って話しを進めていた。

そんな風に近藤と雷刃の襲撃者は会話を続けていたが、雷刃の襲撃者はジッと近藤を見つめた。

「・・・なんだ？」

あまりにもまじまじと見られるものだから、近藤は少し体をのけ反らせた。

「・・・いや、さっきの事もそうだけど、お前は僕の事をなんとも思っていないんだな、と思って」

「どういうこと？」

なのはがフェイトイジリを抜け、雷刃の襲撃者の言葉に反応した。

「言葉の通りの意味さ。あの子鴉や小娘、騎士、それにお前もだな。僕が闇の書の残滓と言ったら、憎しみや怒りなんかの感情を僕にぶつけてきた。

でも、こいつはそんな感情を僕に向けずに普通に接してくるし、変な事も言ってくるし」

雷刃の襲撃者は近藤を指差しながらそう指摘した。

すると、近藤は肩を竦めた。

「なに、『闇の書事件』は知っているが、当事者じゃないからな。別に君に対して何の感情も湧かないただだよ」

「ふーん・・・」

雷刃の襲撃者は珍しい物を見るような目で近藤を見つめ続けた。

「しかし、フェイト隊長があのままというのもマズいな・・・フェイト隊長！」

近藤はしばし考え、はやて達にからかわれているフェイトを呼んだ。フェイトは渡りに船といわんばかりに近藤の元へ駆け寄った。

「な、なに？近藤さん」

フェイトの顔はまだ赤い。

しかし、近藤はこれから、フェイトがますます赤くなるような提案を打ち出す。

「『雷刃』が言うには、フェイト隊長の体が元に戻るには、願いを成就しなければならないそうです」

「私の願い？」

「そうです。現在の状況はまだ願いを成就していないために体が元に戻らないそうです。

そこで、フェイト隊長が元に戻るまで、俺の事を父親だと思って接して下さい」

「え？え、えええええつつ！？」

フェイトが飛び上がる。

顔の赤みは耳と首にまで侵食していた。

慌てるフェイトの肩を掴み、近藤はフェイトを見つめた。

「いいですか？フェイト隊長がこのままの状況では、仕事に差し支

えるんです。皆のためだと思って我慢してください」

近藤はまっすぐフェイトを見つめる。

そんな視線をフェイトはオドオドしながらチラチラと見る。

私の願い

元に戻らないと皆に迷惑をかける

そう、仕方ない

仕方ないんだ！

元に戻るためなんだから！

・・・だから

・・・すこしくらい

・・・素直になっていいよね？

フェイトは決心し、近藤を見つめた。

「・・・わかりました。元に戻るために、近藤さんを父親として接することにします！だから、私の事も娘として扱ってください！」

「わかりました」

近藤は頷いた。

すると、フェイトはもじもじしながら、第一声を放った。

「・・・パパ！」

フェイトはそういいながら近藤に抱き着いた。

「パパ！？」

なのはやはやて達は声を揃えた。

「パパ、だいすき！」

フェイトは抱き着きながら、近藤にほお擦りしだした。

あまりの豹変に何がなんだかわからなくなり、啞然とするなのは達であったが、そこにまたややこしい事をする者がいた。

「ふーん、小娘がそうするなら、僕も従うかな。よろしくな！パパ

リン！！
」

雷刃の襲撃者はニカッと笑いながら、近藤の背中に飛び乗った。

「パパリン！？
」

またもハモるなのは達だった。

第1話 パパとパパリン（後書き）

これはPSPゲームソフト「魔法少女リリカルなのはA・S P O R
TABLE」の設定とキャラを使用しています。

なかなかキャラゲーとしては面白いので、お金に余裕がある方は一
度プレイすることをオススメします。

第2話 おやすみ、そしてさようなら（前書き）

本編を蔑ろにして2話投稿です。

Nakiさん、野良猫さん、ユニコーンさん、絶影さん、山田花太郎さん、鉄 桜さんありがとうございます。

そして今回もイメージ壊しまくりです。

もう、そういうのヤダという人は見ないことをお勧めします。

それでもいい！

幼女万歳！！という方は見て行ってください。

警察に捕まるなよ！！

第2話 おやすみ、そしてさようなら

前回までのあらすじ

フェイトが子供になってふたりになりました。

「まてまて！なんだその適当なあらすじ説明は！？それに僕はフェイトじゃない！雷刃の襲撃者っていうカッコイイ名前があるんだぞ！！」

「・・・雷刃、誰に怒ってるのか知らないけど、頭の上で大声出さないでくれ」

「あ、ごめんパリン！」

現在、近藤は雷刃の襲撃者を肩車し、フェイト（小）と手を繋いで隊舎を歩いていた。

フェイトは近藤と雷刃の襲撃者が仲良くしているのが気に入らないようで、ぷくーっと頬を膨らませていた。

「パパ、私も肩車して！」

「ダメだ！ここは僕の特等席なんだ！誰にも譲らないぞ！」

雷刃の襲撃者は近藤の頭にしがみつく。

フェイトはますます頬を膨らませプリプリ怒りですが、ピンと何か閃いたらしく、余裕の笑みを浮かべフンと鼻を鳴らす。

「いいもーん。ご飯食べるときパパの膝の上で食べるもーん！膝の上は私の席ね！」

「な！？うそだー！ずるいぞー！」

二人はギャーギャー喚き喧嘩する。

「喧嘩するなら置いてくぞ」

近藤がボソツと呟くと、二人は顔を青ざめさせ必死に謝った。

そんな光景を後ろで見ていたなのは達はというと、ただただ啞然としていた。

「・・・フェイトちゃんてあんなに活発な子供だったかな・・・？」

なのはは、フェイトの変わりように驚いていた。

「いままで抑圧されていたものが爆発したんじゃないのか？」

ヴィータは冷静に分析する。

「そうだな。アレは悩みを一人で抱え込むタイプだからな。ストレスが溜まっていたのだろう。しかし、それはおまえや主にも言える

ことだ」

とシグナムに言われ、なのはとはやては顔を見合わせる。

「適度にガス抜きしろってこった。じゃないと、ああなるぞ」

ヴィータは親指でフェイトと雷刃の襲撃者を指した。

「ははは・・・ハイ」

なのはとはやては苦笑いしながらまたギャーギャー喧嘩しているフェイトと雷刃の襲撃者を見た。

フェイトが子供になったからといって、仕事が無くなるわけではない。

近藤はフェイトと雷刃の襲撃者を連れて、ティアナ達の待つ仮想シミュレータへ向かった。

当然、フォワード4人は驚いた。

あのスラッとしたモデルのような美女が小さな美少女になり、しかも二人に増えてるとか本当に意味不明である。

「なんとまあ・・・」

ティアナとスバルは驚きというか、呆れ果てたというか、そんな感じだった。

「小さいフェイトさん・・・かわいい・・・」

エリオはフェイトを見ながらポーツと頬を赤くする。

「・・・エリオくん？」

キヤロのナイフのような視線がエリオに突き刺さる。

エリオは身の危険を感じ、目をそらした。

「フェイト隊長はこんな姿になったが、訓練などは普通にこなせるから安心していいぞ」

近藤の言葉に、逆に不安になるフォワード4人だった。

「いや、でもそんなかわいいフェイトさんを攻撃するなんて・・・」

エリオは訓練に躊躇する。

「たしかに・・・なんか触ったら折れそうなくらい・・・なんだろう、保護欲を刺激される・・・」

スバルがジュルリと舌なめずりする。

ティアナとキヤロも口には出さなかったが、内心同じようなことを考えていた。

しかし、それが間違いだった。

「ハーケンセイバー！」

「ぎゃああああっ!？」

フェイトの容赦ない攻撃に逃げ惑う4人。

ちなみに、フェイトはバリアジャケットを展開したら、小さい頃のあのパツパツの水着のような服とマントだった。
理由はわからないが、フェイトはあまり気にしなかった。

「電刃衝!！」

「うぎゃあああああっ!？」

何故か雷刃の襲撃者も訓練に参加し、4人を攻撃しまくった。

「わははははー!!我が太刀にいつぺんの迷いなーし!!！」

雷刃ね襲撃者は嬉々としてフォトンランサーもどきの電刃衝を連発していた。

「ふたりともー!ほどほどにねー!」

なのはがフェイトと雷刃の襲撃者に注意し、はーいと返す二人。

「いやいやいや!？なのはさん、止めてくださいよー!？」

ティアナが全力でツッコんだ。

「天破・雷神槌！！」

「いやあああああっ！？」

ティアナの悲鳴は晴天の元、どこまでも轟いた。

朝の訓練も終わり、朝食を採ることになった。

その時、エレノアが大量の紙袋を持って近藤の元へやってきた。

「ご主人様ー！フェイトちゃんと雷刃ちゃんの服買ってきたよー」

いつまでもダボダボの制服とバリアジャケットで居させるわけにもいかず、近藤は急いでエレノアに二人の服を買に行かせたのだ。

袋に入っていた服はシンプルなものばかりで、いわゆるファストファッションであった。

そしてエレノアは下着も買ってきてくれていた。

こればかりは男の近藤が買いに行くわけにもいかなかったのでエレノアの機転に感謝した。

だが、フェイトは下着を見た途端顔を赤くした。

「こ・・・こんなセクシーな下着、着けたことないですよ・・・」

どうやら、エレノアの買ってきた下着はかなり身につけるのに勇氣があるものらしい。

「おー、すごいな！Ｔバックだ！これはスケスケだ！かつこいー！」
雷刃の襲撃者は下着を持ち上げて目をキラキラさせていた。

「（子供の下着であんなエロエロなやつあるんだな）」

「（あれって近藤さんがエレノアさんにああいうの買ってこいて指示出したんちゃうか？）」

「（もしくは、姉上の下着のセンスがアレだったりとかかもしれないません）」

「（それはそれで、近藤さんの影響があるんじゃないかな？）」

「（そーかー、副隊長はあんなのがいいんだー）」

「（・・・ああいうのって高いのよね・・・でも、近藤副隊長が喜ぶなら着ける価値はあるわね・・・）」

「（お父さん・・・僕にはその下着が直視できません！）」

「（・・・かわいいかも・・・）」

なのは達は念話で会議を行い、『あの下着は近藤の趣味である』と結論付けた。

そして近藤を羨望や侮蔑の入り混じった目で見た。

とにかく、フェイトと雷刃の襲撃者は服を着替え、食堂へ向かった。そして、いざ食べようとなったとき、近藤は少し困ったことになった。

フェイトが宣言通り近藤の膝の上を陣取ったのだ。

ポカーンとしているのは達と、横で悔しそうにしている雷刃の襲撃者。

「こ、これは・・・かなり恥ずかしいかも・・・」

フェイトは冷静になり、自分がいかに狂ったことをしているのか身を持って知ったようだ。

「なんだ恥ずかしいのか？なら僕と代われ！」

「だ、だめ！ココは私専用なの！」

雷刃の襲撃者の言うことに激しく抵抗するフェイト。

本当に子供のようなやりとりである。

近藤はいつも通り野菜ジュースを飲み、膝の上ではフェイトが大人しく朝食を採る。

横では雷刃の襲撃者がガツガツ掻き込んでいた。

雷刃の襲撃者の食べ方は少し乱暴で、口のまわりがケチャップやらソースやらで汚れていた。

「雷刃、ちょっと待て」

見かねた近藤はナプキンで雷刃の襲撃者の口を拭いた。

目をつむり大人しくされるがままにしていた雷刃の襲撃者は、口を拭うのが終わるとニカツと笑い、礼を言った。

「ありがとー、パパリン！」

ざわ・・・

テーブルがざわつく。

「パ、パパリン！？」

「どういことですか！？近藤副隊長！」

フォワード4人が近藤に詰め寄る。

さて、素直に説明した方がいいのだろうか？

近藤が悩んでいると、クイクイと服を引っ張られる感覚があった。見るとフェイトが服を引っ張っていた。

フェイトの口には不自然にケチャップがついていた。

「・・・パパ、とって」

恥ずかしそうに上目遣いでそんなことを言うフェイトさん。どうやら雷刃の襲撃者が羨ましかったようだ。

「パパー！？」

フォワード4人は絶叫した。

とりあえず、近藤は簡潔に説明した。

「・・・なるほど、父親の温もりを知らずに育ったフェイト隊長が、エリオやキャラを見て父親の存在を望んだ・・・と？」

ティアナが顎に指を当て、説明を理解する為に噛み砕きながら確認をとる。

近藤は、それに補足をいれる。

「そうだな。で、フェイト隊長の現状を知る年長の男は俺しかいないんで、フェイト隊長の望みを叶えるために便宜的に親子を演じているわけだ」

現在ロビーに集まり、フェイトの子供になった経緯、現状、解決策を説明していた。

そんな渦中の人物であるフェイトと雷刃の襲撃者は近藤の太ももを枕に昼寝をしていた。

「・・・フェイトちゃんは子供の頃からまわりを気にして生きてたんやな。

わがまま言ったらアカン、ええ子やないとアカン、思うて。

たぶん、これがフェイトちゃんの望んでた子供時代なんやろうな」

はやては静かな寝ているフェイトの頭を、髪をすくようになでる。

「わがまま言つて、大声で笑つて、駆け回って・・・」

なのはも愛おしむようにフェイトをみつめる。

「なるほど、雷刃の襲撃者はテストロッサのひとつの『可能性』か」
もしフェイトがなのはと出会っていなかったら？
もしハラオウンの養女にならなかったら？

もし―――そう『if』の話。

つまり、フェイトのもうひとつの『可能性』である。

「つーことは、コイツはもしかしたらこんなアホになってたかもしれないのか？」

「・・・ヴィータちゃん、それは思っても口に出しちゃダメだよ」

ヴィータの台なしな発言に皆あきれていた。

結局、フェイトはその日元に戻らなかった。
まだ満足していないということだろうか？

それぞれの業務が終わり、オフィスに入った近藤は風呂に入ることにした。

「雷刃、おまえはフェイトと女子寮の風呂に入れ」

雷刃の襲撃者はアヒルの子供のようにトコトコと近藤の後ろを付いてまわり、風呂にまで付いて来ようとしていた。

さすがにそれはイカンと近藤は女子寮の風呂に入れと言ったのだ。

「なんでー？いいじゃないか、パパリンと一緒に入っても！」

雷刃の襲撃者は不満タラタラのようで、口を3のようにしてブツブツ言い出した。

フェイトは元々女子寮の風呂に入るつもりだった。

いくら体が子供に戻ったからといって、心は花も恥じらう19歳である。

エリオならともかく、近藤と風呂に入るなんてとてもではないができない。

「ら、雷刃？もう行こう？」

フェイトが柔らかに雷刃の襲撃者を誘導するが、雷刃の襲撃者は聞かない。

「やだ！一緒に入るんだ！背中流しっこするんだー！！」

とうとう雷刃の襲撃者は座り込んで手足をバタバタさせた。

困り果てた近藤は、なんとか説得を続けた。

「・・・仕方ないな・・・言つとくが、ココは男風呂だ。俺以外もいるんだぞ？雷刃は裸を他の男に見られてもいいのか？」

そついうと、雷刃の襲撃者は渋々といった感じで女子寮の風呂に入ったのだ。

ある条件を出して。

「おやすみパパリン！」

雷刃の襲撃者は勢いよく潜り込んだ。
近藤のベッドに。

雷刃の襲撃者は風呂は別に入る代わりに、近藤の部屋で寝ることを条件に出してきたのだ。
近藤は、自分がソファに寝れば済むと軽く考え、了承した。
それが甘かった。

「一緒にベッドで寝るんだ！」

何ということでしょう。

雷刃の襲撃者は一緒に寝る気満々だ。

「あらあら、じゃあココは若いもの同士でこゆっくり〜！オホオホホ〜」

エレノアがいらん気遣いをして別の部屋で寝ると言い出ていった。
そして、しばらくすると、外からドドドドドと音が聞こえ、近藤の部屋のドアが勢いよくバァーン！と開け放たれた。

「わ、私も一緒に寝るー！！」

そこには、フェイトがマクラを持って必死の形相で立っていた。

近藤とフェイト、雷刃の襲撃者は小の字になって寝ている。
川の字ではない。

なぜなら、近藤の両サイドにフェイトと雷刃の襲撃者が寝ているからだ。まさしく小の字である。

近藤は寝付きがよく、すぐに寝てしまった。

逆にフェイトは寝付けない。

もう目がギンギンに開いている。

心臓もバクバクいつている。

今は近藤に背を向けて寝ているが、振り向けばそこに近藤がいるのだ。

これで寝ろというほうが無理だ。

しかしフェイトは納得いかなかった。

近藤がすぐに寝てしまった事だ。

子供になったとはいえ、自分と雷刃の襲撃者、二人の少女と一緒に寝ているのだ。

少しは緊張するなり気を使って話をするなりしてくれてもいいのに、もしかして異性と一緒に寝るのに慣れているのか？

だとすれば、速やかに尋問しなければならぬ。

そう、速やかに、迅速に。

「・・・おい、小娘起きてるだろ？」

そんな風にいけない方向に考え込んでいると、フェイトに小声で話し掛けてくる雷刃の襲撃者。

なんだろうかと体を起こそうとした。

「ああ、そのままでもいいぞ。あんまりゴソゴソするとパパリンが起きるからな」

近藤を気遣う雷刃の襲撃者。えらく気に入られたものである。フエイトも寝ている近藤を起こすのは申し訳ないと思い、そのままの体勢で聞くことにした。

「どうだ？今日は楽しかったか？」

いきなり何を言い出すのだろうか？

フエイトには雷刃の襲撃者が何が言いたいのかわからなかった。だが、楽しかったかと聞かれれば、それはイエスだ。

「・・・うん」

「そっか。よかったな」

雷刃の襲撃者はうれしそうな声で答えた。そこでフエイトは疑問に思った。

「あなたは本当に闇の書の欠片なの？なんていうか、悪意みたいなのがあまり感じられないんだけど・・・」

「僕は間違いなく闇の書の欠片さ。でもな、別に混沌なんかを望んじやいないよ」

雷刃の襲撃者は一呼吸おいて語り続けた。

「僕は闇だ。闇とは負だ。嫌われるのも恨まれるのも負の感情だからなんてことないんだ。・・・でもパパリンは違った。初めてだよ、

褒められたのなんて」

フェイトは雷刃の襲撃者の顔が見えなかったが、声色でわかった。彼女は今、きつと笑っている、と。

「ああ、こういうのもいいなあ・・・って思ったんだ。・・・でも・・・」

「・・・でも？」

雷刃の襲撃者の声のトーンが低くなる。フェイトは聞き返さずにはいられなかった。

「もう終わりさ。夢は覚める。明日になれば、お前は元に戻り、僕は消える」

フェイトはおもわず体を起こしそうになった。

「そう、これは夢。誰が見たのか、それとも見られているのかわからない夢。僕の夢かもしれないし、お前の夢かもしれない」

雷刃の襲撃者は淡々と語り続ける。悔いなどないと、本望だと言っているかのように。

「胡蝶の夢なのさ」

清々しい声が静かな部屋に不釣り合いで、それはとても悲しく聞こえた。

「さあ、もう寝よう。そして、日常に戻ろう」

雷刃は軽いノリで最後にこう言った。

「おやすみ、そしてさようなら」

おやすみ、雷刃の襲撃者

さようならもうひとりの私

フェイトはいつしか深い眠りの海へと沈んでいった。

翌朝、フェイトは元の姿に戻った。

戻ったのだが・・・

「雷刃さん、あなた何故まだいるのですか？」

「・・・さあ？」

フエイトの質問に軽く返す雷刃の襲撃者。
しかも・・・

「・・・あと、そちらにいるのはソックリな子と、はやてソックリな子は誰ですか？」

雷刃の襲撃者のとなりには、髪をショートにしているが、小さいときなのはソックリな子と、少し目つきの悪い小さいときはやてソックリな子がいた。

「私は『星光の殲滅者』と言います。よろしくお願いします」

丁寧にお辞儀をするなのはソックリな星光この殲滅者と

「我に名前を聞くとは頭が高いぞ塵芥^{ちりあくた}が。

ふん、だが、特別に教えてやろう。我は『闇統べる王』だ。ありがたく思えよ塵芥」

ずいぶん態度がでかいはやてソックリな闇統べる王。

「なんだ？雷刃が分裂して増えたのか？」

「・・・僕はプラナリアじゃないよ、パパリン」

近藤の失礼な物言いに呆れながら返す雷刃の襲撃者。

そして、その隣で目を丸くする星光の殲滅者と闇統べる王。

「ほう、あなたが・・・」

「ふん、なかなか良い面構えではないか？」

二人はジロジロと近藤を見やり、ひとつの答えにたどり着いた。

「雷刃の襲撃者がそう言っているのなら、私も従いましょう。よろしく願います、父上」

星光の殲滅者は三つ指について深々と頭を下げる。

「ふん、よからう！我が父親に相応しいようだ。よろしく頼むぞ、親父どの！はーっはっはっはっはー！！」

偉そくに踏ん返り返って高笑いする闇統べる王。

フェイトと近藤は頭を抱えた。

そして遠くから

「わー！なのはママがちっちゃくなってるー！」

「ぎゃー！？はやてー！？大変だー！！」

と聞こえた。

第3話 触らぬ神に祟りなし（前書き）

はい、本編無視の番外編投稿ですよ!!

もう少ししたら投稿できると思います。

ユニコーンさん、Nakiさん、鉄 桜さん、コジロウさん、V O
o o zさん感想ありがとうございます！

そして、今回もはっちゃけましたよ！

とりあえず何も考えないで見たらいいじゃない！

第3話 触らぬ神に祟りなし

前回のあらすじ

ちっちゃいフェイトに続き、ちっちゃいのはとちっちゃいはやてが現れました。

「なんですか、その説明にもなっていない文章は？一度アスファルトの上で脳天から紅い花を咲かせてみますか？」

「あー、星光さん？一人で何をブツブツ物騒なこと言っておられるのかな？」

「ああ、すいません父上」

今近藤は部隊長室へと向かう途中だった。

そして、近藤の肩には『雷刃の襲撃者』、両隣で手を繋いで歩いているのが『星光の殲滅者』と『闇統べる王』である。

肩車では、雷刃の襲撃者と闇統べる王の間で一悶着あった。

「この下郎が。親父どのの一番高いところこそ我にふさわしいのだ！だからどけ！！」

「何言つてんだよ！パパリンの肩車は僕専用なんだ。誰にも譲らないぞ！！」

お互い譲らず、膠着状態が続いた。

そんなとき、星光の殲滅者がポツリと呟いた。

「では私は父上の腕に抱かれます。所謂お姫様だっこです」

二人の動きが止まる。

そして各々想像する。

自分がお姫様だっこされている姿を。

「ずるいぞ、星光の！僕もそれがいい！！」

「おのれ、とんでもない事を発見しおつて！褒めて遣わす！だが、親父どののお姫様だっこは我のものだ！！」

「最初に発言したのは私です。だから私に優先権があります」

やはり闇のカケラとはいえ、女の子である。お姫様というキーワードに敏感に反応してしまう。

三人でギヤーギヤー言いだし、收拾がつかなくなってきたので、近藤が怒った。

「喧嘩するなら全部無しだ。置いていく」

そついうと、三人は顔を青ざめさせた。

「わー！？ごめんなさいパパリン！」

「う、うむ！もう我達は喧嘩などせん！」

「だから置いて行かないで下さい」

ひしつと近藤の服を掴み懇願する三人。

達観してそうな星光の殲滅者までもが、遠慮がちに服を掴んでいるのがかわいいところである。

結局、肩車の権利はじゃんけんで決めることになり、死闘の末、雷刃の襲撃者が勝利を勝ち取った。

星光の殲滅者と閻統べる王は渋々近藤と手を繋いだが、まんざらでもないようで、しっかり近藤の手を握っていた。

部隊長室に入ると、そこには子供の姿になったなのはと、元に戻ったフェイト、はやて、ヴィータがいた。

「フェイト隊長が戻ったと思ったら、今度はなのは隊長ですか」

近藤はため息をついた。

なのはは近藤の物言いに反論する。

「す、好きで子供になったわけじゃありません！」

なのは顔を真っ赤にして怒るが、あの悪魔の威厳が微塵も感じられない。

今なのは9歳程の体格になり、髪もサイドポニーからツインテールにしている。

服は先日エレノアが小さくなったフェイトのために大量に買い込んでいたので、その中からパーカーとスカートを選んだ。

なのはの可愛さにノックアウト寸前のフェイトは、我慢できずなのはの頭を撫でだした。

「ちっちゃいなのはもかわいいにゃ〜」

「もー！フェイトちゃんも子供扱いしないで！」

なのははプンス力怒るが、かわいいので全然こわくない。そんな光景を、星光の殲滅者はじっと見ていた。

「あれ、そういえばシグナム副隊長は・・・いや、そんなことより今朝ヴィータ副隊長が叫んでいませんでしたか？あれで俺ははやて隊長が子供になったのかと思いましたか・・・」

近藤がシグナムがいないことに気づき、キョロキョロしていたが、今朝の叫び声を思い出した。

確かヴィータが、はやてー！？とか言っていたはず。

あの叫び声で、近藤ははやてが子供になったと思っていた。だが、目の前にいるはやては19歳の姿のままだ。

なのははヴィヴィオの叫び通り子供になっている。

では、ヴィータのあの叫びはなんだったんだろうか？

そんなことを考えていると、はやてとヴィータがニマ〜っと笑い出した。

「くくくっ・・・ああ、アレか。アレはな・・・くひひひ」

ヴィータが口を手で押さえ、笑いを堪えている。隣ではやてもいやらしい笑みを浮かべていた。

「ふっふっふ。近藤さん、シグナムやったらな・・・ここにおるで！！」

はやてはバツと何か大きなモノを持ち上げ、近藤の目の前に突き出した。

それは、5、6歳程の、ピンクのロングヘアをポニーテールにし、幼い顔立ちに意志の強そうな瞳の少女だった。服はどこかで見たことがあるものだった。

そう、以前ヴィヴィオが着ていた服そっくりのTシャツとスカートだった。

少女はなにやらプルプル震え、顔を赤くする。

そして我慢できなかったのか叫びだす。

「あるじはやて！もうわたしであそぶのはやめてくたしやい！」

・・・少し噛んだ。

近藤は目をまるくした。

「まさか・・・シグナム副隊長ですか？」

「ほかのなににみえる？」

シグナムはピクピクこめかみを痙攣させる。

顔が赤いのは怒りか、羞恥か。

「シグナム副隊長の子供では？」

「わたしはどくしんだー！！」

シグナムははやてに持ち上げられながら、手足をバタバタさせ怒りを表現する。

「いやゝシグナムはちっちゃくてかわいいでちゅねゝ」

ヴィータがニシシと笑いながらシグナムの頭を撫でる。

シグナムはプルプル震え、我慢の限界に達したのか、はやての手を振りほどき見事着地した。

「おのれ、バカにしおって！もうゆるさん！レヴァンティン！！」

シグナムはレヴァンティンを起動させ、鞘から抜こうとした。
だが……

「……くっ！？うでがみじかくなってさやからだせない！！」

シグナムは必死にレヴァンティンを抜こうとするが、シグナムの現在の身長はレヴァンティンより小さい。

必然、腕の長さも短くなる。

鞘を持ちながらレヴァンティンを抜こうなど不可能である。

はやてが後ろを向き、肩を震わせている。笑いを堪えているのだろ
う。

ヴィータは構わず腹を抱えて大笑いしていた。

見かねた近藤が鞘を持ってやり、シグナムはレヴァンティンを抜いた。

抜いたのだが・・・

「くっ！？お・・・おもい・・・！」

シグナムはレヴァンティンを持ちながらフラフラしだした。やはり子供に刃物を持たせるのは危険である。

「シグナム、もうちょい大きくなってから持とうな」

はやてはピクピク頬を痙攣させながらレヴァンティンを取り上げた。

「ああっ！？レヴァンティン！？あるじはやて！？」

シグナムは涙目だった。

とにかく、こうなった原因を探ることになった。

原因であろうと推測される星光の殲滅者と閻統べる王は経緯を話し出した。

概ね雷刃の襲撃者が言っていたことと同じ内容だった。

「ということは、なのは隊長も父親を望んだと？」

「いえ、彼女の御尊父は存命でらっしゃる。その可能性は低いでし

よう」

星光の殲滅者は淡々とした口調で話す。

「じゃあどうということだよ」

ヴィータが腕を組んで星光の殲滅者を睨みつける。

「それはご本人に聞いてみては？」

星光の殲滅者は手の平をなのはに向けた。

なんというか、礼儀正しい子である。

そして、話を振られたなのは居心地悪そうにソワソワしていた。

「その・・・フェイトちゃんが小さくなったのを見て・・・子供の頃に帰りたいな・・・って、少し思っちゃって・・・」

「現実逃避かよ」

ヴィータがバツサリ切り捨てる。

なのはは、はうっと言って胸を押さえた。相当ダメージを喰らったようだ。

「で？オメーはなのはの何処に張り付いてたんだ？」

「・・・胃粘膜に紛れて・・・」

「・・・よく溶けなかったな・・・」

星光の殲滅者の潜伏場所に、呆れたというか、感心したというか、

曖昧な表情をするヴィータだった。

「でははやて部隊長、シグナム副隊長が小さくなった理由を聞きましょうか？」

近藤ははやてを見た。

はやてはシグナムを膝の上に乗せぬいぐるみのように抱いている。

シグナムは顔が真っ赤なままだ。

「え？あ、ああ、シグナムのことか？ただ私が小さくなるより、シグナムが小さくなったらおもしろいんじゃないか、思ってたな」

「な！？あるじははやて！それはほんとうでしゅか！？」

シグナムはすごい剣幕ではやてを見る。
噛んだのもチャラにしてしまう迫力だ。

「うん、ホンマやで」

シグナムはガクツと肩を落とした。
おもしろそうだから、という理由で子供にされたのか。
シグナムは泣きそうになった。

そこへ、肩をポンと叩く者がいた。
見上げると、それは闇統べる王だった。

「そう落ち込むな塵芥。今に良いことがある」

闇統べる王はシグナムを慰めた。
だが、これはシグナムには逆効果だった。

「げんいんであるきしゃだが、それをいうにゃー!!」

もう噛み噛みである。

シグナムは両手を振り上げキーキー叫んだ。

ちなみに、闇統べる王ははやての骨髓に紛れていたという。
とんでもないやつだ。

「・・・おまえら元は魔力だろ？そんな物理的に体に付着してるもんか？」

ヴィータの鋭いメスのようなツツコミにマテリアル3人娘は目を背けた。

「おい、こっち向け、こっち」

「・・・この世には知らなくていい事もあるんですよ、鉄槌の騎士」

「・・・すいません」

哀愁漂う星光の殲滅者の言葉におもわず謝るヴィータだった。

「・・・まあ、なのは隊長は小さい自分に満足したら願い成就とみなされるわけだな？」

「はい、そのようです」

近藤の質問にコクリと頷く星光の殲滅者。

「じゃあ、シグナム副隊長は、シグナム副隊長が満足すればいいわけか」

「それは違うぞ親父どの。この塵芥が少女になったのは、そのしまりのない顔をした愚か者が願ったからだ。だから、その愚か者が満足する必要があるのだ」

闇統べる王はシグナムとはやてを指差す。

なるほど、はやてが望んのはシグナムが小さくなることだ。だから、はやてが願望を成就すれば解決となる。しかし、近藤は不安になった。

「はやて部隊長の欲望は底無しのような気がする」

「む、失礼やな近藤さん。私も限度は知つとるよ」

はやては少し頬を膨らませた。

「じゃあシグナム副隊長を愛するのに満足するときありますか？」

近藤の言葉にはやては少し考えた。
そして、出した答えが・・・

「一生そばに置いときたい！」

無限の欲望だった。

前日同様、なのはとシグナムが子供になるうが、子供が更に二人増えようが時間は流れ、仕事はいつものようにある。

朝の訓練をするために近藤達は仮想シミュレータへ行き、ティアナ達に説明する。

「・・・」

ティアナの呆れた表情がイタい。
なのはは目を逸らす。

「ああ、小さいなのはさんが二人に・・・どちらかお持ち帰りできないかな・・・」

スバルが物騒なことを口走る。

「なのはさん・・・シグナムさん・・・それにはやて隊長・・・
いい・・・」

エリオがなのはとシグナム、そして新たに増えたマテリアル二人を見て惚けていたが、キャロからの刺し殺されそうな視線に生命の危機を察知し、目を逸らした。

今日の訓練は星光の殲滅者と闇統べる王が行った。
自分からやりたいと申し出たのだ。

なのは二人の実力を知りたかったので二つ返事で了承した。
フェイトとヴィータも異論はないようだ。

シグナムはデバイスをはやてに取り上げられたので不参加、雷刃の
襲撃者は近藤の肩車を降りようとしないので不参加である。

そして、訓練もとい、模擬戦が始まった。

「ルベライト、ブラスト・ファイアー！」

「ぎいやあああつ!？」

星光の殲滅者はスバルとエリオをバインドで捕縛し、容赦なく砲撃
した。

「心滾る、良き戦いでした」

星光の殲滅者は撃墜され、目を回しているスバルとエリオにそう声
をかけた。

一方的すぎて良い戦いには見えなかったが。

「絶望にあがけ塵芥！エクス・カリバー!!!」

「いやああああつ!？」

闇統べる王はなんの躊躇もなく、フルドライブで特大の砲撃魔法を
放つ。

一応仮想シミュレータが壊れないように威力を押さえて放ったようだが、的にされたティアナとキャラはそれでも堪ったものではない。

「永劫の闇に沈むがいい！」

闇統べる王は見下す冷たい視線でのびているティアナとキャラを見た。

そっち方面の趣味を持つ方なら、幼女ハアハアと言っているかもしれない素敵な視線だった。

「いただきます」

皆で仲良く食堂で朝食を採る。

マテリアル3人娘が近藤の膝の上で食べようとし、またケンカに発展しそうになったが、近藤はそれを却下し、大人しくそれぞれの椅子に座らせた。

相変わらず雷刃の襲撃者は食べ方が乱暴で、ガツガツかきいれている。

反対に星光の殲滅者と闇統べる王はテーブルマナーをしつかり守り、静かに食べていた。

雷刃の襲撃者は口のまわりがソースなどで汚れてしまっているので、前回同様見かねた近藤がナプキンを持ち、口を拭いてやる。

雷刃の襲撃者もそれを待っていたようで、ん、と声をもらし顔を近藤に向け、口元を綺麗にされるまで目を瞑りジツとしていた。

「・・・よし、いいぞ、雷刃。しかし、もう少し綺麗に食べれないか？」

「へへっ、ありがとーパパリン！」

近藤の注意も効果はないようで、雷刃の襲撃者は近藤に礼を言うともたガツガツ食べだす。

そんな雷刃の襲撃者を見ていた星光の殲滅者と閻統べる王の顔は、驚愕の色に染まっていた。

そして、なにやらいそいそと不自然な動きをとったかと思ったら、二人の口元が不自然に汚れていた。

「父上、お願いします」

「親父どの、我も我も！」

閻統べる王はテーブルから体を乗り出し、目を爛々と輝かせてせがみ、逆に星光の殲滅者は無表情ながら、少し頬を桃色に染めて近藤をジッと見ていた。

近藤は苦笑しながらも、二人の口元を拭いてやった。

「近藤さんは子煩悩だね」

なのはは近藤とマテリアル3人娘のやりとりを一部始終見て、ポツリと呟いた。

体が小さくなったからといって、今のところ不都合はないのでいつも通りヴィヴィオの横で朝食を採っていた。

「ていうか、すごく懷かれてるよね」

フェイトも近藤とマテリアル3人娘の距離の近さに驚いていた。
前日は小さくなった自分も近藤にベッタリだったので、それを思い出したのか少し顔が赤い。

「元々子供好きなんちゃうか？まあ、あの顔やったら変な誤解受け
そうな単語やけど」

はやてはパンを小さくちぎり、口の中へ入れた。
そして、残りのパンをシグナムへ向ける。

「ほい、シグナム、あーん」

今シグナムははやての膝の上に強制的に座らされていた。
渋々出されたパンを口に含むシグナム。

「おいちいでちゅか」

はやてが赤ちゃん言葉を使う。

シグナムは顔を真つ赤にし、小さく頷く。

「は、新しい癒しの誕生や」

はやてのまわりがキラキラ輝く。

横ではヴィータがニヤニヤしていた。

「よかったな、シグナム！はやてに構ってもらえて！」

シグナムは反論する気力を溜めているのか、普段の鍛練の賜物が、俯きプルプル震えて怒りを我慢していた。

そんなほんわかとした空気の食堂に、起きたばかりのエレノアがやってきた。

「さーて、今日は何キロ胃袋へおさめようかしらー？」

もう言っていることが目茶苦茶だ。

そんなエレノアを見た星光の殲滅者と闇統べる王は驚いていた。

「あれは・・・闇の書の管制人格？」

「生きていたのか!？」

おもわず立ち上がり声を荒げる。

だが、エレノアはキョトンとしていた。

「・・・あら？あらあら？もしかして増えたの、ご主人様？」

「まあ、イロイロ事情があつてな・・・」

エレノアが近藤をご主人様と言ったことに、更に驚く二人。

「どういふことですか、父上」

「闇の書のマスターはあの小娘だろう？どういふことなんだ!？」

詰め寄る二人に、近藤は『源書』と『夜天の書』の関係を説明した。

「ほう、では源書がマスターデバイスということですか。実に興味深い」

「成る程、そつくりなのも納得だな」

うんうんと頷く二人だが、あることに気がついた。

「ところで雷刃の。あなたは彼女を見ても驚きませんでしたか、知っていたのですか？」

と星光の殲滅者はそういいながら雷刃の襲撃者を見た。

雷刃の襲撃者はボーッととして、口をだらしく開けてエレノアを見ていた。

その顔で星光の殲滅者と闇統べる王は全て理解した。

（こいつ我達より早く目覚めてたのに気づいてなかったのか？）

（まあ、雷刃ですから）

（そうだな、バカだからな）

ハア・・・

目で会話した二人はため息をついた。
そんな二人を余所に、雷刃の襲撃者はエレノアを見ながら考えてい

た。

パパリンのデバイス？

で、闇の書（夜天の書）のオリジナル？

ピコーン！

雷刃の襲撃者は閃いた！

「パパリンのデバイスだから、エレノアおばさ・・・」

雷刃の襲撃者が言い終わる前に、エレノアが雷刃の襲撃者の頭を見えない速度でガシツと掴んだ。

掴んだ所からミシミシ聞こえる。

そんなエレノアの顔は笑顔だった。

「後足で砂を掛ける、命あつての物種、言わぬが花、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らん、驕る者久しからず、剃刀の刃を渡る、君子危うきに近寄らず、後悔先に立たず、転ばぬ先の杖、肉食った報い、死人に口なし、仏の顔も三度、口は災いの元、さて私は何が言いたいでしょう？」

すげーいい笑顔で知る限りの物騒なことわざを言うエレノアだったが、一言一言に殺気がこもっている。

鈍い雷刃の襲撃者でも、さすがにわかった。

冷や汗をドバドバ流し、顔を真っ青にして、ガタガタ震えている。

「は、はひっ！す、すすすいませんでした、エレノアお姉さん！

「！」

「よろしい」

エレノアは笑顔のまま雷刃の襲撃者の頭を離し、星光の殲滅者と闇統べる王の方を見た。

二人は慌てて右手をあげて敬礼する。

「了解しました。姉上」

「う、うむ、わかった、姉どの！」

二人とも汗をダラダラ流していた。

エレノアはその返事に満じたのか、スキップして食事を取りにいった。

「パ、パパリ〜ン！めっちゃ怖かったよ〜！」

雷刃の襲撃者は半泣きで近藤にしがみついた。

「あれはダメだ。我でも怖い」

「まさに触らぬ神に祟り無し、ですね」

闇統べる王と星光の殲滅者も顔を青ざめさせて震えていた。

第4話 フレッシュパワー（前書き）

申し訳ありません。

本編のほうがいひのほか難産です。

できるだけ早くに投稿したいのですが、私事で申し訳ないのですが
プライベートで少々トラブルがあり、まだ投稿が難しいかもしれま
せん。

とりあえず、この番外編は書き上げました。
よろしく願ひします。

第4話 フレッシュパワー

前回までのあらすじ

マテリアル3人娘が近藤好き好きだ〜い好きになりました。

「・・・まあ、間違っではないいな。だがボキャブラリーがないぞ
塵芥」

「闇の、壁に向かって何ぶつぶつ言ってるんだ？」

「おお、なんでもないぞ、親父どの！」

朝食も終え近藤は自分の仕事にとりかかっていた。

といっても、いつも通り隊長達の書類仕事を近藤が肩代わりしているのだが。

マテリアル3人娘は大人しくしているという条件で近藤の仕事を覗き見していた。

いつも通り、ありえない速度で右手が動き、モニタには無数のウイ

ンドウが現れては消えて、現れては消えてを繰り返している。

「ほえ、パパリンすごいな」

『雷刃の襲撃者』が感嘆の声を漏らす。

「素晴らしい技能です。これはマルチタスクの訓練にもなりますね。戦略の幅が広がります」

感心するのはいいが、なんでもかんでも戦いに結び付けようとする少し危ない『星光の殲滅者』。

その辺りはオリジナルと似ている。

「流石は親父どの、我も鼻が高いぞ！」

よくわからない威張り方をする『閻統べる王』。

そんな4人の横では、デスクワークに悪戦苦闘している者が二人いた。

「ふええ、コンソールが大きくて打ちにくいよー」

「くっ、いすのうえでたたないとモニターがみえないとは・・・」

体が9歳児になり、子供には大きいコンソールの扱いに泣きをいれているのはと、5歳児程に縮み、椅子に座つてもモニターが見えず、椅子の上に立ってデスクワークをする羽目になるシグナムだった。そんな二人をヴィータはクスクスと笑う。

「お子ちゃまは大変でちゅね、ぷつくく！」

なのはとシグナムはヴィータを睨む。

「人事だと思つてー！ヴィータちゃんのバカー！」

「ヴィータめ・・・もともどつたらおぼえておけよ」

二人の心はどす黒く渦巻いた。

そんな光景を、はやてはドアの影に隠れてハアハア言いながら覗き見していた。

「ああ・・・シグナムたんハアハア・・・」

・・・仕事はどうした？

さて、とりあえずこの現状はいただけない。

なのはもシグナムも小さくなり、機動六課の仕事には近藤が行えばいいだけなのだが、外回りはそうはいかない。

なのはは戦技教導官という肩書きを持つため、そこかしこから教導のお誘いがあるし、シグナムにしてもイロイロあるのだ。

彼女達の性格上、嘘について仕事をキャンセルすることはしない。

そして、重要度から考えて、まずはなのはを元に戻そうということになった。

「さて、雷刃。フェイト隊長は一日で戻ったが、なのは隊長も戻るかな？」

近藤はあらかじめ書類仕事を終え、ロビーでマテリアル3人娘とくつろいでいた。

そして椅子に座って足をぶらぶらさせながらフルーツオ・レを飲んでいる雷刃の襲撃者に聞いてみた。

「んー、どうだろ？小娘の場合、パパリンと一緒に行動するだけで成就したけど、あの高町ナントカのは動機が曖昧なんだよな・・・」

「曖昧？」

「明確な願望が見えないということです、父上」

近藤が首を傾げていると、ちょこんと行儀良く座リイチゴオ・レを飲んでいた星光の殲滅者が答えた。

「フェイト・T・ハラオウンの場合は、父上に対して『父親』を望みました。ですが高町なのはの場合は、子供になって何がしたいのかということが明確になっていないのです」

「その願望がわからんと対策も立てることができん。成就是しないということだ」

闇統べる王がダルそうに体勢を崩して座りながらバナナオ・レを飲み、答えた。

近藤はしばらく考え込んだが、とにかく本人に聞くしかない結論付けた。

「・・・よし、考えていても仕方ないな。なのは隊長を召集して問い詰めよう」

「拷問ですか？」

「そのかわいい顔でグロい事をさらっと言っな」

星光の殲滅者が目をキラキラさせてとんでもない言葉を発したので近藤は注意した。・・・まあ聞かないだろうが。

小さな体でデスクワークをこなしていたなのは、普段の何倍も体力を使い、ぐったりとしていた。

「なのは、お疲れ様」

フェイトが紅茶を持ってなのはに近寄った。

「あ・・・フェイトちゃん」

なのはは机に突っ伏していたが、フェイトの声が聞こえたので顔をあげた。

かわいらしい顔が若干やつれていた。

「なんか、今まで普通にこなしてた仕事なのに倍以上の時間と力使うよー」

泣きをいれるなのは頭を撫でるフェイトはニコニコしていた。

「弱気なのはもかわいいにゃ〜」

怒る気力もないのはジト目でフェイトを見ながら撫でられ続ける。

なのははフェイトの持ってきた紅茶を手に取り、一口飲んだ。

「・・・にがつ」

なのはは紅茶が苦くて顔をしかめる。

「え？いつも通りのリーフ使ったんだけど？」

長年なのはのそばにいるフェイトは、彼女の好みを把握している。当然、紅茶の好みの葉や味も把握しているのだ。

「体が子供になったから味覚も子供に戻ったんじゃないですか？」

「あ、近藤さん」

なのはとフェイトが振り向くと、そこには近藤と手を繋いだ星光の殲滅者がいた。

ちなみに、雷刃の襲撃者と闇統べる王はヴィヴィオと仲良くお昼寝である。

「少しお聞きしたいことがあります」

「え？なんですか？」

近藤の問いに首を傾げるなのは。

「なのは隊長が子供になった経緯です」

「あなたはフایت・Ｔ・ハラオウンを見て子供に戻りたいと言いました。ですが、それだけでは動機が曖昧なのです」

近藤の横にいた星光の殲滅者がなのはの飲んでいた紅茶を持ち、匂いを楽しんでいた。

「曖昧？」

「そうです。子供になって何をしたいのか、明確な理由がありません。というわけで尋問・・・もとい、拷問・・・いえ、お話をしにきました」

「今すっごい物騒なこと言ってたよね!？」

なのはは焦った。自分と同じ顔、同じ声で物騒極まりない言葉を連発する星光の殲滅者に危機感を覚えた。

だが、本人は知らない。なのはの口から出る『お話』という言葉は、拷問、尋問と同義だということを。

「とにかく、根本的な事がわからないとこちらも対処できません。ですので、なのは隊長の望みを聞きたいんです。子供になって、何がしたいのか、ね」

近藤はなのはをまっすぐ見て問いただす。
そんな視線になのはは思わず息を呑んだ。

（・・・近藤さんの顔をこんなに間近で見たの初めてかも。よく見たら、ウチのお父さんとは違う男らしい感じだけど、すごく安心する雰囲気のある人だなあ・・・）

「んん！オホン！」

見つめ合う近藤となのはだったが、フェイトが咳ばらいをし、なのはははっとなる。

いつの間にか近藤に見とれていたようだ。
フェイトの視線が痛い。

とにかく、なのはは具体的な事を考えた。

「うーん・・・たぶん、昨日のフェイトちゃんと雷刃ちゃんを見て思った事なんだけど・・・」

なのはは天井を見上げた。

「最近の私たちって、あんなにおもしろい笑ったり、叫んだりしてないーって。いつの間にか笑顔が少なくなってるんじゃないかな・・・て」

「・・・ほっ」

なのはの独白のような呟きに、目を細める星光の殲滅者。

「つまり、子供の頃のように皆で笑顔でいたいと、そういうことですか」

「うーん・・・たぶん」

星光の殲滅者は顎に手を当てながらなのはを見遣るが、当のなのは首を傾げて難しそうな顔をしている。

そこで、近藤は太股をパンツと叩く。

「わかりました。ではなのは隊長にはおもいつきり笑って楽しんでもらいましょう」

「というわけでやって来ました遊園地！」

「いえーい！」

「パパリンさいこー！」

近藤は、なのはとヴィヴィオ、マテリアル3人娘にエリオ、キャロ、フェイトを連れてテーマパークに来ていた。

エレノアも一緒に来たが、マテリアル3人娘が怯えるために留守番となった。

闇統べる王と雷刃の襲撃者はハイテンションだ。

最初、マテリアル3人娘は遊園地という単語を聞いても無反応だった。

「遊園地ってなに？」

雷刃の襲撃者が首を傾げた。

なるほど、マテリアル3人娘は遊園地などの娯楽施設の知識がない

ようだ。

そこで、近藤は遊園地の概要を説明した。

「パパリン！行こう、今行こう！すぐ行こう！ファステスト行こう
！！」

よくわからない単語を喋る雷刃の襲撃者。

「う、うむ！なんともココロオドル施設ではないか！早くいくべき
だ！！」

ソワソワしだした闇統べる王。

「あなた達・・・わかってますか？これは高町なのはを元に戻すた
めの行動なんですよ？」

「・・・星光の、そんなポーチを持って帽子被って行く気満々の姿
じゃあ説得力ないよ・・・」

「・・・いいじゃないですか。私も楽しみなんです」

星光の殲滅者は顔を赤らめた。

「わーい！ゆーえんちー！」

ヴィヴィオははしゃぎ回っている。

エリオとキャラも高まる気分を抑えられないようで、ソワソワして

いた。

「エリオもキャラも、遊園地は久しぶりだね？」

「はい！」

フェイトの問い掛けに元気よく返事をするエリオとキャラ。

その笑顔を見ただけで、連れて来てよかったとフェイトは思った。エリオもキャラも、最近は仕事仕事で全然休みもなかったし、真面目な二人は少しの休息でも訓練などに費やす。

まだ子供なのだから、子供らしいことをさせたい。それが、フェイトの願いだった。

「さて、まずは何処から行くか？」

近藤がパンフレットの地図を開いて物色する。

「お化け屋敷！」

「却下！！！」

雷刃の襲撃者の提案を全力で拒否するなのは。胸の前で腕を交差させ、バツテンをつくった。

雷刃の襲撃者は、ちえーと言いながら口を3のように尖らせた。

「我はアレに乗りたい！」

闇統べる王が指差した先には、フリーフォールがあった。

フリーフォールとは、簡単に言うと、高いところから落下するアトラクションだ。

「・・・いつてらっしゃい」

キャラが顔を青くして手を振った。

「何を言っている。貴様も来るのだ」

闇統べる王はキャラの腕を掴み、フリーフォールへと向かった。

結局、全員が乗り、皆で落下の恐怖を味わった。

フリーフォールを降りてからも、マテリアル3人娘は元気だった。

「親父どの！我はあの『サイクロン』なるぐるぐる回る乗り物に乗りたい！」

「パパリン！僕はあのウォータースライダーに乗る！」

「父上、私はメリーゴーランドに乗りたいです。あ、勿論父上が私を抱いてですよ？」

どこからそんなパワーが出てくるのかというくらい、はしゃぎ回るマテリアル3人娘。

エリオとキャラ、ヴィヴィオもマテリアル3人程に感化されたのか、3人程ではないが、テンションが高い。

逆に、近藤、フェイト、なのはは疲れきっていた。

「子供は怪獣とはよくいったもんだ・・・」

「・・・あの子達の小さい体の何処にあんな体力あるんだろう？」

近藤とフェイトはベンチで休憩していた。

日頃の訓練で体力には自信があつたが、おそろべし子供。

なのはもフラフラとしたあしどりでベンチへと向かい、グッタリとしていた。

「だ、だめ・・・もうついていけない・・・」

息も絶え絶えである。

そんななのはに、雷刃の襲撃者は近付き、腕を掴んで連れていこうとした。

「なにへばってるんだよ！ほら次行くぞ、次！！」

「ちよつ、待つて。休憩させて・・・」

なのはの声に力がない。

雷刃の襲撃者はそんなのはを見てため息をついた。

「はぁ。体は子供でも、中身はオバサンだな」

ピクン

今なんつった？

オバサン？

このピチピチの１９歳に対して？

なのははブルブル震えていた。

雷刃の襲撃者はなのはを見てニヤリと笑った。

「なんだ、悔しいか？じゃあ証明してみろよ、オバサンじゃないってな」

雷刃の襲撃者はなのはを挑発する。

そして、なのははその挑発に乗った。

「いいよ、証明してあげるよ！１９歳のフレッシュパワー見て驚くがいいの！！」

・・・なのはが壊れた。

大股でズンズンと歩き、ちびっこグループの待つ場所へ赴く。

「どっからでもかかってくるがいいの！！」

喧嘩腰で叫ぶなのはを見たヴィヴィオは泣きそうになっていた。

「なのはまた・・・野蛮・・・」

第5話 闇の存在（前書き）

久々に投稿しました。

本当は、色々アイデアがあるんですが、なかなか書き起こすのに――苦勞しています。

え？面倒臭がり？

そうですね、なにか？

第5話 闇の存在

前回のあらすじ

なのはさんが年甲斐もなく無理をしました

「・・・ちよつと、後で機動六課裏に來なさい。・・・ゆつくりお話ししようよ?」

「なのは隊長、その草むらに何かいるんですか?」

「え? ううん、なんにもないよ!」

現在、近藤とフェイトは、ちびつ子（エリオ、キャロ、ヴィヴィオ、ちびなのは、星光の殲滅者、雷刃の襲撃者、闇統べる王）を連れて遊園地へ行った帰り道だった。

雷刃の襲撃者は遊び疲れてしまい、近藤におんぶされ寝ている。

「親父どの・・・我も眠い・・・」

近藤の服を掴んで歩いている闇統べる王は、ふらふらしたあしどりで眠そうに目をこすっている。

「んー、どうしようか・・・雷刃を起こすわけにはいかないしな・・・」

こうなることが予想できたのに、電車で来てしまったことを悔やむ近藤。

「そんなこともあるのかと思い、やって来たで！」

近藤が悩んでいると、どこからともなく聞こえた声に振り向くと、そこにははやてとちびシグナムがいた。

「くるまをもつてきたぞ」

はやての隣で小さい体ながらも胸を張るシグナム。
二人の後ろには、バンがあつた。

「・・・ふむ、4列シートですか。これはありがたいですね。じゃあこれに乗って帰りましょう」

そういうや、皆車に乗り込み近藤の運転で機動六課へと帰った。
いつもならフェイトが運転すると言い出しそだが、フェイトは普通自動車免許しか持っていないため近藤に運転を任せた。

六課へ着き、夕食もそこに済ませた皆は、風呂に入ろうということになった。

「ねえ、今日もパパリンとお風呂入っちゃダメなのか？」

雷刃の襲撃者は指をくわえてフェイトに言う。

「ダメです」

フェイトはバツサリだ。

前日、フェイトは雷刃の襲撃者と共に風呂に入った。

するとどうだろう、自分の小さいときの身体そのままだったのだ。

これは恥ずかしい。

間接的に近藤に自分の小さいときの裸体を見せているのと同じではないか。

雷刃の襲撃者はちえーと言いながら拗ねた。

「何故我等が親父どのと風呂を共にできんだ？我等の身体はいわゆる『子供』だ。なんの劣情も湧かんだろう」

「そうですね。こんな起伏の乏しい身体で欲情する人間はいないでしょう？」

闇統べる王と星光の殲滅者が反論する。

その言葉にはやてとなのはは少し傷ついた。

（いくら子供の頃の身体やからて、そうポンポンと言われたら傷つくわ・・・）

（うつ・・・なんだか私が攻撃されてるみたいで苦しいよ・・・）

「まあ、アレだ。女同士の裸の付き合いもいいもんだぞ？」

ヴィータは手を頭の後ろにわまし、さりげなくマテリアル3人娘を誘導する。

そして、3人娘は渋々納得し、女風呂へ入った。

柱の影でヴァイスが悔しそうな顔をしていたのは気のせいだろう。

風呂から上がり、昼間の疲れもあり早々に寝ようということになった。

「パパリンと寝るのはいいだろ？昨日も寝たし」

「うーん・・・仕方ないかな・・・」

フェイトは腕を組み、悩みながらも了承した。
それに驚いたのは閻統べる王だった。

「なっ！？き、貴様、親父どのと夜を共にしたのか！？」

顔が真っ赤になり、あわてふためく。

「何か問題が？」

星光の殲滅者は首を傾げた。

「おまえ達、わからんのか！男と女が一緒に寝るのだぞ！！」

「あー・・・まあそうだね」

雷刃の襲撃者はもう眠いのか、返事も覇気がない。

「・・・わ、我と親父どの間に子供ができるではないか！！」

闇統べる王は顔を茹蛸のようにしてそう宣った。

「くっ・・・いや、親父どのとの間に生まれる子供ならば、さぞ強い子だろう！雷刃も頑張ったのだ、我も頑張って玉のような子を生もうではないか！！」

闇統べる王は拳を握りしめ決意を固めた。

そんな彼女に対し、雷刃の襲撃者と星光の殲滅者は恥ずかしそうに俯いていた。

「すみません。闇統べる王はこの手の知識がゼロに近いのです」

「僕でもここまでネンネじゃないよ」

なのはとフェイトは苦笑し、はやては肩を落としていた。

「は、恥ずかしい・・・子供の私、恥ずかしいで・・・」

「闇の、ちなみに子供はどうできると思う？」

雷刃の襲撃者は闇統べる王に質問した。

闇統べる王は恥ずかしそうに胸の前で指を絡ませながら「ニョ、ニ

ヨ言い出した。

「そ、それはだな・・・男と女が裸になって、ちゅ、ちゅーをしてだな・・・一つの布団で寝るのだ！」

「・・・大雑把には間違ってないけど、決定的に大事なところが欠如してるな」

近藤が顎を撫でながらボソリと呟いた。

さて、キチンとした知識を教えるか、はぐらかすか・・・はぐらかすにしても、コウノトリが運んでくるなんてこと言っても、今時の子供に通用するだろうか？

「あれ？子供ってコウノトリが運んできてくれるんじゃないんですか？」

エリオが真顔でそうおっしゃった。

「エ、エリオくん！？」

キャラは信じられないものを見るような目でエリオを見た。

その横ではフェイトが恥ずかしそうに俯いていた。

どうやら、エリオのコウノトリ知識はフェイトが教えたことらしい。そもそも、ミッドチルダにコウノトリがいるのかどうかも疑問だ。

「ところで、コウノトリってなんなんですか？」

・・・ほら、自分で言うておいてエリオもわかってない。仕方がない。

「まあ、そのあたりはもつと大きくなつてから教えてあげよう。とりあえず、普通に寝ている分には子供はできないから。安心していぞ」

近藤は逃げた。

この辺りの年齢の子供は扱いが難しい。

正しい知識を教えてあげないと、あとあとんでもないことになるかねない。

近藤は闇統べる王の頭を撫でてごまかした。

「・・・どちらにしろ、私達のような小さい身体では、大きな父上を受け止めることはできないでしょうしね」

「星光の、なにげにエロいぞ、そのセリフは」

狙って言っているのかわからない星光の殲滅者の言葉に、冷静にツッコむ雷刃の襲撃者だった。

皆が寝静まった夜、星光の殲滅者は近藤の部屋からこっそり抜け出て、ロビーで一人佇んでいた。

窓から見える月を眺めているのか、星の瞬きに思いを馳せているのか、それとも何も見ていないのか。

暗いロビーに月明かりのみの明かりのなか、一人空を見上げる星光の殲滅者は、一つの芸術のようだった。

「何か用ですか、高町なのは」

星光の殲滅者は後ろから感じる気配に対し、振り向きもせず口を開いた。

ロビーにきた人物ははたしてなのはだった。

寝間着である白いワイシャツを纏い、細く白い脚が覗く。

シャツが大人サイズで体に合っていないので袖を何回も折っていたり、ダボダボなのはご愛嬌か。

髪はおろしていて、子供の体型ながらいつもよりも何故かアダルトな雰囲気漂っていた。

「・・・なんとなく、ここにあなたがいると思ったの」

「そうですか」

星光の殲滅者は目だけをなのはに向け、すぐに興味を無くしたのか、また空を見上げた。

なのはは星光の殲滅者とゆっくり話をしたかったのだ。だが、当の星光の殲滅者はなのはの存在など興味無いとばかりに空を見続けた。

「・・・何か見えるの？」

星光の殲滅者がずっと夜空を見上げているので、聞きながらもなのはも空を見上げる。

「わたしの見つめる先が気になりますか？」

気がつくと、星光の殲滅者は夜空を見ず、じっとなのはを見つめていた。

その瞳は光が無く、肌も陶磁器のように白く、まるで人形のようにで、

とても生きているようには見えなかった。
月明かりが星光の殲滅者の肌をより青白くさせ、現実感を無くさせる。

「高町なのは、あなたにはこの空と同じ、無限に広がる未来がある」
星光の殲滅者は手をあげ、星を掴むような仕草をとる。

「だが、私にはそんな輝かしい未来はない」

握りしめた手の力を抜き、ゆっくりと手を広げる。

「私は誰からも必要とされない、居てはならない存在だから」

感情というものが欠如しているのではないかと思っていた表情に、
僅かながら悲しみ、寂しさというような感情が見えた。

「そんなこと・・・」

「ないとは言わせません。私は闇、人間は闇を嫌う。小さな羽虫や
蛾のように光に群がる。人間が目を背ける負、それが私達です」

なのははごくりと喉を鳴らした。

「栄華を極めたようなこのミッドチルダ、首都クラナガン。通りも
それに相応しくきらびやかで、光と人間の絶えない場所でもある。
ですが、一步道をはずれると、そこは異臭漂い、泥や汚物にまみれ、
人間も尊厳など無いような生活をしている。・・・どうしました？
顔色が優れないようですが」

からかうでもなく、星光の殲滅者はそう言いなのはを見た。
なのは顔は真っ青になっていた。

気持ち悪い。

自分と同じ姿で、とても自分が発しないような言葉を淡々と繰り出している。

聞きたくない。

なのはわかりあえると思っていた。
今でもそう思っている。

だが、星光の殲滅者は根本から自分と違う。
そう思わせるような言動だった。

「どうやら、あなたは私とわかりあえると思っていたようですね。
ですが残念、私とあなたは真逆、正と負、光と闇、わかりあうなど
不可能です」

星光の殲滅者は流し目でなのはを見遣る。
その表情は相変わらず人形のようにだった。

「あなたは闇を見ない。闇を肯定しない。自分の中にある暗く、深い闇を知らうとしない。・・・光が強く輝けば、闇もまたより暗く、深くなるのに」

もうやめて

聞きたくない

「聡いあなたならもうわかっているでしょう?」

いやだ

言わないで

「私という存在の根源」

ダメ

言わないで

「私はあなたの可能性、孤独を受け入れ人に必要とされなかった
未来の可能性だったもの」なのだから」

「言わないで!」

なのは耳を押さえ、叫ぶ。
肩が小刻みに震えている。

「何故拒むのですか？あなたがなり得たもうひとつの存在である私を」

「私は一人じゃない！」

なのはは星光の殲滅者に必死に反論する。

「私は知らない人間じゃない！」

それは自分の闇をさらけ出すこと。

「頑張ったもん！皆に頼られるように、一生懸命頑張ったもん！！」

自分は知らない存在ではない。
頼れる人間なのだ。
だから、孤独ではない。

「頑張れば孤独ではない、ですか。独りよがりですね」

星光の殲滅者の言葉がなのはの心をえぐる。

「結局、自分の存在価値を他者に対して押し付けているにすぎません。あなたは相手を見ていない」

なのはは足腰に力が入らなくなり、その場にへたり込む。
口を半開きにし、体を小刻みに震えさせ、焦点の合わない瞳には涙

が溢れていた。

「私という存在は、闇のカケラの力を借りてはいますが、間違いなくあなたのなっていたであろう可能性の一つであるのは間違いありません。孤独を受け入れ、誰にも存在を認められなかった高町なのはです」

星光の殲滅者はゆっくりとなのはに歩み寄る。

座り込んだのはは床に雫を落とし、体を震えさせ続けている。

俯いた顔は上げることなく、涙で視界が歪みながら床を見ていると、その視界に星光の殲滅者の足が入る。

なのはは体をビクンとさせ、強張らせた。

「あなたは私という闇の存在を否定した。分かり合おうとしたあなた自身が私を拒否したのですよ。わかりあうなど不可能です。」

あなたが己の中の闇を受け入れない限り。

星光の殲滅者はそう言い残し、ロビーを後にしようとした。

だが、いきなり頭頂部にドゴンという鈍い打撃を受け、おもわずしやがみ込んでしまった。

「~~~~~!？」

目の前にバチバチと火花が散ったような錯覚、頭頂部を触るとポツコリとタンコブができていた。頭がジンジンする。

だんだん激痛が増してくる。

目からポロポロと涙が流れる。

星光の殲滅者はいきなり攻撃してきた人物を見た。

「~~~~つく、私に気配を察知されることなく近づくとは、さすが父上です・・・」

星光の殲滅者が見上げた先には、拳を握りしめ立っている近藤がいた。

顔は怒っている風ではなく、困っているような感じだった。

「あまりなのは隊長をいじめるな」

近藤は星光の殲滅者に軽くデコピンした。

その際、小さく「あう」とうめき声が漏れた。

第6話 見つめ合う事（前書き）

はい！

本編ほったらかしです！

でもいいの！

なぜなら？

楽しいからー！！

第6話 見つめ合う事

前回のあらすじ

なのはが子供に泣かされました。

・・・つつこむ人がいない・・・

淋しい・・・

静寂に包まれるロビーには、近藤、なのは、星光の殲滅者の3人がいた。

近藤はロビーの明かりを点けようとしたが、なのはが泣き顔を見られたくないだろうという配慮により、明かりを点けず、窓から差し込む月明かりのみが3人を視認させる唯一の手段だった。

床に座り込むなのはをソファに座らせ、近藤は一旦ロビーを離れると、手にマグカップを3つ持って帰ってきた。

そして、なのはと星光の殲滅者それぞれにマグカップをを渡した。中身はホットミルクだった。

「ただミルクを温めただけですけど、落ち着きますよ」

近藤のマグカップだけ中身が黒かった。

コーヒーだろうか。

なのは俯き、おずおずとマグカップを手に取り、ホットミルクの温かさを手の平で感じていた。

そして、ゆつくりとマグカップに口をつけ、ホットミルクを少量流し込んだ。

体の内から温もりが広がり、陰鬱とした気持ちが若干和らいだ気がした。

「さて、星光の、なんでなのは隊長をいじめたんだ？」

近藤にいじめられたと言われて、なのは少し傷ついた。

（いじめって・・・）

端から見れば、星光の殲滅者がなのはをいじめてるように見えたのだろう。

だが、実年齢19歳のなのはが、子供の星光の殲滅者にいじめられて泣くなど、恥もいいところだ。

だんだんなのはは恥ずかしくなってきた。

「いじめるもなにも、都合の悪いものを見ようとせず、目を背け、理解しないことを指摘しただけです」

星光の殲滅者は両手でマグカップを持ち、近藤の隣でちょこんと座っていた。

やはり表情が乏しいが、マグカップの中身を見ながら喋っていた。

「闇は消えないのに。光が有る限り、闇が生まれるのは必然なのに」

星光の殲滅者はぶつぶつ呟く。

それを見た近藤はため息をついた。

「子供だなあ・・・」

「そうですよ？私は子供です。それが何か？」

星光の殲滅者は拗ねたように口を尖らせていた。

なのはそんな二人のやりとりを見て驚いた。

先程まで自分を責めていたあの人形のような表情から一変して、ぎこちないながらも表情を表しているのだ。

それに、口調も子供っぽい。

なのは考えた。

そういえば、近藤は何故か子供に好かれている。

エリオ、キャロしかり、ヴィヴィオもだ。

そして雷刃の襲撃者のあの懐きようは凄まじかった。

星光の殲滅者も近藤に何かしら惹かれるところがあるのだろう。だからあんなに子供らしい態度をとるのだと、なのは結論付けた。

近藤は、星光の殲滅者の頭をポンポンと軽く叩いた。

一応気を使つて、ゲンコツした所はよけた。

「あのな、なのは隊長はまだ19歳だ。闇を知るにはまだ早いと思うんだけどな・・・だが、まあ・・・いい機会か」

そう言い、近藤はゆっくりと頭を撫でた。

星光の殲滅者は気持ちいいようで、目を細めて「はふう」と息を漏らした。

近藤は星光の殲滅者の頭を撫でながら、なのはを見た。

「なのは隊長」

「は、はい」

何故か重みのある声におもわず体を硬直させるなのは。

「この世は綺麗事で成り立たないというのは理解できますよね？」

子供に諭すような口調ではあったが、なのはは素直に頷いた。

「仮に、なのは隊長が他の管理世界の『全ての悪』を排除したとしましょう。さて、その後その管理世界は永劫平和になるでしょうか？」

近藤はなのはに問い掛けた。

なのはは答えがわかっていたが、答えなかった。

答えたくなかったのだ。

そんな頑なな態度がわかったのか、近藤は苦笑した。

「答えはノーです。人間は欲深い生き物です。安寧を得れば、人間はそれに飽きる。そして、新たな刺激を求める。たとえ、それが自らの身を滅ぼすような行為だったとしても、です」

わかっている。

なのはも管理局に入局し、様々な世界へ行き、様々な事件を担当した。世の中のシステムは理解しているのだ。

例え、その世界の諸悪の根源を駆逐しようとも、数年後には、新たな悪が生まれている。

それは、どの世界の人間も変わらない、欲深く、どうしようもない生き物なのだ。

それでも、そんな人間は一握りで、あとの大半は平和を望む人ばかりである。

なのははそんな人達のために、自分にできる、自分にしかできない方法で力を振るうのだ。

「太陽の光によって人間に影ができるように、人の心にも光と闇があります。これは、みんなが持つもので、闇のない人間なんか生き物じゃありません。それは、世の理ことわりから外れた『ナニカ』です。歴史の人物でも聖人君子なんて言われた人も、大なり小なり持っているんです。だから、恥ずかしいものじゃないんですよ」

そう言われて素直にはいそうですかと納得できるのはではない。

なのはは基本潔癖である。

何事にも結論を求めるし、白黒ハッキリさせる性分なのだ。

そして、それらは必ず自分が白であり、正としての概念である。

だから、自身に闇があるということに納得しない。

近藤の言うことに対して理解はする。

だが、やはり気持ちがその理屈を拒否するのだ。

「頑固というか、負けず嫌いというか・・・なのは隊長も子供ですね・・・」

ため息混じりに出された言葉に、なのははカチンときた。

「子供じゃないもん・・・」

ぶつぶつ呟きながら反論するなのは。

真っ向で反論しないところが、少なからず自覚しているということだろう。

そんなのはを見て、星光の殲滅者はふんと鼻をならす。

「都合のいい事しか見ない人が子供じゃないのですか？ちゃんちゃらおかしいですね」

星光の殲滅者の言葉は刺々しい。

それが余計なのは神経を刺激する。

「ちゃんと理解してるもん！世の中が綺麗事では生きていけないことくらい！闇があることくらい！」

「それはあくまで世の中でしょう？あなたは自分という器の中身の『ソレ』を見ない、見ようとしなない。耳を塞ぎ、口を閉じ、目を反らす。猿ですね、猿」

皮肉と侮辱を込めた言葉に、なのははぷくーと頬を膨らませた。なのはは立ち上がり、星光の殲滅者に対して反論しようとした。

だが、それは左手をなのはの前に持って行き、ストップをかけた近藤によって遮られた。

「なのは隊長、落ち着いて下さい。星光も、あまり煽るな」

星光の殲滅者は近藤の注意に素直に従い、頷いた。

彼女は近藤の言葉にはとても従順である。

近藤は大きいため息をひとつ吐き、頭をガシガシかいた。

「なのは隊長はなにか勘違いをしている、いや、闇に対して誤解をしているようですね」

なのはは近藤が何を言うのかよくわかっていなかった。

「闇は悪なんですか？」

「そりゃあ・・・」

近藤の問いに即肯定するように頷くなのは。

「じゃあ、俺達の足元にある影、これも悪ですか？」

「・・・はあ？」

なのはは首を傾げた。

近藤の言っている意味が全くわからなかった。

「今のこのロビー、暗闇ですね。これも悪ですか？」

「何を言って・・・」

「父上、そんな遠回しでは高町なのはには伝わりませんよ」

星光の殲滅者はため息混じりに近藤に言った。

「高町なのは、あなたは闇というものをマイナスイメージでしか認識していませんね？ですが、闇とは必ずしもイコール悪ではないのです。光に生きる者が全て善でないように、闇に生きる者全てが悪

ではないですよ」

「そんなのわかってる・・・」

星光の殲滅者による上から目線の言葉に、すぐさま反論するののはだったが、星光の殲滅者は首を横に振った。

「いいえ、わかっていないから言っているのです。もっと直接的に言いますか？」

『ある男が犯罪を犯し、高町なのはが逮捕しました。ですが、その男には妻がいて、お腹には子供を身籠っていました。そして、その妻は夫の逮捕というショックで流産してしまいました。』

さて、高町なのは、あなたは正義ですか？悪ですか？」

なのははショックで顔を青ざめさせていた。

犯罪者を逮捕する。それは当然の行為である。

しかし、犯人にも人生があり、家庭がある。

間接的とはいえ、心的ショックで産まれてくる命の灯を消してしまっただ。

「その様子では、自覚していなかったようですね。『自分の取る行動によって不幸になる人もいる』ということを」

星光の殲滅者はやれやれと肩を竦めた。

「では、最初の質問に戻りましょう。力を得て管理局で頼れる存在になり犯罪者を逮捕していく中で、間接的に人を不幸にしている高町なのはと、孤独を受け入れ、誰にも頼られずに誰も傷つかず、た

だ生きているだけの闇の私。さて、悪はどちらですか？」

星光の殲滅者は無表情でなのはを見る。

問い掛けの答えを聞くために。

だが、なのははガタガタと震えるのみで、話そうとしない。
いや、ショックと混乱で言葉が出てこないのだ。

目線を気ぜわしく周巡させ、顔色も血の気が引いて真っ青になっている。

ここらが限界か

近藤はそう判断し、軽くなのはの頭に手を置いた。

一瞬ビクツと強張らせたのはだったが、だんだんと体の震えも止み、血色も戻ってきた。

女の自分達とは違う手。

大きい手の平、太い指、皮が剥け、タコができたカサカサでゴツゴツな浅黒い皮膚。

近藤は体温が低いのか、頭に乗せた手からはあまり体温が感じられなかった。

それでも、何故か心がポカポカとしてくる。

悩んでいたことが溶けていくように、体が軽くなるように、気持ち
が落ち着いてくる。

「先程の答えを言いましたか？俺の導き出した答えは、どちらも悪であり、そうではないんです」

近藤の言葉になのは顔を上げた。

そして、近藤はなのはの頭から手を離れた。

（あ・・・）

頭から心地好い重みがなくなり、残念な気持ちになってしまったのは。

「犯罪者を捕まえる、それは良い行いです。管理局の責務ですね。それに対して、間接的とはいえ不幸になる人がいる。視点の違いですが、まあ相手からすれば、それは悪になるでしょう」

そう言い、近藤は横でなのはを羨ましそうに見ていた星光の殲滅者の頭を撫ではじめた。

星光の殲滅者は猫のように目を細め、今にも喉からゴロゴロと聞こえそうなくらい気持ち良さそうにしている。

「逆に、孤独で誰も頼らず何もせず、相手を傷つけないという点では確かに悪ではないでしょう。しかし、成すべき力があるのに何もしないのは、それだけで悪です」

近藤の言葉がなのはに重くのしかかる。

「否定するのも、拒否するのも、切り捨てるのも簡単です。ですが、なのは隊長には、向き合っていただきたいんです」

近藤はなのはの肩に手を乗せ、少し力を込めてる。

子供のか細い腕に近藤のゴツゴツの腕が食い込む。ポキンと簡単に折れそうで、なんととはかないことか。

「星光の殲滅者はなのは隊長とは表と裏、陰と陽であり、限りなく遠い存在なのかもしれません。ですが、それは限りなく近い存在ともいえます」

なのはは肩から腕にかけて感じる近藤の大きく、無骨な手の感覚にドキドキしつつも、近藤の隣で静かに佇んでいる星光の殲滅者を見た。

やはり、星光の殲滅者はなのに対しては無表情だった。

だが、その瞳の奥から、小さな光が見えたような気がした。

限りなく近く、遠い存在。

表裏一体。

コインの裏表と同じだ。

いつも一緒にいるのに、振り向いても、それは見えない存在。

でも、いつも一緒にいる。

結局人間は己のことまともに理解できない生き物なのだろう。何かに怯え、恐怖する。

それを紛らわせるために人は他人と擦り寄り合い、心の不安を、隙間を補い合い、補完するのだ。

なのはも、自分の存在意義を証明したいために努力し、孤独という不安をフェイトやはやてによって補完していた。

なのはは改めて見つめ直す。

自分の内面を

星光の殲滅者を

ドロドロと内につくめく闇を

でも苦しくない。

辛くない。

何故だろう？

・・・ああ、そうか

この手だ。

この大きな手が私を支えてくれているんだ。

なのはは肩にのしかかる大きな手から、勇気を分けてもらっているようだった。

いまなら、踏み出せる。

向き合う勇気を持って。

一歩

踏み出そう

なのはの瞳は力強く、決意に満ちていた。
そして、星光の殲滅者はそんなのを見て、口元の筋肉を軽く緩め、小さく笑った。

「高町なのは、あなたの決意は受け取りました。もう大丈夫でしょう」

「ふえ？」

なのはは拍子抜けしたような情けない声を出した。

勇気を持って己の闇と向き合つと決意したのに。
わかつたから、もういいと言われたのだ。

そんなマヌケな表情をしたなのはを見て、星光の殲滅者はため息をついた。

「あなたのその瞳に宿る決意の火を見れば、語らずともわかります。・・・父上の助けを受けたとはいえ、この短時間でその覚悟はまずまずです」

なのはは釈然としない表情をしながらも、どうやら褒めてくれているのだと思い、「まあ、いつか」と納得することにした。

「というわけで父上、高町なのはをここまで導いた私を褒めてください」

星光の殲滅者は近藤の服をクイクイと引っ張り、催促してきた。

星光の殲滅者は端から見ると、無表情で近藤を見つめて、褒めてくれるのを待っているように見える。

だが、当の近藤の目には、瞳をキラキラと輝かせ、ソワソワしているように見えていた。

第7話　なのはさんがんばる！

近藤に頭を撫でられ、ご満悦の星光の殲滅者は気のせいかな、肌がツヤツヤしているように見えた。

「さて、もう夜も遅いですし、寝ますか」

近藤はそういうと、立ち上がり、空になったマグカップ3つを持った。

マグカップを片付けてきます、と言い一人ロビーを出ていった近藤を確認すると、星光の殲滅者はなのはにまた心揺さぶる言葉を放った。

「高町なのは、あなたも今くらいは素直になってもよいのではないですか？」

「え？」

素直？

どういうことだろうか？

「私の行動は、あなたの望みでもある、そういうことです」

「・・・え？」

星光の殲滅者の行動？

なのははまだよくわかっていないようだ。

「あなたが子供になった本当の理由がやっとわかったのですよ」

「本当！？」

なのはは驚いた。

自分でもよく理由がわかっていないことを星光の殲滅者はわかったという。

「最初は、あなたが言っていた通り、フェイト・T・ハラオウンが子供になったのを見て、昔の事を懐かしんだ。そう思っていました。ですが、今日のあなたの行動を見て確信しました」

星光の殲滅者はゆっくりとなのはを指差す。どこぞの探偵が犯人を暴くシーンのようだ。

「あなたは父上に『甘えたい』のです」

ドーン！

と効果音が聞こえたかどうかはわからないが、なのはは目を白黒させている。

「正確には、父親に甘えたいというのがあなたの願望です」

「ちょっ！？待って！わ、私が近藤さんに甘えたい！？私のお父さん生きてるし！！」

なのは手をブンブン振って否定する。

「・・・よく思い出しなさい。あなたは小さい頃、親兄弟に存分に甘えていましたか？」

そう言われてなのははっとなった。

なのはの小さい頃、父である士郎は仕事で大怪我を負った。

母の桃子は、そんな士郎の看病と翠屋を切り盛りし、兄の恭也と姉の美由希は母を手伝っていた。

小さいなのはには何もできなかった。

なのはにできることは、我が儘を言わないこと。
母に、兄に、姉に迷惑をかけないこと。

大丈夫

私は一人でお留守番できるよ

一人で大丈夫だから

なのはは家族のために自分を殺した。

これこそ、なのはの間、星光の殲滅者の根源である。

「幼いあなたは賢かった。だから、一番辛い選択をしてしまったのです」

星光の殲滅者はそう言いながら、なのはの手をとった。

「父上に頭を撫でられて、支えてもらってどうでしたか？」

なのはは近藤に撫でられ、肩を掴まれたときのことを思い出した。

「・・・・・・・・・・はう」

みるみる顔が赤くなっていくのが自分でもわかってしまった。

そして、おもわず喉から声が漏れてしまった。

「頭を撫でられて、その手が頭から離れたとき、淋しく感じませんでしたか？」

なのはは小さく頷いた。

星光の殲滅者は手に力を込めた。

「体が小さくなったことで、魂も体に引き付けられているのです。だから、心や感情も子供にもどっているのですよ」

そう言うと、なのはの耳元に口を寄せて小声で話し出した。

「どうです、父上の手は？すごくよかったですよね？」

「~~~~~!?!?」

なのははますます顔を赤くし、声にならない叫びをあげた。
しかし、なんなんだこの星光の殲滅者の言い回しは。
いちいちエロい。

「父上の大きな手で頭を撫でられると、すごく幸せな気持ちになつて、ずっと撫でて欲しい衝動に駆られたでしょう？」

なのはは頭から湯気がでそうなほど顔を赤くしつつも、コクンと頷く。

「父上と手を繋いだり、抱きしめられたりすると、もっと気持ちいいですよ」

「！」

なのはは揺れた。

頭を撫でられただけであんなに体がふわふわするような感覚になり、とても勇気が湧いてくるのだ。

近藤がいるだけで、なんでもできそうな気がするのだ。

それ以上のこと——ハグとかしたら——どうなるのだろう。

・・・ああ、すごく気持ちいいんだろうなあ・・・

ふわふわポカポカするんだろうなあ・・・

「・・・高町なのは、よだれ、よだれ」

星光の殲滅者に指摘されはつとすると、口の端から涎が垂れていた。急いで涎を拭い、何事もなかったように振る舞うが、星光の殲滅者

は呆れ顔だった。

「・・・やはり、19年で男性との付き合いなどが皆無だと、妄想が激しくなるのですね・・・あなた、今すぐくだらない顔してますよ?」

星光の殲滅者がどこからか手鏡をだし、なのはの顔を写してみせた。

「——!?!ひゃああつ!?!」

なのはも自分の予想以上にだらしのない顔を見てショックを受けた。

「どうかしましたか?変な声を出して?」

そんな時に丁度近藤が戻ってきてなのはに声をかけた。

「はう!?!な、なんでもないの!」

なのはは顔を赤くして手をブンブン振った。

「・・・?まあいいです。さあ、なのは隊長の部屋まで送りますよ」

近藤はそう言うと、すたすたとロビーを出て行こうとした。

そこへ、星光の殲滅者がまたなのはにツツツと近寄り、小声で話しかけた。

「高町なのは、これは元に戻るための治療なのです。さあ、父上に

甘えなさい。手を繋ぎなさい。ハグしなさい。キスしなさい」

「言ってることがだんだん過激になってるよ!？」

星光の殲滅者がなのはをそうけしかけるものだから、余計意識してしまい頭からプスプスと煙がでてきた。

そして、なのはは心の葛藤を繰り返していた。

私が近藤さんに甘える？

いやいや、考えられない。

だが、これは治療。

そう、治療なのだ。

深層で父親に甘えたいと思っているだけなのだ。

決して近藤さんに甘えたいのではない。

そう、近藤さんは代役なのだ。

近藤さんに撫でられたいのではない。

抱っこしてほしいのではない。

き、期待などしていない！

断じてない！！

だから

後でフェイトちゃんにばれても

大丈夫だよね？

・・・たぶん

ごめんね、フェイトちゃん

少し近藤さんをお借りします

なのはは覚悟を完了した。

なのははダッシュし、ロビーを出て行こうとする近藤の背中に抱きついた。

といつても、大人と子供の身長差があるため近藤の腰に纏わり付いた感じだが。

なのはは近藤の腰に抱きついて驚く。

近藤の体がものすごく硬いのだ。

そう、これは筋肉。

表面の皮膚は柔らかいのに、中の筋肉はガチガチだが、コンクリー
トのような硬さではなく、柔らかいのに硬い、そんな硬さの筋肉。
それに腰に余分な肉が無いのだ。

・・・うらやましい・・・

おもわずそう呟いてしまった。

そして、なのはは近藤の背中に顔をつけ、思いつきり息を吸い込んだ。
だ。

近藤の匂いを肺に送り込み、胸いっぱいにする。

なのはの顔は近藤の背中に擦り寄せられているので、端からは表情
は伺えなかったが、星光の殲滅者には容易に想像できた。

絶対だらしな顔をしている、と。

なのはは思いつきり吸い込んだ空気を吐き出した。

そのとき、近藤の背中から顔を離れたのだが、案の定なのはは顔の
まわりにお花畑でもあるかのごとく幸せそうにへにやへにやとにや

けていた。

「は……はふう……」

おもわず心からの声を漏らしてしまうが、もうそんなこと気にしない。

治療なんだから仕方がないんだ。

だから、甘えよう。

出来なかったことをしてもらおう！

まずは……

「近藤さん、だっこ」

「は？」

「だっこ！」

なのはは近藤の腰に纏わり付きつつ、見上げるように近藤におねだりしだした。

そして、当の近藤は訳がわからない。

いきなりタックルをかましてきたかと思ったら、顔を背中にグリグリこすりつけ、更には抱き上げると要求してくる。

近藤プチパニックに陥っていると、クイクイと服を引っ張られる感

覚があった。

それは星光の殲滅者だった。

そして、星光の殲滅者は念話で近藤に説明した。

「（高町なのはの子供になった原因は、幼少の頃に満足に父士郎氏に甘えられなかったことにあるようなのです。ですから、彼女は昔、士郎氏に出来なかったことをして心を満たすのが治療なのです）」

そう言われて、近藤は成る程と思った。

なのはの幼少の頃の事は知らないが、彼女は小さい時分でも賢い子供だったであろうことは容易に想像できたからだ。

なにかしらの理由があつて、満足に甘えることができなかったのだろう。

だが、近藤はひとつ引つ掛かることがあつた。

「（・・・なあ、星光？俺はそんなにお父さんと思えるくらい老けてるかな？）」

「（まあ、それもありますが、どうやら父上は子供に好かれる体質のようですね。科学的根拠はありませんが）」

なんだその体質？

なんか子供が近寄るような体臭でもしているのだろうか？

腕を鼻に近付け匂いをかいでみる。

風呂上がりだから特に匂いはしない。

加齢臭とかだったらいやだなあ・・・と内心思っていた。

今もなのはは近藤の背中に顔をグリグリこすりつけ、幸せそうな顔してハアハア言ってるし。

今までそんなこと知りもしなかった。まあ、身近に子供がいなかったから知る由もなかったのだが。

それよりも、顔が老けてるかという質問に、星光の殲滅者に普通に肯定されたことの方がシヨックだった。

俺はそんなに歳いつてるように見えるのか・・・

近藤はがつくりと肩を落とした。

近藤はなのはに言われた通りおんぶした。

肩から「はにゃ・・・」というだらしない声と、なにやら冷たい感覚、そう、水が肩に掛かっているような感じがしたが、気にしないことにした。

星光の殲滅者は、近藤と手を繋いで歩いていたが、近藤の背中にいるなのはを見て呆れていた。

（あんなに涎をだらだら垂らして・・・父上の肩にまで滴っているではないですか。ああ、情けない。あれが私の元とは・・・エースオブエースの威厳が微塵も感じられない。情けない、ああ、本当に情けない）

そうこうしているうちに、なのはの部屋の前に着した。

「さ、なのは隊長、着きましたよ」

近藤がそう言いなのはを見ると、なのはなにやら拗ねたような顔をしていた。

「降りない」

「は？」

「降りない！近藤さんと寝る！」

「はあ！？」

いきなりすることに近藤は素っ頓狂な声を出してしまった。

「寝るのー！近藤さんと一緒に寝るのー！！」

なのはが近藤の背中ではたはたと暴れた。

「大分魂が体に引き寄せられてますね。もう思考が子供そのものです。仕方ありません父上、高町なのはを父上の部屋に連れていきましょう」

「・・・仕方ないか・・・」

近藤は渋々なのはを背負いながら自室へ向かった。

「うふふふ、お父さんと一緒に寝れる」

とうとうなのはは近藤の事をお父さんと言いつつ、キヤッキヤと喜ぶのには対し、ますます気落ちする近藤、そして、無邪気なのはを見て「恥ずかしい・・・ああ、恥ずかしい・・・」

とぶつぶつ言う星光の殲滅者だった。

3人は近藤の部屋に到着した。近藤のベッドには、雷刃の襲撃者と閻統べる王が寝ていた。

雷刃の襲撃者は掛け布団を蹴飛ばし、変な寝相だったが、閻統べる王はキツチリと大人しく寝ていた。

閻統べる王は本当に手間がかからない、いい子だなあ・・・と近藤はしみじみ思った。

近藤の部屋のベッドはなのは達と同じくキングサイズのベッドを使用している。

普段はエレノアと一緒に寝ているのだが、エレノアはまた変な気をまわして別室で寝ている。

近藤とエレノアが一緒に寝ているからといって、変なことは起こらない。

近藤はエレノアの事をデバイスであり娘のような位置付けで見ているし、エレノア自信も特に何かを起こすつもりもない。

フェイトでさえ、二人が一緒に寝ているのを容認するくらい、この二人はそういう事を想像させないくらい家族としての絆が深いのである。

近藤はとりあえず背負っているなのはを降ろし、雷刃の襲撃者に掛け布団をかけ直してやり頭をひと撫でした。

雷刃の襲撃者は眠りながらも気持ち良さそうにしていた。

閻統べる王も規則正しい寝息をたてているので、軽く髪をすくように撫でてやると、徐々に閻統べる王の顔がにやけだしてきた。

寝ている子供に対してまでも威力を発揮するとは、近藤はなんと恐ろしい力を持っているのか。

そんなやりとりを近藤の後ろで見ていた二人は、おもしろくないといった表情をしていた。

「さあ、寝ましようか。なのは隊長、星光」

二人は「二人だけうらやましい・・・」だの「いいなあ・・・」などどぶつぶつ言いながら従い、ベッドに潜り込んだ。

近藤はベッドの横に座り、並んで寝ているなのはと星光の頭を撫でた。

ちなみに、寝ているポジションは

壁

闇統べる王

雷刃の襲撃者

星光の殲滅者

なのは

の順である。

「えへへ」

なのはは近藤に撫でられて幸せそうな表情をし、星光の殲滅者も猫のように目を細めて近藤の手を堪能していた。

「父上は寝ないのですか？」

何気なく星光の殲滅者は近藤に聞いた。

「二人がキチンと寝たら寝るよ」

なのはは、本当は近藤に抱き着いて寝たかったが、自分達が寝るまで起きてくれているという事に若干感動した。

「じゃあ、手を握っていて？」

なのはがおねだりすると、近藤は軽く笑いなのはと星光の殲滅者の手を握った。

自分達の倍以上はある、ゴツゴツと硬く、それでも何者からも守ってくれるような、全てを包み込んでくれるような手の温もりを感じ、二人は徐々にまどろんできた。

「おやすみなさい、父上」

「おやすみなさい、お父さん」

「おやすみ」

近藤の挨拶を聞くと、二人は眠りの世界へ旅だつて行つた。

その日、なのはは夢を見た。

小さい頃の自分が、父士郎に肩車してもらつたり、手を繋いで遊園地へ行つたり、士郎に抱き着いたり、そんな他愛のない夢。

だが、夢のなのはは極上の笑顔だつた。

「・・・あの、なのは隊長、起きてください」

近藤がなのはに声をかける。
だが、なのはは起きない。

「うつゝん・・・お父さ・・・ん」

なのはは寢言を言いながらしがみついてる手に力をいれ、顔をグリグリとこすりつける。

「ちよっ！？マジで勘弁してください！早く起きてくださいよ！」

「はふう・・・ん」

近藤は声を荒げるが、それでもなのはは起きない。

前日、近藤はなのは達が寝たのを確認すると、ベッドではなくソファで一人寝たのだ。

だが現在の状況は、近藤が寝ていたソファに何故かなのはが潜り込んで、抱きついていてる。

なのはは無事元の姿、成人女性に戻っていた。

しかし、それがいけない。

ただでさえソファは寝るところではないし、狭い。

必然と二人は密着する。

というか、なのはが一方的に近藤にしがみついている。

近藤の体に腕をまわし、足を絡める。

なのはの均整のとれた体と、ワイシャツという扇状的な格好、さらには何故かなのはは近藤の胸に顔をこすりつけ続ける。

本当は起きてるんじゃないだろうか？

とにかく、これ以上されたら近藤の理性が吹っ飛んでしまう。

近藤がなんとか逃げようと身じろぎすると、なのははまわしている腕に力をいれ離さないようにより密着し、近藤の足により自分の足を絡ませる。近藤の脇腹あたりにムニユムニユと柔らかい二つの膨らみが当たる。

太股の柔らかい感触で、脇腹に当たる胸の感触による二重天国である。

だが、今の近藤には地獄でしかない。

「ギャー!?!」

とうとう近藤は叫んだが、それでもなのはは起きない。

近藤はベッドを見てマテリアル3人娘に助けを求めようとした。

だが、3人はいなかった。

どこに行っただろうか？

そのとき

ピロリン

どこからか電子音がした。

近藤は首だけを音のした所を見た。

そこは部屋の入口で、カメラを構えたエレノアが立っていた。
すごい笑顔だった。
悪魔のしつぱがひらひら動いていた。

「ご主人様となのはちゃんの浮気現場ゲット」

「エ、エレノア!？」

まずい。

非常にまずい。

何がまずいかって？

「フェイトちゃんに見せちゃおうかな」

「ちよっ!？マジ勘弁!！」

エレノアはカメラのストラップに指を通し、クルクル回しながらい

やらしい笑みを浮かべていた。

フェイトに報告だけは勘弁していただきたい。

何故なら関係がギクシャクして仕事に支障をきたすから。

焦った近藤は、エレノアの後ろにいる小さい3つの人影を見つけた。それはマテリアル3人娘だったのだが、3人共申し訳なさそうな表情をしていた。

「そ、そのかわいい3人娘！エレノアを止めてくれ！！」

近藤はマテリアル3人娘に懇願したが、返ってきた答えは合掌だった。

「ごめんパパリン。僕達エリリンには逆らえないんだ」

「うむ、我等もエリリンは怖いからな」

「すいません父上、そういう事ですので・・・諦めてください」

3人が拝みながら近藤に死刑宣告を言い渡す。

3人にとってエレノアはどれだけ恐怖の対象なのだろうか？

というか、雷刃の襲撃者と闇統べる王がエレノアのことをエリリンと呼んでいることも驚きだった。

いつの間に仲良くなつたのだろうか。

「くっ・・・何が望みだ・・・」

近藤は苦しそうに声を絞り出した。

実際、近藤は理性との戦い真っ最中なので余裕など微塵もない。

今も柔らかな感触が近藤を襲い、意識をそちらに向けないようになっている。

そして、こんなに騒がしいのにまだなのは起きない。

時折なのはから漏れる「んう・・・」等の声と吐息がまた色っぽく、近藤の理性をガリガリ削り取る。

エレノアはニマ〜つと三日月のような笑顔を近藤に向けた。

「懸命な判断です、ご主人様。そうですねえ、とりあえずは向こう一ヶ月『aqua girl』のシュークリームと・・・」

エレノアは写真をネタに一生たかろうとしているようだ。

だが、エレノアの要求は泡と消える。

近藤が顔を真っ青にしてエレノアの後ろの方を見ている。

・・・なんだか、背中からとてつもないどす黒い負のオーラを感じる・・・

近くにいたはずのマテリアル3人娘もエレノアから距離をとり、真っ青になりながらガクガクと震えていた。

エレノアは恐る恐る後ろを見た。

「げっ!？」

そこには鬼の形相のフェイトが立っていた。

「・・・近藤さん・・・少し、頭冷やそうか・・・」

私達は本当の地獄というものを知りました・・・

後にマテリアル3人娘が残した言葉である。

第8話 Mの遊戯 / アグレッシブなのは（前書き）

思いつきで書きました。

クレームは寄せないでね！
だってテキストだもの！！

第8話 Mの遊戯 / アグレッシブなのは

前回までのあらすじ

近藤の恐るべき能力が発揮され、フェイトが鬼と化しました。

「・・・やめて、思い出したくないから」

「どうしたのだ、親父どの？壁に頭をつけてぶつぶつと」

「・・・すこし・・・な」

『闇統べる王』は自分のデバイスのメンテナンスをしながら何か行動がおかしい近藤を気にしていた。

まあ、フェイトにあれだけ調教・・・もとい、トラウマ・・・いやいや、叱られればへこむのも無理はない。

「それはそうとパパリン、アレ出来た？」

『雷刃の襲撃者』は寝転びながら漫画を読み、尚且つ近くにはポテチとジュースという自堕落マックスを満喫しながら近藤に聞いた。

「ん？ああ、あれか？出来てるぞ」

「本当ですか!？」

近藤の言葉にいち早く反応したのは『星光の殲滅者』だった。
あまりの反応に唖然とする雷刃の襲撃者と闇統べる王。

星光の殲滅者は二人の視線に気づき、咳ばらいを一つしてごまかした。

「見せてください」

星光の殲滅者は若干頬を染めながらも、平静を装った。
近藤は苦笑しながら、ゴソゴソとその物を取り出した。

「おおー！」

3人から歓喜の声が上がる。

「まずはこのドライバと、あとはこれだな」

そう言うと、近藤はポケットからカラフルなスティック状の物を数本取り出した。

「おおー！！！」

3人がスタンディングオベーションをする。

「パパリンすげー！」

「うむ、流石我等の親父どの！」

「尊敬に価します」

三者三用の賛辞を近藤に送る。

「よし！早速コレを使って遊ぼう！！」

「おーっ！！」

マテリアル3人娘は拳を高く上げ、意気込みを見せた。

「はい、整列」

仮想シミュレータでは、なのは指導の元フォワード達が訓練に明け暮れていた。

なのはに呼ばれた4人はすでにボロボロだった。

なのはの後ろにはフェイトとヴィータもいる。

「じゃあ最後は模擬戦しようか」

「はい！」

元気に返事をするフォワード達。

そこへ、近藤とマテリアル3人娘がやってきた。

「その模擬戦ちょっと待ったー！」

「え？」

雷刃の襲撃者がなのは待ったをかけた。
そして声高々に宣言した。

「フォワード達との模擬戦は僕達がする！」

「ええー！？」

声をあげたのはフォワード達だ。
マテリアル3人娘は、確かに強い。だが、手加減を知らないので、ボロ雑巾のようになってしまう。

「ああ、大丈夫だ。今回は性能テストだから」

近藤がそう言うと、なのはが近付いてきた。

「性能テスト？なにか作ったんですか？」

「・・・なのは隊長、近いです」

なのはは近藤にピッタリくっつくくらい接近してきた。
肩と腕が触れ合い、なのはの体温が制服越しに伝わる。
髪からもフワリと良い匂いが近藤の鼻を刺激する。

「え？そう？いいじゃない、別に」

何がいいのだろうか？

なのは子供になって近藤にいろいろ我が儘を言ったりおねだりしたことを覚えていた。

その影響なのか、元に戻ってからものはいくかと近藤に接触してくるようになったのだ。

特に、頭を撫でる事をよく要求してくる。

なのは曰く

「近藤さんの手の威力は今の私にも効果があることがわかったから、撫でてもらってリフレッシュするの！」

ということらしい。

これは、一緒にソファで寝ていた事を言っている。

あの時なのはは無意識に近藤の寝ているソファに潜り込み、抱き着いて寝ていた。

この時の衝撃の事実として、なのははソファに潜り込んだとき、すでに体は元に戻っていたのだ。

成人女性の体型に戻りながらも近藤を求め、さらにはこの時の事実として、大人の体格でも近藤から受けるなんらかの効果があつたということにある。

近藤とベツタリとくつついて寝ていたなのはは、もう信じられないくらい体力全開、ストレスゼロ、肌や髪のパフォーマンスという状態だったのだ。

こんな効果があるなら使わない手はない！

それからなのはは近藤にベタベタくつくようになった。

そしてマテリアル3人娘は、そんな近藤の手を『ゴッドハンド』と呼んでいた。

近藤の手の威力とは、近藤に撫でられるととても幸せな気分になり、しかも勇気が湧くのだ。

これだけを聞いていると、なにやらヤバいドラッグのようであるが、

一種の癒し効果があるのは間違いないらしい。

これが後に語られる驚異の稀少能力『子供たらし（チルドレンハー
トブレイカー）』伝説の序章であることは、この時はまだ誰も知る
よしもなかった。

「・・・なのは、くつつき過ぎじゃないかな？」

フェイトが地を這うような声でなのはを注意する。
だが、なのはも負けてはいない。

「フェイトちゃん、こういうのは共有するのが一番良いと思うの。
私もフェイトちゃんみたいになつてもお肌艶々でいたいのに！」

なのははフェイトに力説するが、フェイトもはいそうですかと簡単
に引けない。

「なのは、近藤さんは物じゃないんだ。一人の人間なんだ。そんな
共有とか、近藤さんに失礼だよ」

フェイトは至極まっとうな事を言った。

今までのなのはの言い分を分析すると、なのはは近藤に恋愛感情を
抱いていないようだ。

だが、近藤の近くにいと美肌効果やマイナスイオン効果らしきも
のがあるつばいから近藤にベタベタくつつくと言っているのだ。
さすがのフェイトも、これにはカチンときたようだ。

だが、なのははフェイトの言葉を変に理解してしまった。

「え？じゃあ私も近藤さんにアタックかけてもいいの？近藤さん、
フェイトちゃんから許可が下りたから、今日から私近藤さんの愛人

1号ね」

「はー！ー！？」

なのはの爆弾発言に近藤は奇声をあげた。
そして、当然フェイトも慌てる。

「ちよっ！？なのは、な、何言ってるの！？」

「何フェイトちゃん？まだ何かあるの？本妻は譲るから、愛人でもいいでしょ？」

なのはは面倒臭そうに言う。少々キャラが変わっていないか？

「ユ、ユーノはどうするの！？」

「やっぱり男の人は、近藤さんみたいにガツシリしてて包容力あって甲斐性がある人じゃないとね？」

・・・かわいそうなユーノ。

「だ、だめだよ！！いくらなのはが愛人1号になるって言っても・・・ちよつと待って？1号って、まさか2号いるの？」

「2号ははやてちゃん」

「何考えてるの二人ともー！！」

衝撃の事実フェイトは腹から叫んだ。

「・・・おい塵芥共、いい加減模擬戦を始めたいたらその口を閉じる」

なのはとフェイトの漫才に対し、眉間に皺をよせてこめかみをピクピク動かす闇統べる王と、冷たい視線を送るその他。

「す、すいません・・・」

なのはとフェイトは恥ずかしそうに縮こまった。

「で？テストって、何をテストするの？」

スバルが星光の殲滅者に質問した。

ちなみになのはとフェイトは罰として正座させられている。

すると、星光の殲滅者はうつすらと笑い、ポケットから黒いステイックのような物を取り出した。

「なにそれ？・・・USBメモリ？にしてはなんか大きいわね・・・」

星光の殲滅者が手に持っていたのは、黒いUSBメモリのようなものだった。

すると、雷刃の襲撃者も同じようにポケットから緑色のUSBメモリを取り出した。

「あれはガイアメモリと言います」

「ガイアメモリ？」

「まあ、おもちゃですよ」

近藤がなのは達に説明した。

「悪魔と相乗りする勇氣はあるかい？」

雷刃の襲撃者はそう言い、ニヤリと笑いながら、左手でガイアメモリに付いているボタンを押した。

サイクロン

すると、ガイアメモリから野太い男の声がした。

「あなたとならば、地獄までも」

星光の殲滅者がそう答え、片手に赤いゴツゴツしたバックル『ダブルドライバ』を持ち、腰に装着し、もう片方の手でガイアメモリのボタンを押す。

ジョーカー！

また野太い男の声がする。

すると、雷刃の襲撃者のお腹にうつすらと星光の殲滅者が腰に装着した赤いゴツゴツした物『ダブルドライバ』が現れた。

雷刃の襲撃者と星光の殲滅者はガイアメモリを持ち、鏡に写ったように左右対称の構えを取る。

「へんしん！」

二人が声をそろえてそう言うと、雷刃の襲撃者は持っているガイアメモリを、腰に現れた赤いゴツゴツした物『ダブルドライバ』のスロットに差し込む。

雷刃の襲撃者が差し込んだ緑色のガイアメモリはダブルドライバから消え、代わりに星光の殲滅者のダブルドライバに現れた。

星光の殲滅者はソレをドライバに押し込み、自ら持つ黒いガイアメモリもドライバへ差し込んだ。

そして、星光の殲滅者は腕を交差させ、ガイアメモリの入ったスロットを外側に展開した。

サイクロン・ジョーカー！

ダブルドライバからの声を合図に、星光の殲滅者を中心に疾風が起る。

その時、雷刃の襲撃者は力が抜けたように崩れ落ちる。

「おっと」

倒れる寸前に近藤が抱きとめた。

星光の殲滅者の顔には黒い血管のような模様が張り付くが、みるみる星光の殲滅者は外装を纏い始めた。

皆呆氣にとられていた。

雷刃の襲撃者と星光の殲滅者が何かしたかと思ったら、疾風が巻き起こり、星光の殲滅者が立っていた所には成人男性のようなガツシリした体格で、全身を、頭からつま先までを鎧を纏った人がいた。そして、一番目を引くのはその色である。

左右対称、左半分は緑色、右半分は黒というシンメトリーで、目の部分は赤く大きく、昆虫のようだった。

首にはシルバーのマフラーがなびき、とてつもない存在感を醸し出している。

『さあ、お前の罪を数えろ！』

片手をゆっくりとあげ、ポーズを決める。

「やったー！変身できたー！」

緑の半身が雷刃の襲撃者の手で手を挙げている。どうやら喜んでいるようだ。

「これは素晴らしい。まさしく『仮面ライダーW』です」

黒い半身が星光の殲滅者の手で手を見ながらウンウン頷く。

「・・・くつ、じゃんけんで負けなければ、我也変身していたのに・・・」

悔しそうに呟く闇統べる王。

じつはダブルドライバを装着する際、ちょっとしたいざこざがあった。

それは、誰がダブルドライバを装着するかという事だ。

結局じゃんけんで決めたのだが、こういう時の星光の殲滅者は強い。真っ先にボディースイド（右半身）を選び、雷刃の襲撃者はソウルサイド（左半身）となった。

ソウルサイドは精神がボディースイドに移行するので、雷刃の襲撃者は最後まで星光の殲滅者に変わってもらえるようお願いしていたが、星光の殲滅者は頑として首を縦に振らなかった。

実は、この変身が一番楽しみにしていたのは星光の殲滅者だったのだ。だから、じゃんけんでボディースイドを勝ち取ったとき、小さくガッツポーズしていたのを近藤は見ていた。

雷刃の襲撃者も、いざ変身するとやはり嬉しいようで、今も緑の半身ははしゃいでいる。

そんなうらやましそうな視線を送っている闇統べる王を見た近藤は、雷刃の襲撃者を抱きかかえながら近づいた。

「闇の、お前も変身したいか？」

近藤の質問にコクンと頷く闇統べる王。

それを見た近藤はニヤリと笑い、ポケットからオレンジと銀のガイアメモリ二本を取り出した。

そのメモリを見た闇統べる王は驚きで目を見開く。

「お、親父どの！それは・・・まさか・・・」

「いつも良い子にしている闇にご褒美だ。行つてこい」

近藤はガイアメモリとドライバを闇統べる王に手渡した。

それを目をキラキラとさせながら見つめる闇統べる王は、弾かれるように顔をあげ、満面の笑みで走っていった。

「ありがとうー！親父どのー！」

「かつちょえー！！」

「すごい！本物の仮面ライダーだー！！」

スバルとエリオは目をキラキラさせていた。

「あ、あの子供の体型がどうやって・・・あ、変身魔法か・・・」

ティアナは頬をひくつかせていた。

キャロは「まあ、お父さんが絡んでたらなんでもアリかな・・・」と、達観していた。

「驚くのはまだ早いぞ、塵芥ー！」

闇統べる王が仮面ライダーWの横で踏ん反り返るように胸を張っていた。

「何のようですか？闇統べる王、あなたはじゃんけんで負けたハズですが」

「ふふん、コレを見る！！」

自信満々に闇統べる王は近藤に手渡されたガイアメモリを見せた。

「な！？そ、それはまさか！」

驚きの声を上げる星光の殲滅者。

それに対し、闇統べる王はニカツと笑いながらガイアメモリを見せびらかしていた。

「いつも良い子でいるご褒美だつて！」

ニシシと笑う闇統べる王は、一転真面目な顔になり、フォワード達を睨んだ。

「待たせたな、塵芥。我の力、思い知れ！」

そう言うと、腰にバイクのハンドルのようなドライバを取り付けた。そして、手に持つガイアメモリのボタンを押す。

アクセル！

野太い男声が響く。

「へん・・・しん！」

闇統べる王は掛け声と共に、ガイアメモリをドライバに差し込んだ。
そして、右のハンドルを捻った。

瞬間、闇統べる王の前に、エンジンのピストンのようなものがサークルで現れ、エンジン音が響く。

そして、闇統べる王は全身を赤い鎧で纏った『仮面ライダーアクセル』へと変身した。

「仮面ライダーアクセル・・・いい・・・」

ティアナがぼつりとつぶやいた。

第8話 Mの遊戯 / アグレッシブなのは（後書き）

えー、今回、なのはがかなり壊れてしまいました。

まあ、一時の気の迷いということで、また新しい話が始まれば元に
戻っているでしょう。

いわゆる、ギャグ補正です。

仮面ライダーWめっちゃおもしろいよー！

第9話 Mの遊戯 / 破壊者爆誕（前書き）

サイクロン・ジョーカー・エクストリーム!!

やだ、意外といいじゃない・・・

というわけで、またやりたい放題です。

これはあくまで番外編ですので、時間軸などはメチャクチャです。
だから使える技などが前後していたりします。

とりあえず面白けりゃいいじゃない!!

自分が!!

だからクレームはやめてね!

第9話 Mの遊戯 / 破壊者爆誕

前回のあらすじ

『さあ、お前の罪を数えろ!』

「・・・わかりやすすぎ」

ティアナはボソツと呟いたが、それは誰にも聞こえなかった。

今フォワード達の前には『仮面ライダーW』と『仮面ライダーアクセル』が立っている。

あのガタイのいい仮面ライダー達が、先程まで9歳ほどの可憐な少女達だったとは誰が思えるだろうか？

「一体どういう事ですか？」

なのはが正座しながら近藤に質問する。

近藤は抱いていた雷刃の襲撃者をゆつくりと下ろし寝かせる。

「実は、エレノアがまた地球の番組に興味を持ちまして、その番組

を一緒に見ていたマテリアル達が『変身ベルトが欲しい』とか言いまして……」

「……それで作っちゃう近藤さんがすごいよ」

近藤の説明する経緯に呆れた声をだすフェイト。

「いや、実はアレは結構簡単に作れるんです。仮面ライダーの外装もバリアジャケットの構築を固定化して、変身のときに強制で男の体格にする変体魔法をかけるだけです。ガイアメモリもカートリッジシステムの応用です。デバイス作るより簡単ですよ。シャリーならもつと性能のいいドライバ作れるんじゃないですかね？」

なのはとフェイトは感心していた。

そうこう話しているとフォワード達と模擬戦を始めたようだった。

仮面ライダーの二人は主に接近の格闘タイプのように、仮面ライダーWはスバルと、仮面ライダーアクセルはエリオと戦闘していた。それを見てなのはとフェイトは首を傾げる。

「なんで一対一？」

「キャロとティアナは援護しないの？」

そう、今スバルとエリオは仮面ライダーに對しいわゆるタイマン勝負をしているのだ。

少し離れた場所で二人の戦いを見守るティアナとキャロ。

ちなみにキャロはフリードを竜魂召喚によって真なる姿にさせていた。

「まあ、今回は性能テストを兼ねてますからね。それに・・・」

「それに？」

近藤の言葉の続きを正座しながら待つのはとフェイト。

「タイムンは特撮ヒーローの基本でしょ？ああ、戦隊ヒーローは違うか」

そんな説明を聞いたなのはとフェイトはポカーンと口を開けて呆れていた。

「ふん！」

ダブルが拳を突き出し、スバルはそれをプロテクションで防ぐ。

（ひとつひとつの攻撃に全て魔法が付与されてる！？しかも重い！）

スバルは苦悶の表情で嵐の如く拳を繰り出すダブルの攻撃を防いでいた。

変わって、エリオとアクセルはお互いの得物をぶつけ、火花を散らしている。

だが、エリオが少々分が悪い。
ストラダは槍である。

対してアクセルの武器はエンジンブレードという剣。

リーチはエリオに分がある。しかし、アクセルはエリオの攻撃間合いを作らせない。

必ず接近し、エリオに攻撃させる暇を与えない。

アクセルのもつエンジンブレードは刃渡りが短い。だから、必然攻撃範囲も狭い。

しかし、そんなハンデはアクセルには関係ない。アクセルは驚異的なダッシュと勘でエリオに接近するのだ。

「どうした小僧！貴様の力はこんなものか！」

アクセルが嘲け笑う。

「いえ、まだまだ！！」

エリオはバックステップし、アクセルとの距離をとる。

そして、ストラダにカートリッジを一発ロードする。

それを見たアクセルはエンジンブレードの柄部分を空け、新たなガイアメモリを差し込んだ。

エンジン

エンジンブレードからまた野太い男の声が響く。

「紫電一閃！！」

エリオはストラダを突き出し、呐喊とっかんしてくる。

電撃を帯びた槍がアクセルを襲う。しかし、アクセルは落ち着いた動作でエンジンブレードのトリガーを引いた。

エレクトリック

「はあ！」

アクセルはエンジンブレードを振る。その刀身には電撃が発生していた。

ストラダとエンジンブレードがぶつかり合い、お互いの電撃が干渉し合い、爆発が起こった。

「うわああっ!!」

エリオは爆風によって吹き飛ばされたが、アクセルはその場に立ち、エリオを追従する。

エンジン・マキシマムドライブ！

アクセルはエンジンブレードを下段に構え、足幅を広げ、腰を落とす。

「絶望がお前のゴールだ」

アクセルはトライアングルにエンジンブレードを振ると、飛ぶ斬撃としてエリオに襲い掛かる。

A字型のエネルギーの斬撃を射出する『エースラッシャー』である。そして、エースラッシャーはエリオに当たると爆発し、エリオは気

絶した。

「エリオ！？」

スバルはエリオが撃墜されたことに動揺した。

「よそ見してる余裕あるのか？」

仮面ライダーWから雷刃の襲撃者の声がした。

ダブルは一度スバルと距離をとり、黄色いガイアメモリを取り出した。

「な！？」

スバルは驚く。

まだガイアメモリがあるのか、と。

ルナ

ダブルは黄色いガイアメモリを起動させ野太い声が響くと、サイクロンメモリをドライバから引き抜き、黄色いガイアメモリを差し込み、ドライバのスロット部分を外側に倒した。

ルナ・ジョーカー！

野太い男の声と共に、緑の半身は黄色に変わった。

「それ！」

掛け声と共に黄色い半身が手を伸ばすと、鞭のように伸びスバルを攻撃した。

「なっ！？」

いきなりすることに驚くスバル。
しかもダブルの攻撃は鞭のようにしなるので、不規則で予測できない。

ダブルの攻撃を尽くうけ、バリアジャケットがボロボロになる。

「さあ翔太郎、メモリブレイクだ！」

「ええ、そうですね、フィリップ」

ダブルはドライバからルナメモリを抜き、再びサイクロンメモリを差し込む。

サイクロン・ジョーカー！

ダブルは再び緑の半身になる。

ダブルはジョーカーメモリをダブルドライバから引き抜き、腰に付いているもうひとつの黒いスロット『マキシマムスロット』へ差し込んだ。

そして、マキシマムスロットを叩いた。

雷刃の襲撃者も星光の殲滅者もノリノリである。

ジョーカー！マキシマムドライブ！

「ジョーカーエクストリーム！」

ダブルはジャンプし、スバル目掛けてキックを繰り出す。

膨大なエネルギーを帯びたキックはスバルに当たり、爆発した。

「メ・・・メモリブレイクって・・・私、メモリ・・・持っていない・・・がくっ」

スバルは気絶した。

「仮面ライダーWはメモリの差し替えて多数の攻撃バリエーションを生み出します」

近藤が淡々となのは達に説明するが、聞いてはいなかった。

「・・・なあ、近藤？アレは誰でも使えるのか？」

ヴィータが目を白黒させながら聞いた。

「まあ、おもちゃですから。誰でも使えますよ」

「おもちゃじゃねーよ！なんだあのでたらめな戦闘力は！？一方的じゃねーか！！」

ヴィータが怒り心頭といった感じで近藤に噛み付く。

「いや、あれは星光の殲滅者と閻統べる王の魔力の賜物ですよ。あのドライバとメモリ自体はなんの攻撃力也没有せん」

「じゃあ、あの赤いのが出した電撃は!？」

「エンジンブレードのелеクトリックはホログラムです」

ヴィータは淡々と答える近藤に、うぐつと言葉をつまらせる。

「あとは・・・お、今度はダブルとキャロ、アクセルとティアナみたいですよ」

近藤が指差す方向には、すでに戦闘態勢に入っているティアナとキャロがいた。

ティアナはアクセルと距離を保ちつつ、ジリジリと様子見をしている。

「そつえば貴様、バイクが好きだそうだな？」

「?ええ・・・それが？」

アクセルがティアナにおもむるに質問してきたので訝しんだが、素直に答えた。

「ならば、これはどうだ!」

アクセルはそういうや、腰のアクセルドライバを両手で取り外した。そして、驚くべき光景をティアナは目にする。

アクセルがみるみる変形していき、真っ赤なバイクになったのだ。

「・・・いい・・・はっ!? だ、だめよ、気をしっかり持たなきゃ!」

一瞬アクセルのバイクフォームに目を奪われていたティアナだったが、すぐ気を取り直し戦闘に集中する。

「クロスファイア・シュート!」

ティアナがクロスファイアをアクセル目掛けて放つ。

高速でスフィアがアクセルを襲うが、アクセルはスロットルを捻るとなんでもないように避ける。

「くっ早い! でも!」

ティアナは幻影魔法を使い、多数の自身を作りだし、アクセルを幻惑させた。

「ふん、幻影で不特定にしたか。だが!」

アクセルはグリップを思いっきり捻る。

「全て倒せばいいだけのことだ!」

アクセルは驚異的なダッシュでみるみる多数のティアナを轢いてい

く。

アクセルに当たったティアナはアクセルと接触すると共に消えていった。

そして、4人目のティアナを轢こうとすると、そのティアナはアクセルを回避した。

「ふん、貴様が本体か」

アクセルは冷たく言い放つが、ティアナは冷や汗をかいていた。

自分の攻撃手段が通じない。

しかし、諦めるわけにはいかない。

ティアナの目は、まだ死んではいなかった。

「ふっ……良い目の輝きだ。よからう！我の最大の一撃をもって応えましょう！！」

アクセルはそういうと、バイクフォームから人型に戻り、腰のアクセルドライバの左に付いているマキシマムクラッチレバーを引き、スロットルを捻った。

アクセル！マキシマムドライブ！

アクセルは腰をおとす。

目の部分が青く光り輝く。

「振り切るぜ！」

アクセルはティアナ目掛けて飛び、赤く輝いた後ろ跳び回し蹴りを叩き込んだ。

『アクセルグランツァー』

回し蹴りの軌道上にタイヤ跡状のエネルギーを放出し、ティアナを襲う。

そしてインパクトの瞬間、爆発し、ティアナはそのまま意識を手放した。

キャラはダブルと距離をとっていた。

ダブルはキャラに攻撃する気配はない。

キャラは横に竜魂召喚をしたフリードを待機させているから、それを警戒しているのかと思ったがそうでもないようだ。

キャラはダブルの意図が掴めなかった。

先程のスバルとの戦闘で見せた伸びる腕を使えばこんな距離無いに等しいのに。

キャラの頬に汗がつつたう。

横にいるフリードも何か落ち着きが無い。

だが考えてばかりでは進展しない。

「フリード！ブラストレイ！！」

キャラの掛け声と共にフリードの口から炎が噴き出し、ダブルに襲

い掛かる。

そして、その間にキャラは小さく何かかを呟いていた。

「・・・まあそれしかないよな・・・」

雷刃の襲撃者の声でダブルが呟く。

キャラはあくまで後方支援である。メインで戦うにはバリエーションが少ないのだ。

だから、ダブルもキャラの攻撃パターンは予想できた。

ダブルはため息をつきながら炎を避けようとした。

しかし、動けない。

足が地面に吸い付いているように、ピクリとも動かないのだ。

ダブルは自分の足元を見た。すると、足首から地面にむけて無数の鎖が巻き付いていたのだ。

「アルケミックチェーンですか。なかなかどうして」

星光の殲滅者の嬉しそうな声でダブルは言った。

キャラが何かを呟いていたかと思っていたから、何かすると思っていたが、なかなかうまい。

すると、ダブルはまたどこからかガイアメモリを2本取り出し、ダブルドライブに刺さるサイクロンメモリとジョーカーメモリを引き抜き、新たに赤と透明なメモリを取り出した。

ヒート メタル！

ガイアメモリを起動させ、ドライブのスロットへ差し込み、再びスロットを左右へ展開する。

ヒート・メタル！

野太い男の声と共に、ダブルの姿が赤い半身と銀の半身に変わった。

「はあっ！」

ダブルは赤い半身で拳を繰り出し、フリードの炎を迎撃した。

ダブルの拳からも炎が発生し、フリードの炎と相殺してしまった。

キャロは驚くが、まだ自分にアドバンテージがあるのには変わりはない。

ダブルはアルケミックチェーンで身動きが取れないのだ。恰好の標的である。

「フリード頑張って！！ブラストレイ！！」

キャロの掛け声にフリードは無数の炎で応えた。

これだけの数を一度に拳だけで撃ち落とすのは不可能だ！キャロは勝利を確信した。

しかし、ダブルは至って冷静だった。

「ふむ、メタルならばこのままでも耐えることはできますが、それでは面白くないですね」

「そうだな、最後のメモリも使うか？」

そう言うとダブルは新たに青いガイアメモリを取り出した。

トリガー！

青いガイアメモリを起動させ、野太い男の声が響く。

ダブルドライバのメタルメモリを引き抜き、青いガイアメモリを差し込む。

ヒート・トリガー！

銀の半身が青に変わり、胸に付いている銃を構えた。

「さぁお嬢ちゃん、終わりだ」

ダブルはトリガーマグナムの引き金を引き、フリードの炎を全て撃ち落とした。

「そ、そんな・・・！？」

キャロの顔が驚愕に染まる。

ダブルはダブルドライバからトリガーメモリを引き抜き、トリガーマグナムに差し込んだ。

トリガー！マキシマムドライブ！

「トリガーエクスプロージョン！」

トリガーマグナムからデイバインバスターのような赤い砲撃が発生し、その砲撃はキャロを飲み込んだ。

「これで模擬戦するの禁止」

「ええー！？」

なのはが禁止令をだすと、不満の声をあげるマテリアル3人娘。

「おもちゃにマジの魔力込めるからだ！遊びと混同してんじゃねー！」

ヴィータがプリプリと怒る。

「まあ、三人だけで遊ぶのは構わないよ」

フェイトが苦笑しながらフォローをいれる。

「ダブルとアクセルだけじゃあ面白くないよ！ドーパントは必要だよー！！」

雷刃の襲撃者は腕をブンブンと振って猛抗議する。

「・・・あんな、ティアナやエリオ達は怪人じゃないぞ・・・」

近藤は呆れていた。

「はーっはっはっはー！そんな悩みは私におまかせ！」

どこからか笑い声が聞こえた。

「どこだ！？」

「あ！あそこだ！」

闇統べる王が声の主を探すためキョロキョロしていると、雷刃の襲撃者が指差した。

そこには、エレノアがゆつくりと歩いて近づいてきていた。

「・・・何者ですか、あなたは？」

星光の殲滅者がエレノアに質問する。

なのはや近藤は「はあ？」と頭に？を出していた。

そんなやり取りにエレノアは不適な笑みを浮かべ、こう答えた。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけ！」

そう言い放つと、エレノアは白い箱のような物『ディケイドライバ』を取り出し、腰に装着させた。

そして、一枚のカードを片手に持つ。

「そ、それはまさか!?!」

異常な驚きをする闇統べる王。

なんか芝居臭い。セリフが若干棒読みだし。

近藤はピンときた。

こいつら、打ち合わせしてたな・・・

つか、エレノアの持つてるあのバツクル・・・シャーリーだな・・・

・

「変身!」

エレノアはそう叫ぶとカードをディケイドライバに差し込み、両手でバツクルを畳んだ。

K A M E N R I D E ・ D E C A D E !

声と共にエレノア挟むように鏡が現れエレノアの全身を黒いスーツが包み込む。そして前に何本もの赤い線が現れる。

その線はエレノアの顔に纏われた仮面へ移動し、エレノアの姿はマゼンタと黒を基調とした『仮面ライダーディケイド』となった。

エレノアは首を回し、パンパンと手を掃った。

「さあ、どこからでもかかってこい」

ディケイドとなったエレノアはマテリアル3人娘を挑発する。

「おのれ、ディケイド・・・」

「世界の破壊者・・・」

雷刃の襲撃者と星光の殲滅者は苦々しくディケイドを睨み、再びガイアメモリを手にした。

しかし、悲しいかな、セリフが棒読みだった。

「いきますよ、フィリップ」

星光の殲滅者は薄く笑う。

「ああ、翔太郎！」

雷刃の襲撃者はニカツと歯を見せた。

サイクロン

ジョーカー！

『へんしん！』

「我を忘れるなよ！貴様なんぞひとひねりだ！」

アクセセル！

「へん・・・しん！」

そして、3人の仮面ライダーによる壮絶な戦いが始まった！

そんな3人の戦いを見ていた近藤やフォワード達かというと・・・

「・・・さ、ご飯食べに行こうか」

「そうだね。あ、そういえば、今日ははやてちゃんのリクエストの麻婆豆腐の日だ」

「本当ですか！？僕、アレ好きなんです！」

「あたしは麻婆豆腐より天津飯のが好きなんだけどな・・・」

「グイータ副隊長は辛いのが嫌いなんですか？」

「いや、そうじゃないけどな・・・」

3人の仮面ライダーを放置して食堂へと向かったのだった。

後日、ティアナが闇統べる王からアクセルメモリとドライバを、エリオとスバルが星光の殲滅者から6個のガイアメモリとダブルドライバを借りている所を目撃した者がいたとか、いないとか。

第10話 シグナムのぼうけん

「あるじはやて。わたしはもうがまんできません。おひまをいただきます」

シグナム（小）はそう言い一礼した。

そしてくるりと踵を返し、部隊長室を後にした。

しかし、シグナムに三行半を突き付けられたはやてはというと・・・

「・・・あ！シグナムたん！？子供なんやからあんまり遠い所行ったらあかんよー！」

全然堪えていなかった。

事の発端ははやてのシグナムいじりにあった。

シグナムが小さくなってからというもの、はやてはシグナムにベタベタするようになった。

可愛いものを愛でるのは別に悪いことではない。

シグナムも、主はやてが喜ぶのならと渋々従っていた。

しかし、はやての行動は日を追う毎にエスカレートしていった。

「シグナムたん、ほーら高いたかい！」

「シグナムたん、コレにお着替えしよか！え？この服か？これはゴスロリや！シグナムたんのサイズに合わせて私が作ったんやで！」

「シグナムたん、一緒にお風呂入ろうか？それで、洗いつこしよ！」

「はああ、シグナムたん、ね、寝ようか・・・大丈夫や、なんも怖がることないで。ちよつと気持ち良くなるだけや・・・」

・・・という具合である。

忍耐強いシグナムもとうとう我慢出来なくなったのだ。

シグナムはひとりトボトボと機動六課隊舎を歩いていた。
ちなみに、服装は赤を基調としたゴスロリファッションである。
白いストッキングに、赤いローファーを履き、歩く度にカツカツという音と共にフリルとピンクのポニーテールが揺れている。

> i 1 0 9 7 8 — 7 9 1 <

最近の主はやては目に余る行動ばかりとる。

確かに、主はやてが満足しなければ私は元に戻らないのだろう（たしかそういう話だった）。

しかし、主はやての願望は底無しで、もう貞操の危機に直面しているのだ。

風呂に入ったときも体を洗うという理由でいやらしい手つきで体をまさぐられた。

一緒に寝るということで寝たはいいが、何故かパジャマを脱がされ、シャマルが止めに入らなければ、危うく大切な何かを失う所だった。このままでは私の精神が崩壊してしまう。

こちらでひとつ、主はやてに頭を冷やしてもらって真剣に私を戻してもらおうよう努力していただかなくては。

シグナムはぶつぶつ呟きながら何処へ行くでもなく、隊舎をさまよっていた。

（さて、何処へ行こうか？）

シグナムは思考した。

高町の所へ転がり込む・・・ダメだ、主と高町は親友、すぐに主はやてが飛んでくる。

同様の理由でテストロッサも却下。

ティアナの所へ転がり込む・・・ダメだ、相方のスバルと共に高町へ密告するだろう。

エリオ、キャラの所・・・テストロッサに密告するな。それに、最近エリオの私を見る目が怖い。主はやてに似た視線だ。そして、キャラの視線も最近殺気じみている。

シャーリー・・・フェイトに密告しそうだ。

アルト、ルキノ・・・主はやてが飛んでくる。

たしかエレノア姉上が臨時に部屋を借りているはず・・・だめだ、

今以上に危険に陥りそうな気がする。

・・・こう考えると何処にも行けないな・・・

そう考えていると、ふと視界の隅に子供4人が隊舎の外で遊んでいるのが見えた。

それはマテリアル3人娘とヴィヴィオだった。

シグナムは沸々と怒りが込み上げてきた。

こんな状況を作り出した張本人達が、呑気に遊んでいるのだ。今自分はこんなに悩んでいるのに。

文句の一つでも言ってやろうか？

そう思い、シグナムは隊舎の外へ足を向けようとしたとき、声をかけられた。

「シグナム副隊長、お一人で何処かへ行かれるのですか？」

それは近藤だった。

「い、いや、すこしな・・・」

シグナムは気まづくなった。

今マテリアル3人娘を預かっているのは近藤である。

今からマテリアル達に文句を言いに行く等とは言えるはずもない。

「ああ、そういえばはやて隊長が、シグナム副隊長を見つけたら5時までには帰ってくるように」と言っていましたよ」

シグナムはその言葉を聞き、プルプル震えた。
そして、とうとう噴火してしまった。

「わたしはこどもではやーい!!」

シグナムがあまりにも怒るので、とりあえず隊舎の外へ連れ出し、ベンチに座らせ、オレンジジュースを飲ませた。
一息ついて少しは落ち着いたのか、シグナムは近藤にぺこりと頭を下げ、これまでの経緯を説明した。

「・・・なるほど、そういうことでしたか」

近藤はシグナムにことのいきさつを聞いていた。

「そうなのだ!まったく、あるじはやてにはこまったものだ!」

ブンス力怒りながらオレンジジュースを飲むシグナムだったが、近藤は顎に指を当て考えた。

「たしかに、少し冷却期間は必要ですね・・・シグナム副隊長、提案があるのですが」

「ん？なんだ？」

シグナムは大分機嫌が戻っていた。

この子供体型になってから、周囲の人間は皆シグナムを子供扱いしていた。

それに対してシグナムは怒るのだが、相手には逆効果で、さらに子供扱いしてくるのだ。

だが近藤は違う。

近藤はシグナムが子供体型になっても変わらず接してくれているのだ。

（ああ・・・いいな、こういうのは・・・やはり近藤は公私をキツチリ分ける男だな・・・）

シグナムの近藤に対する好感度はギュンギュン上がっていった。

「一時、俺の部屋で寝泊まりするというのはどうでしょう？」

「な！？こ、こんどのへやでねりゅ！？」

シグナムは慌てたため、少し囁んだ。

「状況を鑑みるに、シグナム副隊長の交遊関係では機動六課内ではやて隊長と隔絶するのは難しいでしょう。かと言って、隊舎外に出るのは危険です。ならば、この機動六課内で一番接触の少ない俺の部屋が最善だと思っんです」

「あ・・・うん・・・それはそうだが、しかしな・・・」

近藤の提案にシグナムは渋った。
だが、近藤にはシグナムの渋る理由もわかっていた。

「たしかに、シグナム副隊長は体こそ小さくなりましたが、心は今までの通り成人女性です。気のない男の部屋で寝泊まりすることに抵抗もあるでしょう。ですが、とりあえずはこれが今のところ一番の安全策だと思いますよ」

たしかに近藤の言う通り、それが一番の安全策だろう。
シグナムも近藤という人間を信じていないわけではない。
だが、所詮男、何かのきっかけで襲われる可能性もある。

「・・・ベッドはひとつか？」

「ひとつです。でも安心してください。俺はソファで寝ます。まあ、マテリアル達と一緒に寝てもらうことになりますが・・・」

近藤がそう言っても、シグナムはまだ決断できずに首を捻って悩んでいた。

そこへ、遊び終わったのかマテリアル達とヴィヴィオが近付いてきた。

「おおさま、シグナムさんどうしたの？」

ヴィヴィオが近藤に尋ねたが、近藤は「ちょっとな」と言いいきさつを話さなかった。

もしかしたらヴィヴィオがなのはかフェイトに言ってしまったらすぐにはやてがシグナムを連れていくだろう。
それでは台なしになってしまう。

そこへ、『闇統べる王』がフンと鼻を鳴らした。

「大方、あの小鳥が貴様をおもちや扱いするのに耐え兼ねて逃げたのだろう？ は！ 軟弱で愚か者だな」

闇統べる王はシグナムを馬鹿にするように見下しながら嘲笑った。

「きさま・・・！」

シグナムはカチンときて闇統べる王を睨んだ。

元はといえば、貴様らのせいだろうが！！

シグナムは闇統べる王につかみ掛かろうとした。

だが、シグナムより先に近藤のゲンコツの方が先に闇統べる王に届いた。

いつものドゴンッという音ではなく、ゴツンという比較的軽い音がした。

それでも相当痛いのか、闇統べる王は頭を押さえ涙目になっていた。

「お、親父どの・・・痛い・・・」

「また言葉遣いが悪くなったからだ。駄目だぞ、そんな乱暴な言葉遣っちゃ。言っただろう？」

近藤に軽く説教され、うぐつと喉を詰まらせた闇統べる王はシュンと落ち込んだように頭を垂れた。

「う、うむ・・・すまぬ、親父どの。・・・その、悪かったな烈火の将。許してくれ」

闇統べる王はシグナムに向かって素直に頭を下げた。

これに驚いたのはシグナムだ。

あの厚顔不遜の閻統べる王がここまでしおらしく、かつ素直に非を認め謝るとは。

それ程近藤がマテリアル達に好かれているのか、はたまた凄まじいスバルタなのか。

「とにかく、一旦部屋に戻りませんか？詳細や結論はそれからのほうがよいでしょう」

『星光の殲滅者』がそう提案し、皆異議なし（シグナムは渋々）ということ、とりあえず近藤の部屋へ行くことになった。
ヴィヴィオにはキツチリ秘密にするように釘を刺して。

近藤の部屋に入ると、シグナムは顔をしかめた。

「こんど、へやきたないぞ」

「え？そうですかね？それでも以前よりはマシになったんですけど」

テーブルの上に散らばる書類や何かの部品、床に散乱する服とマテリアル達のおもちゃ。

たしかに、以前のように汚れ物は少なくなっている。しかし、代わりによくわからない機械の部品や用途不明な物体等が転がっていた。衛生的によろしくないと判断したシグナムは、すぐさま部屋を片付けるよう指示した。

「まったく、こんどはずばらだな。いや、おとこといっなのはみなそうなのか？」

シグナムは呆れつつも、意外とだらしのない近藤の一面を見れた事に、親近感が湧いてきた。

（仕事ではあれだけ真面目で、テキパキそつなくこなすのに、私生活は全然のようだな。まったく、世話の焼ける）

シグナムは自然と笑みを浮かべていた。

部屋の掃除も終わり、シグナムはマテリアル達にも事の詳細を話し、近藤の提案をどうするか尋ねていた。

「私は父上の案に賛成です」

「僕もパパリン案賛成かな」

「うむ、我もその方が良いと思う」

星光の殲滅者、雷刃の襲撃者、閻統べる王の順番に近藤の案に賛成した。

「よし、この案は賛成多数で可決だな」

閻統べる王が締めようとしたので、シグナムが待ったをかけた。

「たしかに、こんどうのあんがげんざいのところさいぜんなのはわかる！しかし、かしだ！わたしはおんだ！いまでこそこんなりだが、おとなのおんななのだ！すぐに、はいそうですかといって、はいはいこんどうのへやでねとまりするのはていこうが・・・」

「乙女ですね、烈火の将」

星光の殲滅者が薄く笑った。

乙女と言われ、シグナムは顔を赤くする。

「お、おとなをからかうにや！」

シグナムはプンスカ怒るが、星光の殲滅者は涼しい顔をしている。

「僕らよりちっちゃいのに、何が大人だよ。大人なら舌嚙むなよ」

雷刃の襲撃者がニヤニヤしながらシグナムをからかう。

「な、にやにおーっ！！」

「ほら、また嚙んだ。悔しかったら東京特許許可局って言うてみなよ。もしくは手術中」

「・・・とうきょうとつきよきよきよき！・・・しゅじゅちゅちゅう！・・・くっ、しゅ、しゅじゅちゅ・・・しゅじゅちゅちゅー！！！」

シグナムは必死に早口言葉を発声するが、ことごとく嚙んでしまい、顔を真っ赤にしながらだんだん涙目になってきた。

雷刃の襲撃者は必死なシグナムが面白くて、くつくつと肩を震わせながら笑いを我慢していた。

とうとうシグナムは俯いてしまった。

子供にからかわれ、あしらうこともできず相当ショックだったようだ。

「父上、烈火の将のフォローを。わたしは雷刃を叱ります」

「フォロー？ 慰めると？」

「そうです。抱き上げて背中でも軽く叩いてあげてください」

（そんなことしたら子ども扱いするなー！！って余計怒ると思うけどな・・・）

近藤はそう思いつつため息をつき、星光の殲滅者の言う通りシグナムをフォローするため、抱き上げた。シグナムは5歳児並の体格なので、体重も軽く、ひよいと持ち上げられた。

シグナムの背中を軽くポンポンと叩き、あやすように頭をゆっくり撫でる。

すると、シグナムは近藤の服にしがみつき顔を近藤の肩にくっつけた。

「・・・う・・・ううう・・・」

どうやら悔しくて泣いているようだ。

「シ、シグナム副隊長？」

近藤はしがみつきながら泣きじゃくるシグナムに焦った。

だが、星光の殲滅者はこうなる事を予想していたようで、目を細めながらシグナムを見つめた。雷刃の襲撃者に拳骨を見舞いながら。

「ふむ、やはり烈火の将も魂が体に引つ張られていたようですね。いままでは強靱な精神力で耐えていたのでしょうか」

星光の殲滅者が顎に指を当てシグナムを観察する。

「うむ、そして、雷刃に打ち負かされて強靱な精神力が決壊したのだろう。最早精神も幼子だな」

闇統べる王も腕を組んで近藤に抱きかかえられ、しがみつくシグナムを見てため息をついた。

またこのパターンか・・・

近藤は天を仰ぎ、ため息をついた。

しばらくすると、先程までしがみついて泣いていたシグナムが大人しくなった。どうやら眠ってしまったようだ。

無理もない、今まではやてに散々いじられ、心休まる日がなかったのだ。

そこで近藤が抱きかかえ慰めた。

子供には無類の力を無自覚に発揮する稀少能力『子供たらし』に、当然シグナムもやられた。

安心しきってしまい、気持ちがゆるみ、睡魔が襲うことを誰も責めることはできない。

マテリアル達も眠ってしまったシグナムを見てクスリと微笑んだ。

近藤はシグナムをベッドに寝かせようとしたが、シグナムは小さい手で近藤の服をしっかりと握っており、離す気配がなかった。無理に引き剥がそうとすると、シグナムがぐずりだすので対処が出来ない。

（今日の仕事はもういいか・・・）

仕方なく近藤はシグナムを抱きかかえながらソファに座り、背中を軽くポンポンと叩いてやった。

気がつけば、近藤の両隣にはマテリアル達が座り、近藤にもたれ掛かって一緒に昼寝をしてみた。

ちなみに、雷刃の襲撃者はシグナムを必要以上にいじめたということと、近藤のひざ枕はお預けとなった。

「なんでー!？」

「自業自得です」

星光の殲滅者はため息交じりに呟いた。

第11話 いいわけないだろうがー！

前回のあらすじ

ドメスティックバイオレンス
主はやてのDVに耐えかねたシグナムは逃げ出した。

身も心もずたずたになり身寄りもなく、彷徨っていた。

そんなとき、間男のように近藤がシグナムの心の隙間について言葉巧みに近寄る。

シグナムの明日はどうなる！？

「そのあらすじ・・・間違ってるような・・・いや、合ってるのか？・・・うーん・・・はっ！？なんだ、夢か」

『雷刃の襲撃者』は器用に胡座をかいて腕を組みながら寝ていた。

寝起きでキョロキョロと周囲を見渡すと、『星光の殲滅者』『闇統べる王』がソファで寝ていた。

しかし、近藤とシグナム（小）がいなかった。

どこに行つたのだろうか？

雷刃の襲撃者は立ち上がり、近藤とシグナムを探した。

近藤とシグナムはすぐに見つかった。

エレノアが臨時に借りている部屋にいたのだ。

エレノアが紙袋を大量に持っており、シグナムはその紙袋の中身を物色していた。

「パパリン、烈火の将は何をしているの？」

雷刃の襲撃者は近藤に近寄り聞いた。

「ん？なんだ、起きたのか。シグナム副隊長に自分の服を選んでもらつてるんだよ」

「服？」

雷刃の襲撃者は紙袋の中身をほじくり返しているシグナムを見た。かなり真剣な表情で服を選別している。

「あのごスロリファッションは嫌なんだと」

近藤は自分の顎を撫でながら言う。

「かわいいのにねー」

エレノアは勿体ないと言いながら頬に手をあて、ため息をついた。

「なにがかわいいだ！こんなゴテゴテとそうしょくしてフリフリと
うつとうしいふく、わたしにはあわん！わたしはきのうじゅうしな
のだー！」

シグナムはエレノアを睨みながらガーツと吠えた。

シグナムははやと別れてから、ずっとゴスロリファッションでい
た。

本人には、それがたまらなく我慢できないものだったらしい。

それで、シグナムが近藤に相談したところ、以前子供になったフェ
イトやマテリアル達のために大量に服やら下着やらを買っていたと
近藤が言い、それならばとシグナムが近藤の腕を引っ張りエレノア
が保管している子供服を探し出したのだ。

服は10着ほどあったが、どれもがマテリアル達の体格に合わせた
サイズだった。

つまり今のシグナムには大きすぎるのだ。

「くっ、どうすれば・・・」

シグナムは悔しそうな顔をする。

ゴスロリから解放されると思っていたのに・・・

「じゃあ買ってきてきましょう。エレノア頼むぞ」

近藤が軽く言った。

「ついでにスイーツも買ってきていい？」

涎を垂らしながら目をキラキラとさせるエレノアを見て近藤は苦笑しつつも了承したが、シグナムは焦ってしまう。

「ま、まて！そんなわざわざかいにくくらいならがまんするぞ！
？それにかねならわたしが・・・あ、カードはへやだ・・・」

決断力があるというか、後先考えていないというか。

子供服とて安い買い物ではない。物によっては大人の服より高額な物もある。サラツとシグナムの為に金を使う近藤に、シグナムは我が儘を言っていた自分を恥じた。

しかも、自分の金を出そうにもカード関係は全て自室、すなわちはやての元である。

今あの『悪の巣窟』に戻るわけにはいかない。

シグナムはますます自分を恥じ、落ち込んだ。

「構いませんよ。シグナム副隊長が安心できるなら、そんな出費軽いものです」

「こんどう・・・おまえ、ほんといいやつだにや・・・」

シグナムは感動のあまり、涙ぐみ舌を噛んだ。

ということで、エレノアは雷刃の襲撃者を連れてシグナム用の子供服を買いに行った。

「じゃあな、烈火の将、カツコイイ服買ってくるからな！あとお菓子も！」

雷刃の襲撃者が手を振る姿に苦笑しながらも、近藤とシグナムは二

人を見送った。

二人が近藤の部屋に戻ると、星光の殲滅者と闇統べる王も起きていた。

そして、エレノアと雷刃の襲撃者がシグナムの服を買いに行った事を告げた。

「そうか、烈火の将の服をな」

「可愛い服なのに、勿体ない・・・」

闇統べる王はフムフムと頷くだけだったが、星光の殲滅者は何故か残念そうな顔をしていた。

そこで、シグナムはある違和感に気付いた。

「3にんは、わたしのことを『れつかのしょう』とよぶのだな」

シグナムがそう言うと、星光の殲滅者と闇統べる王は「何言ってるのこいつ?」という視線をシグナムに向けた。

「そりゃあ、貴様が『烈火の将』なのだから当然ではないか。ああ、『剣の騎士』の方がいいか?」

当然だろう、と闇統べる王はシグナムに言い放つ。

「いや、それはそうなのだが・・・そういえばおまえたち、ちゃん

としたなまえがないな」

「名前なら『星光の殲滅者』『闇統べる王』『雷刃の襲撃者』とちやんとした名前がありますか？」

「それはちゃんとしたなまえとはいわん。『あだな』とか『ふたつな』というのだ」

シグナムは呆れていた。

まさか、アレを名前だと思っていたとは。

そもそも、その辺りは世話を焼いている近藤が最初にしなければならぬ事なのだ。

「いや、マテリアル達はすぐに消えると思っていたので考えてませんでした。それに、今更感もありますし・・・」

「おまえ・・・」

シグナムは近藤の言い訳に呆れ果てた。

「3人の名前？・・・ああ・・・」

エレノアは帰ってくるなりシグナムに言われた事に何か思い出したような表情をしていた。

そういえば、マテリアル達の名前が無いということに。

ちなみに、シグナムはエレノアが買ってきた服にすぐ着替えた。

シグナムが機能重視と言っていたので、そういう動きやすかるうという服ばかり4〜5着買ってきていた。

シグナムは中でも上はジャージ、下は七分丈のパンツと動きやすいものを選んだ。これにはエレノアに真剣に感謝したシグナムだった。

下着はどこでこんなものが売っているのかと聞きたくなるほどスケスケだったり、紐だったり、紫や紅だったりしたがこの際シグナムは気にしなかった。

「あねうえ・・・」

だが、さきほどまでの感謝の気持ちも吹き飛び、シグナムはまた呆れた。

「で、でも、別に今のままでも不便無いし、いいんじゃないかな？」

エレノアはジト目で見てくるシグナムに焦った。

「そういうもんだいではありません！キッチンとしたなまえがないなど、この3にんがかわいそうではないですか！」

シグナムの剣幕にエレノアはおもわず後ずさる。

「こんどう、せきにんをもつて3にんのなまえをかんがえろ」

シグナムは腰に手を当て、ビシツと近藤を指差す。

「はあ、まあいいですけど・・・」

なんとも曖昧でやる気のない返事をする近藤。
とりあえず、近藤はマテリアル達を見渡す。

3人共、近藤が名前を付けてくれるということに目をキラキラさせていた。

「・・・どんな名前がいい？」

「カッコイイ名前！」

「かわいい名前を・・・」

「神秘的な名前がいい」

近藤の質問に、なんとも無茶な要求をしてくる。

雷刃の襲撃者の答えは予想できたが、星光の殲滅者の答えには少し驚いた。もしかしたら、この3人の中で一番女の子らしいのではないだろうか？しかし闇統べる王、神秘的ってなんだ？

近藤は悩んだ末、一人ずつ指差していった。

「雷刃の襲撃者」

「なになに！？」

「雷子」
「カミコ」

「えっ！？」

雷刃の襲撃者、改め雷子の顔が驚愕に染まる。
雷子・・・なんとなく速そうな名前である。

「星光の殲滅者」

「はい」

「星子^{せいこ}」

「・・・はい？」

星光の殲滅者改め星子は首を傾げ、聞き間違いではないかと耳をほじった。

星子・・・昭和のアイドルのような響きだ。

「闇統べる王」

「うむ！」

「統^{すべ}べ子」

「・・・ええ」

闇統べる王改め統べ子は心底嫌そうな顔をした。
統べ子・・・神秘的・・・いや、そもそも意味がわからない。

「よし、これでいいだろう」

近藤は一仕事終えたかのように満足そうな顔をした。
だが、シグナムがそれを許さなかった。

「いいわけないだろうがー!!」

シグナムは近藤のスネをおもいつき蹴りあげ、近藤はその痛みに
のたうちまわった。

「わすれていた。こんどのネーミングセンスがかいめつてきに
ダメだったことに・・・」

シグナムは頭を抱えた。

そこで、シグナムははっとした。

「そういえば、あねうえのなまえはだれがつけたのですか？」

「え？ご主人様だけど？」

「さきほどの3にんのなまえとはネーミングレベルがちがうでは
ないですか！」

シグナムはエレノアに詰め寄った。

「そ、そんなこと私に言われても・・・ていうか、ネーミングレベルって何その単語？」

なんだか今日のシグナムはえらく強気である。エレノアもたじたじだ。

シグナムは近藤にエレノアの名前を付けた経緯を聞いてみた。すると近藤は首を捻り、考えだした。

「えー？なんだったかな・・・あ！そうだ、台風だ！」

近藤は思い出したようで、おもわず大声を出した。だが、シグナムはそれだけではわからないので、詳しく聞くことにした。

「エレノアを発見した日、いや『源書』そのものを遺跡から発見した日なんですけど、ミッドチルダに台風が来てたんですよ。たしかその台風の名前が『エレノア』でした」

「・・・なんともへんとうにこまるじじつだな・・・」

シグナムどう言ったものか悩んだ。

エレノアの名前の由来が台風から来ていたのには驚いたが、これはある意味ピッタリかもしれない。

普段仕事もせず、ニートみたいな生活をしているが、仲間をからかうときはとことんからかいまくる。

まさに台風である。

近藤にグッドネーミング賞でもあげたいくらいだ。しかし・・・

「もしそのひのたいふうが『グチヨル（うこん）』とかだったら・・
」

シグナムが有り得たかもしれない可能性を口にしてみた。

「なつてたでしょうね『グチヨル』」

恐ろしい・・・

何が恐ろしいかというと、近藤の名前に対する執着の無さ、愛情の無さにである。

エレノアも初めて聞く真実に顔を青ざめさせていた。

「・・・よかった・・・台風が『エレノア』で本当によかった・・・
」

なにかぶつぶつ呟くエレノアは放っておいて、シグナムは改めて近藤に指差した。

「とにかく！もつとましななまえをかんがえろ！いいな！！」

近藤はヘコヘコと頭を下げシグナムの出した宿題に取り掛かることにした。

そこへ、星光の殲滅者があることに気付いた。

「そういえば烈火の将、あなたまだ大人の自我を保てるのですね？」

「ああ、そういえばそうだな。先程はピーピー泣いてもう幼子になったかと思っていたが」

闇統べる王も顎に手をやり、興味深げにシグナムを見た。

たしかに、シグナムは先程雷刃の襲撃者に散々弄られ、ついには泣き出してしまい、更には近藤にしがみつきそのまま寝てしまった。

だが、あの幼児のようなそぶりが今は無い。

若干感情の起伏が激しいのは仕方ないにしても、今は以前のシグナムのような落ち着きようである。

すると、シグナムは顔を赤くして目線をずらした。

「そ、それをいわないでくれ。どうもきもちがたかぶるとおさえきれなくなるのだ」

「ということは、今も魂が子供の体に引き寄せられているのを精神で食い止めているということですか？」

「なんとも強靱な精神だな・・・」

星光の殲滅者と闇統べる王は感心したような、珍しい物を見るようなそんな視線を送った。

そんな関心を寄せられるシグナムが雷刃の襲撃者には面白くないように、またうずうずといじめたくなる衝動に駆られた。

「ふーんだ。早口もいえないし、すぐ舌噛むし子供は子供じゃないか！」

「な、にやんだとー!？」

雷刃の襲撃者の物言いに、シグナムは両手をブンブン振り上げ、顔を真っ赤にして激怒した。そして噛んだ。

「悔しかったら新春シャンソンショーって言ってみなよ。あとは農

商務省特許局。ほれ言ってみ?」

雷刃の襲撃者はニヤニヤ笑いながらシグナムを挑発する。

「・・・しんしゅんしゃんしょー!・・・ふー・・・しんしゅん、しゃんそん・・・よし・・・しんしゅんしゃんしょー!・・・くっ・・・のうしょうむしょうとっきよきゅ!くうっ・・・のうしょうむしょうとっきよきゅ!・・・むきー!らいこのくせになまいきだぞー!!」

とうとうシグナムがキレた。

「雷子言っなちびっ子ー!」

雷刃の襲撃者もつられてキレた。

第12話 マテリアスリー（前書き）

今回、マテリアル達の名前を考えました。

まあ、普通の名前になってしまいましたが・・・

第12話 マテリアルスリー

前回のあらすじ

シグナムの放った強烈なシュートがゴールネットを揺らすかとおもいきや、石崎君の顔面ブロックによってゴールは守られた！
ボールの行方は！？

「うむ、燃える展開だな！だが残念、あらすじ全然違う！！」

「・・・かわいそうな闇統べる王、壁に向かって一人で喋ってますよ、雷刃」

「星光、僕達だけでもなにがあってもずっとアイツの友達でいてやるうよ・・・」

壁に向かって一人ぶつぶつ呟く『闇統べる王』を見て、キラリと涙を流し、改めて友情を強固にしようと誓い合った『星光の殲滅者』と『雷刃の襲撃者』だった。

近藤はシグナムに言われた通り、マテリアル3人娘の名前を現在進行形で考えていた。

ネーミングセンスは壊滅的におかしいと定評のある近藤がまず提示した名前は、ただ『子』をつけただけという、手抜きマックスな状況だった。

当然、シグナムの殺人キックが近藤のスネに会心の一撃を与え、近藤はのたうちまわった。

近藤はシグナムの蹴りが地味に効いたらしく、真剣に考えることにした。

エレノアは、そんな悩んでいる近藤から少し離れたベッドに腰掛けニコニコと笑顔で見ていた。

うんうん唸りながら、部屋をグルグルと歩きながら考える近藤に、シグナムはため息をついて注意した。

「もうすこしおちつかないか。まったく、なさけない」

シグナムはソファにチョコンと礼儀正しく座り、手にはコーラが注がれたコップを両手に持っていた。

足が床に届かず、プラプラ揺れているのはご愛敬だ。

すました感じのシグナムが気に入らない雷刃の襲撃者は、またシグナムをからかいだした。

「ふん、ちびつこのくせに生意気いっちゃってさ。・・・そうだな、

ちつこい烈火の将・・・シグナム・・・ピコーン！閃いた！！よし、今日からお前は『ちびナム』だ！」

「にやつ！？ひ、ひとのなまえをかってにかえるにや！この、らいこ！！」

「雷子言うな、ちびナム！」

噛み噛みのシグナム改め、ちびナムと雷刃の襲撃者改め雷子はギャーギャー騒ぎ出した。

そこに、静かに本を読んでいた星光の殲滅者が注意した。

「あなたたち、静かにしなさい。父上の邪魔になるでしょう」

星光の殲滅者にツッコミ所のない指摘をされてシユンとなる二人。そこへ、シグナムは星光の殲滅者が読んでいる本が気になった。

「せいこうの、なんのほんをよんでいるのだ？なにやらやたらぶあついが・・・」

シグナムが本の表紙を見ようと覗き込んだ。

そこには

『地震の歴史・メカニズム、そして対策マニュアル』
と書いてあった。

「・・・もうすこしこどもらしいほんをよまないか？」

シグナムは星光の殲滅者が心配になってきた。

すると、星光の殲滅者は見下すように軽く笑った。

「そうですね、小さい貴女には難しいでしょうね『ちびナム』」

シグナムは星光の殲滅者にまでからかわれ、顔を真っ赤にして怒った。

「きしゃまもちびナムいうにゃ！この、せいこー！」

シグナムが星光の殲滅者に星子と言った途端、星光の殲滅者は素早くデバイスをシグナムの喉元に突き付けた。

少し俯き加減なので、前髪で目が隠れているため、表情が伺えない。しかし体から発せられる黒いオーラに、シグナムは思わずゴクリと喉を鳴らした。

そして、星光の殲滅者は低い声で言った、

「今度星子と言ったら・・・頭を冷やす為に、紅い花を咲かせますよ？」

「・・・す、すいません・・・」

シグナムは泣きそうになった。

そんな賑やかななか、闇統べる王も大人しく漫画を読んでいた。その漫画も、子供には少々どうかと思う『北斗の拳』だった。

「うむ、やはりレイのように義に生きる男は美しいな」

と呟いたとか、呟かないとか。

「・・・よし、もうコレでいいや!」

少々投げやりな言葉が気になるが、近藤がマテリアル3人娘の名前を考えたようだ。

マテリアル達は近藤の前に並ぶが、先程散々な目に遭ったので、戦々恐々だ。

「まず、星光の殲滅者」

「・・・はい」

近藤に呼ばれ、一步前が出る。

星光の殲滅者は祈った。

(信じています、父上)

そして、近藤が星光の殲滅者の新しい名前を告げた。

「ステラ」

星光の殲滅者はおもいきり目を見開いた。

「・・・ステラ?」

「あ、ああ、なのは隊長のスターズ分隊からと、星光ってところから

ヒントに『星』って意味なんだけど・・・やっぱりダメか？」

「い、いいえ！いいえ！！ステラ！素晴らしいです！ありがとうございます！さいます父上！！」

いままで、ここまで声を張り上げた星光の殲滅者改め、ステラを見たことがあるだろうか？

ステラはニコニコ笑って、自分の名前を何度も呟いた。

「ステラ・・・ふふ・・・ステラ」

少しおかしくなったステラは放っておいて、近藤は名前の発表を続けた。

「次、闇統べる王」

「う、うむ！」

闇統べる王は一步前に出る。

緊張しているのか、ダラダラ汗をかいている。

（た、頼むぞ親父どの・・・！）

闇統べる王は心の中で叫んだ。

「闇統べる王は、えー、『アルク』」

「ア、アルクか！！」

闇統べる王改めアルクは、近藤につかみ掛かる。

「あ、うん。はやて隊長のロングアーチからとって『弓』って意味なんだけど・・・その、悪いな闇とか夜とかでいいのが無くてな」

近藤はアルクにガクガク揺すられながら説明する。

「いいや、そうか！弓、アルクか！！素晴らしい！ありがとう親父どの！！！」

アルクは、ひゃっほーい！といまどき言わない掛け声で飛び上がり喜んだ。

雷刃の襲撃者は、喜ぶ二人を横目に見て嫌な予感がした。

（ヤバイ・・・オチ担当だ・・・）

雷刃の襲撃者はくだらないところでいらない知識があった。

「さて、最後に雷刃の襲撃者」

「あ・・・はい・・・」

返事にも元気がない。

近藤と目を合わせず、キョロキョロとせわしく左右を見る。

ダラダラと変な汗が出る。

「えーと、一番悩んだんだが・・・」

ほら、前フリキタよ。

雷刃の襲撃者は目をつむった。

「エクレール・・・なんだけど・・・」

・・・ん？

エクレール？

「・・・え？それ、僕の名前？」

「うん。『稻妻』って意味だよ。フェイト隊長のライトニングと、雷刃の名前を参考にしたんだけどな。・・・イヤかな？」

近藤は控え目に言う。

何故なら、雷刃の襲撃者は目を白黒させて、ポカーンと口を開けっ放しだからだ。

「え・・・？僕才担当じゃあ・・・」

「・・・子供がそんな芸人みたいな事気にしなくていい」

近藤は呆れた。

雷刃の襲撃者は、少しぼーっとしていたが、だんだん目がキラキラしてきた。

「僕、エクレール？」

「ああ」

近藤が短く返事をする、雷刃の襲撃者改めエクレールは、近藤に抱き着いた。

「僕エクレール！パパリンありがとうー！」

極上の笑顔でエクレールは近藤にお礼を言う。
すると、ステラとアルクも近藤に抱き着き、極上の笑顔を向けた。

「ありがとうございます、父上」

「ありがとう！親父どの！」

「パパリン大好き！」

各々感謝を述べ、顔を近藤にスリスリとこすりつける。

そんな三人がかわいらしくて、近藤はそれぞれの頭を撫でた。

そんな光景を離れた位置で見ていたシグナムは、腕を組んでウンウン頷いていた。

「うむ、わたしのいったとおりだな。やはりなまえがあつたほうが

いいだろう?」

シグナムがそんなことを言っただけで納得していると、マテリア達はじーっとシグナムを見つめた。

そして、顔を見合わせ小さく頷き、シグナムにお礼を言った。

「ありがとー!ちびナム!」

「ちびナムいうにゃーっ!」

シグナムは両手をブンブン振り上げ怒った。

噛んだけど。

「僕はエクレール!」

エクレールがビシッと両手を左側に構える。

「私はステラ」

ステラは両手を右側に構える。

「我はアルクなり!!」

アルクは片膝をつき、両手を羽ばたくように広げた。

『3人揃ってマテリアルスリー!!!』

3人のハモった掛け声と同時に、バックがドーンッと爆発する。

「・・・ああ、うん」

「・・・そ、そうなんだ」

なのはとフェイトは三人のテンションについていけず、戸惑ってしまった。

エクレール、ステラ、アルクは自分の名前が決まり相当嬉しいようで、テンションアゲアゲだった。

そして、この喜びを誰かに知ってもらいたい、分かち合いたいと考えた3人は必死に決めポーズを考案し、まずはなのはとフェイトにお披露目したのだ。

「なんだなんだ、ノリが悪いな」

エクレールがプンスカ怒る。

「高町なのは、私の名前はステラ、『星』という意味ですよ」

ステラがなのはの制服をクイクイ引つ張りながら自分の名前と、聞いてもないのに意味まで教えていた。

ステラの瞳が、なのはにもわかるくらいキラキラしていたので、なのははクスリと笑った。

「うん、いい名前だよ。あなたにピッタリだよステラ」

「当然です。父上が必死に悩んでくれたのですから」

ステラは滅多に見せない子供らしい笑顔を見せた。

「僕はエクレールだ！『稲妻』って意味なんだぞ！カッコイイだろ！」

エクレールは腰に手を当て、エヘンと胸を張る。

フェイトはおかしくなり、クスクスと笑う。

「うん、カッコイイよエクレール。それにカワイイね」

「そーだろそーだろ！もつと褒めろー！」

エクレールは名前が褒められ、わははーと笑った。

「我はアルク！意味は『弓』だ」

アルクはふふんと鼻をならす。

なのはとフェイトは首を傾げた。

「弓?」

「なんで弓?」

二人は疑問を投げかける。

「うむ、八神はやてのロングアーチから取ったそうだ。夜とか闇ではあまり良い単語がなかったらしい」

アルクは懇切丁寧に説明し、なのはとフェイトはああ、成る程と納得した。

「でもいいじゃないアルク」

「うん、なんか強そうだね」

二人はアルクの名前を褒めた。

アルクも自分の名前が褒められて悪い気はしない。むしろ嬉しい。

「そうであろう!それにな、我はエリリンと決めゼリフを考えたのだ!」

そう言うと、アルクは両手の人差し指と親指だけを立て右腕に左手をクロスするように乗せ、二人を指差した。

簡単に言うと、セーラ。ムーンのポーズである。

「私の放つ矢でお前のハートもめろめろだぞ」

アルクは最後にバチコーンとウインクをかました。

しばし静寂が流れる。

「か、かわいい・・・」

「エレノアさん・・・いい仕事してるね・・・」

なのはとフェイトはアルクの可愛さにやられてしまった。
まさしくアルクの放った矢でめろめろになったのだ。

「よし、次はフォワード達、そして八神はやてだー！」

「おー！」

マテリアルスリーは拳を振り上げ次のターゲットへと向かおうとした。

そこを、なのはとフェイトが呼び止めた。

「アルク、ちょっと待って！」

「こっち来て！」

なのはとフェイトはブンブン手招きする。

アルクは首を傾げながらもなのは達の元へ行く。

「なんだ？手短に頼むぞ」

アルクは煩わしそうに言った。

しかし、なのはとフェイトの顔は真剣そのものだった。

「・・・さっきの決めゼリフ、はやてちゃんの前ではやっちゃダメだよ」

なのはが人差し指を立てて言った。

アルクは意味がわからない。

「何故だ？よかっただろう？」

「よかったからこそだよ！」

フェイトがズイツと顔を近づけた。

「さっきの決めゼリフ、もしはやてちゃんの前でしてみなさい、もう二度と近藤さんの元へは帰れないよ」

「はっはっは、そんな馬鹿な。いくらあやつでも拉致監禁など・・・」

アルクは笑って見せたが、なのはとフェイトは真剣そのもの。

無言でアルクを見つめた。

「・・・ほ、本当なのか？」

アルクはゴクリと喉をならした。

そして、なのはとフェイトは無言で頷いた。

「そ、そうか・・・う、うむ、わかった。八神はやての前ではあの決めセリフはしない！約束しよう！」

アルクは顔を青ざめさせて頷き、ガッツポーズをしてみせた。
だが、その拳は震えていた。

第13話 カムブアークー！（前書き）

本当はもつとほのぼの感じにしたかったんです。
もつと可愛らしく書きたかったんです。

でも、ここらが限界です。

何も考えずに読むことをお勧めします。

ちなみに、オリジナルの名前です。

星光の殲滅者・・・ステラ

雷刃の襲撃者・・・エクレール

闇統べる王・・・アルク

第13話 カムブアークー！

前回のあらすじ

マテリアルスリーの前に立ち塞がる強大な敵……その名は『ちびナム』！

「だからちびナムいうにゃー！！」

「……シグナム副隊長……いきなり叫んでどうしましたか？」

近藤が可哀相なモノを見るような目でシグナムを見つめた。

「い、いや、なんかてんのこえがしてな……ていうか、そのかわいそうなものをみるようなめでわたしをみるにゃー！！」

憐憫の眼差しを向ける近藤に、突っ掛かるシグナム。

「シグナムちゃん……とうとうやられたのね……」

そう言いながら離れた場所からハンカチで目を拭うエレノア。

なんだかんだでシグナムは馴染んでいた。

マテリアル達がフォワード達はやてに自分達の名前を披露し終わり、近藤の部屋に帰ってきた。

時間が丁度夕食時だったのでマテリアル達は食堂へ行こうとしたのだが、近藤が待ったをかけた。

「食堂にいったらはやて隊長に出くわす可能性がある」

そう言うと、マテリアル達は悩みだした。

「うーむ、お腹は空いてるしな・・・夕食を抜くわけにはいくまい」

アルクが顎に手を添えて呟く。

「そうですね。ですが、出前を取るのも・・・」

ステラがアルクの言葉に続き案を出す、あまり良い案がつかばない。

「じゃあちびナムだけごはん抜きでいいんじゃない？僕らは関係ないし」

エクレールが頭の後ろで手を組みそんなことを言った。すると、アルクとステラがエクレールをジト目で見た。

「薄情者」

「なんでー！？」

二人の辛辣な言葉に傷つくエクレールだった。
そこでエレノアがハイッと手を挙げた。

「外食すればいいじゃない」

エレノアがそう言うと、マテリアル達はビックリしていた。

「エリリン、何を言っているのだ！？」

「常識を疑いますね」

「酷いなエリリンは！」

マテリアル達はエレノアを批難しだした。
わけがわからないエレノアは戸惑うばかりである。

「ええ！？私そんなにいけないこと言った！？」

エレノアの悲鳴に近い言葉に、マテリアル達は大きく頷いた。

「我等は子供なのだぞ！？」

「子供は午後5時から家の外に出てはいけないのですよ？」

「エリリン知ってて言ったんだろう！酷いやー！！」

マテリアル達の抗議に、エレノアはガクツと肩を落とした。

「……ご主人様……」

エレノアは呆れた表情で近藤を見た。

「……スマン、説明が面倒臭かったから適当に教えた」

近藤は気まずい表情でエレノアに謝った。

エレノアは、ため息をついてマテリアル達に説明した。

「保護者同伴なら夜でも外に出ていいのよ」

「な、なんだってー!？」

マテリアル達は叫び声をあげた。

というわけで近藤達は外食することにした。

「その、すまないな。いろいろきをつかせて……」

シグナムは近藤に謝り落ち込んでいた。

軽く近藤の所に転がり込んだが、迷惑をかけっぱなしな自分が情けなくてズーンと肩を落とした。

「いやあ、マテリアル達も外食を喜んでますし、いいんじゃないですか？あ、おーい、はしゃいで歩道から出るなよー」

近藤がシグナムを慰めつつ、はしゃぐマテリアル達とエレノアに注意をした。

遠くからはーいと声がした。

「こんどう・・・おまえってやつは・・・」

シグナムは感動で涙ぐんだ。

シグナムは気づいていなかった。

今自分が近藤と手を繋ぎ歩いているということ。

自分も、近藤が無自覚に垂れ流しているレアスキル『子供たらし』に侵されつつあるということ。

お手軽にファミリーストランへ入り、食事を探っていると、近藤が思い出したようにある事を言った。

「待てよ？風呂はどうする？」

「ああ、宿舎の女風呂に入ったらはやてちゃんに出くわすかもねー」

エレノアは肉汁滴るステーキをナイフで切りながら言った。

「何悩んでんの？簡単じゃないか」

エクレールはハンバーグに添えられているアスパラをフォークで刺そうと格闘しながら言う。

「エクレール、良い案があるのですか？・・・アルク、きゅうりも食べなさい」

「ぐっ・・・我はこの青臭いのが苦手なのだ・・・で、エクレールよ、その案を言ってみよ」

ステラはナイフとフォークを巧みに扱いハンバーグを口に入れ、横目でアルクがサラダのきゅうりだけを避けているのを指摘した。アルクはきゅうりの匂いが嫌いらしい。

「男風呂に入ればいいじゃん」

エクレールがそう言った途端、シグナムが飲んでいた緑茶を吹き出した。

「わっ！？きつたねえ！」

エクレールの批難など関係なくシグナムは猛抗議する。

「きしゃまー！なにをいうかとおもえば、しょ、しょんなハレンチなことをー！！」

シグナムは顔を真っ赤にしてエクレールに詰め寄った。

「ハレンチって古臭いな・・・ちびナムは幼児なんだから男風呂に入ってもなんら問題はないだろう?」

「そうですね、ちびナムが男性と入るのが嫌なら入浴時間をずらせばいいだけですし」

「ふむ、なんなら我等が見張りなりちびナムと一緒に入るなりするが?」

「くううっ!?おまえたちのそのきづかいがいまはつまめしいっ!!それからちびナムいうにゃー!!」

シグナムは逃げ道を無くした。

そこへ、エレノアがああ、そういえばと何か思い出したように言った。

「確か、この近くに銭湯が出来たはずだよね?」

「・・・ああ、なんか源泉を引っ張ってきてるんだっけ?」

そう言うのと近藤は端末を広げ、検索しだした。

すると、すぐに目当てのものを見つけたらしい。

「ふーん、以前地球へ出張任務に行ったときに入ったスーパー銭湯に似てるな・・・よし、ここに行こう」

「・・・エレノアよ、何故皆の下着を持ってきている？しかも俺のまで・・・」

「にゅふふ、こんなこともあるつかとー！てやつ？」

小さな袋に小分けされているそれぞれの下着を見て「こいつ、確信犯だな・・・」と呆れ顔の近藤に、なぜかやたら偉そうにしているエレノアだった。

「そんなことはどうでも良いではないか！早くスーパーな銭湯に入ろう！」

「そうですね、レッツエンジョイです」

「またなんか古臭い言葉を・・・」

スーパー銭湯に入るということではしゃぐアルクとステラ、そして冷静に突っ込むエクレールだった。

近藤達は入口で入浴料を払い、男と女に別れて入る。

「それじゃあご主人様、また後で」

「うむ、それではな」

エレノアとシグナムは女湯へと向かった。
それを見届けた近藤は、男湯に入ろうとした。

「さて、と」

肩や首を回したり伸びをしたりしていると、後ろから声がした。

「なあ、宿舎のお風呂よりおつきいんだろ？泳げるかな！？」

「泳いじゃダメでしょう。それよりも、ここの湯は温泉らしいので、美肌や疲労回復等に効くそうですよ？」

「ああ、楽しみだなあ！我はあのブクブクと泡の出る風呂に入りたい！」

近藤の後ろには、アヒルの親子のように一列に並んで近藤について歩くマテリアル達がいた。

「・・・君達、こっち男湯、女湯あっち」

近藤が指差して出ていくように促した。
だが、マテリアル達は近藤の指示を拒否した。

「・・・エリリンから聞きましたよ、父上」

ステラがジト目で近藤を見る。

近藤も思わず後ずさる。

「以前エリオやキャロと一緒に風呂に入ったそうではないか？しかも背中を流しっこしたとか・・・むむむ、羨ましい」

アルクが悔しそうに呟く。

「いや、エリオは男だし。それにあの時ののは、キャラが乱入してきて仕方なくだしな・・・」

近藤は弁解するが、マテリアル達は聞く耳持たない。

「パパリン！エリオはよくて、僕達がダメなんて『だんじょさべつ』だよ！」

この場合男女差別に当て嵌まるのだろうか？

「いや、しかしな・・・おまえたちは子供といっても9歳くらいだろ？そんな年齢で男湯に入るのは、いかなもんだろ？」

近藤は必死に説得する。

すると、ステラがうんうん頷いていた。

「成る程、父上は私達の裸体が衆目に曝されることを危惧しているのですね？」

「いや、そうじゃなくて。まあ、それもあるけど、羞恥心の問題でね？」

君達もうレディよ？

男に裸見られて恥ずかしくないの？

近藤はもう必死で倫理というものを説いていたのだが、マテリアル達は変に解釈してしまった。

「なんだ、親父どのは我らの裸を独り占めしたいのか？」

「・・・父上、安心してください。私達の心も、体もすべて父上のものですよ」

「そっだぞー！いつでもどんどこいー！」

「・・・やめてくれるかな？その言い回し。俺捕まっちゃうよ」

ニコニコと笑うマテリアル達とは対照的に、近藤はゲンナリしていた。

すると、エクレールがにこやかに周囲の男共に釘を刺した。

「安心になってパパリン！もし僕らに欲情するような輩がこの場いたら、管理局員のパパリンが逮捕すればいいんだから！」

何人かの客が肩をビクツとさせたのは見なかったことにしよう。

「うおーっ！でっけー！なんじゃこりゃー！？」

「お風呂がいっぱいありますね。・・・ワイン、炭酸、サウナ・・・実に興味深い」

「お、おい！あそこに滝があるぞ！？あっ！？あっちには木で出来

た風呂がある！」

マテリアル達はじめての銭湯にはしゃぎまわっている。
うれしそうにしているマテリアル達を見て、近藤も思わず笑みがこぼれた。

近藤がマテリアル達にバスタオルを体に巻いて入るように言ったので、今の彼女達はバスタオルに体を隠して移動している。
もちろん、湯舟に入ればタオルは外す。

しかし、バスタオルを巻いて行くように言ったとき、周囲から小さく舌打ちが聞こえたのは気のせいだろうか。

だが、マテリアル達が服を脱いでいるときに、

——なんだあのエロい下着は！？——

——あの未成熟の体に似合わぬアダルトな下着・・・アンバランスが萌える！——

——ああ、お持ち帰りしたい——

——いや、下着をクンクン嗅ぎたい！——

などと呟きが聞こえ、本当に逮捕しようか考えた近藤だった。

女湯では、エレノアがシグナムの頭を洗っていた。

「へー、綺麗な髪ね。いつもどんなコンディショナー使ってるの？」

エレノアはシグナムの髪を優しく揉むように洗う。
シグナムも髪を褒められていい気分になっていた。

「ふつうにしゅくしゃそなえつけのものです」

「へー、あれでねー。私なんかほら、毛先こんなの」

エレノアはそう言い自分の髪のをシグナムに見せた。

「あー、いたんですね。そうだ、オイルとかどうですか？」

「オイルかー、そうだなー・・・あ、シグナムちゃん頭流すから、目をぎゅーってしてねー」

「はい。ぎゅー」

シグナムは目に泡やお湯が入らないように手で顔を隠し、さらに目をおもいつきりつむった。

その間、エレノアはシャワーから出るお湯をシグナムの頭にかけてながら、しっかりと髪に行き渡るようにした。

「はい、おわりー。よくできましたねー」

「つぷは！えへへ」

顔に滴る湯を手で払いながら空気を確保しようとする姿はまさしく子供である。

エレノアがシグナムを褒め、シグナムもまた喜ぶ。端から見れば親子にしか見えない光景だ。

「シグナムちゃん、あっちの露天風呂に行こうか」

「はい」

シグナムはエレノアに手を引かれて露天風呂へ向かった。

「はー！ー！ー！極楽極楽」

エレノアは露天風呂に入り、手足をおもいきり伸ばしながら一息ついた。

「ほう、ここはげんせんをひっぱってきているんですね。・・・これは、『いおう』か」

シグナムは湯舟につかり、湯を手ですくいながら分析を始めた。

「硫黄温泉は疲労や湯治にいいからね。あー、日頃の疲れが流れ落ちるようだわー」

「・・・あねうえ、しごとしてないじゃないですか」

シグナムがエレノアをジト目で見遣る。

「働きたくないでござる！」

「いみわかりませんよ」

エレノアのボケにもシグナムは冷静だった。

そんな女湯の隣の男湯では、マテリアル達がじゃんけんを始めていた。

「あいこでしょ！あいこでしょ！」

「くっ、なかなか決まらん・・・このままでは湯冷めしてしまう」

「父上と背中を洗いつこできるのは二人。一人はあぶれる・・・悲しいけど、コレは戦争なのですよ」

ステラが丁寧にじゃんけんをしているいきさつを説明してくれた。その間にも3人の手は目まぐるしいスピードで動いていた。

ステラの言う洗いつことは、横一列に並んで背中を交互に洗い合うというやつだ。

近藤はどうでもよかったが、あまりにもじゃんけんが長く続くため妥協案を提示した。

「あー、俺が一人ひとり洗ってやるから。そのじゃんけんで順番決めな」

そう言っと、じゃんけんはアッサリ決着がついた。

今までのじゃんけんラリーはどれだけ執念を燃やしてしていたのだろうか？

とにかく、アルク、ステラ、エクレールの順番で洗うことになった。

「どうだ？痛くないか？」

近藤はアルクの背中を洗いながら気遣いの言葉をかけた。

エリオのような男の子には多少乱暴なほうがいいだろうが、女の子はそうはいかない。

以前キャロの背中を洗った時も気を遣った。

「うむ！なかなか良いぞ！」

白くきめ細かい肌に傷をつけないように慎重に洗っているお陰か、アルクはご満悦だった。

肌のハリもあり、陶器のような繊細さを思わせる肌である。

「しかし、綺麗な肌だな。将来は美人になるぞ」

近藤はアルクを褒めた。

アルクもまんざらでもないようで、フフンと鼻をならした。

「だが親父どの、将来もなにも、我は八神はやてだぞ？」

ああ、そうか。

ならば将来は安泰だな、と近藤は納得した。

「父上、気持ちいいですか？」

ステラは近藤の背中を一生懸命洗っていた。

「ああ、いい感じだ」

本当はもう少し力が欲しいところだが、女の子には酷な話である。

ステラは近藤の広い背中を本当に一生懸命洗っていた。体を縦横無尽に動かし、額に汗をかくくらいに。

ステラにとっては重労働であるが、その顔は笑顔だった。

「・・・ほふう・・・殿方の背中とは、これほど大きく、逞しく引き寄せられるものですね・・・ああ、この後背筋は今にも鬼の顔が浮かんできそうです・・・」

気のせいだろうか？ステラの声が艶っぽい。

「さて、それではエリリン直伝の必殺技を使うとしましょうか」

ステラがそう言うと、近藤は嫌な予感がした。

「ステラ、体にボディソープつけてタオル代わりにしようとかするなよ」

「・・・チツ」

近藤が事前に注意したらステラが舌打ちした。
どうやら図星だったようだ。

エレノアめ・・・なんてことを子供に教えてるんだ・・・

「パパリン目に染みるー!」

「だから目をギュツとしとけて言っただろう」

近藤はエクレールの髪を洗っていた。

エクレールは髪が長いので一苦労だ。

丹念に揉み、毛先までシャンプーを浸透させる。

「うゝ頭は気持ちいいけど目が痛いゝ」

エクレールは手足をジタバタさせながらも、なんとか我慢していた。

「ほれ、シャワーかけるぞー」

近藤はエクレールの頭にお湯を流し、髪についた泡を丹念に洗い流

した。

「うゝゝつ」

頭を流し終わると、エクレールは犬のように頭を左右に振り水気をとろうとした。

その際、エクレールの長い髪が近藤にバチバチ当たる。水気を含んだ髪が、遠心力を得て近藤を攻撃する。地味に痛い。

とりあえず回りの客にも迷惑になるのでやめさせ、頭にタオルを巻き湯舟に髪が入らないようにしてやる。

「おー！タイガージェットシンみたいだー！」

・・・よくそんな懐かしいプロレスラーを知ってるものだ。

マテリアル達は各々好きな風呂に入り楽しんでいた。

エクレールはサウナで老人となにやら我慢勝負しているし、ステラは檜風呂に入り大画面のテレビにかじりついていた。ちなみに放送していた番組は「選挙放送」である。

アルクは打たせ湯で「修業、修業！」と必死に我慢していた。

「ぷはーっ！このフルーツ牛乳のうまさは異常だな！」

「いえいえ、コーヒー牛乳こそ至高ですよ」

「何を言うか！ここはシンプルに牛乳だろう！」

マテリアル達は風呂からあがってもハイテンションだった。

「こら、静かにしないか。他のお客さんに迷惑だろう」

近藤はマッサージチェアで振動に揺れながらマテリアル達を注意する。

そこへ、エレノアとシグナムが風呂から上がってきて合流した。

「お待たせ」

「なんだ、やはりおところはふるがはやいな」

エレノアとシグナムは風呂上がりでほてっており、髪も濡れていた。エレノアは髪をアップにし、シグナム同様ポニーテールのようにしていた。

そんなエレノアを、マテリアル達はポーツとして見ていた。

「い、色っぱい・・・」

「濡れた髪にあの普段は見せないうなじ・・・最強コンボですね」

「まさにアダルト・・・エリリン、貴女は美しい！」

マテリアル達は絶賛していた。

近藤達は宿舎に戻り、寝ることにした。

「おやすみなさい、パパリン」

「父上、おやすみなさい」

「おやすみー親父どの」

「おやすみ、こんどう」

マテリアル達とシグナムがベッドで横一列になりおやすみの挨拶をした。

シグナムはなじみすぎてもう子供にしか見えない。

「おやすみ」

近藤もソファで眠りに落ちた。

次の日、シグナムは元に戻っていた。

はやてが朝から騒がしく叫んでいたのも理由は大体わかった。

「シグナムー！戻ってきてー！もう子供扱いせえへん！体もまさぐらへん！寝るときに性的ないたずらもせえへんからー！シグナムウウー！カムブアーー！ツクー！」

はやては大泣きしながら宿舎や隊舎を徘徊していた。

「……主はやて……大声でなんという……戻るのやめようかな……」

シグナムは顔を真っ赤にして呟いた。

第14話 人を信じるのにも限度がありますよね（前書き）

さて、今回本編でトッキーさんからいただいたグッズを使い、物語をつくってみました。

さあ、小さい子が好きな人ー！
集まれー！

そして警察に捕まるなよー！！

第14話 人を信じるのにも限度がありますよね

近藤は今日の仕事のノルマを完了した。

そもそも、今日は近藤にとってオフシフトなのだが、そうなるその他の隊長、副隊長に多大な負担をかけることになるということで、いつもの半分、とっても機動六課全体の約半分の書類整理を行う事になったのだ。

それでも近藤にかかれば午前中には仕上がる。

さて、午後からはマテリアル達、アルク、ステラ、エクレール達と映画館へ行くと約束していた。

おそらくヴィヴィオも付いてくるだろう。

さて、外出の準備でもするか。

近藤は自室に向かおうとした。

そして、丁度誰もいない廊下にさし当たったとき、影からエレノアが現れた。

いつものへらへらした顔ではなく、真剣な表情で、何か小瓶のようなものを持っている。

「ご主人様、何も言わずにこの飴を食べてください」

エレノアはおもむろに小瓶から青い飴を取り出し、近藤の前に差し出した。

「・・・えらく青々とした飴だな。そんな毒々しい飴誰が食べるか」

近藤はエレノアの願いをスッパリ却下した。
すると、エレノアは土下座しだした。

「お願いします！一生のお願いです！この飴食べてください！」

額を床にこすりつけるエレノアの気迫に、近藤は後ずさりする。

普段傍若無人のまがまま大王のエレノアが土下座までして懇願する。

怪しい。

怪しさMAXである。

「じゃあ、私も一緒に食べますから！おいしゃーす！」

体育会系の挨拶が飛んできた。

まあ、エレノアも同じく食べると言っし、害はないのだろう。

「・・・わかった」

「！！あいてやーす！！」

近藤の了承を聞いた途端、笑顔で床に額をゴツンとぶつけたエレノアは、近藤に見えないように口を三日月のように歪め悪魔のような表情をした。

「はい、それじゃあ、あーん」

「・・・あー・・・」

エレノアの嘘臭い笑顔を感じつつ、後に引けない近藤は素直に青い飴を口の中にほური込んだ。

近藤は甘いものが苦手な為、飴などを口にするのも数年ぶりである。

口の中でコロコロと転がし、味を確かめる。

(・・・甘いけど、まあ、食べれないほどじゃあないな)

意外と口に合う飴に好感を持った近藤だったが、飴を飲み込んだ次の瞬間、体を煙が覆った。

ポフン！

「わぁ！？な、なんだ！？」

近藤はあわてふためきキョロキョロと辺りを見るが、当然煙で見えない。

「エ、エレノア！？なんだこれは！？」

近藤は焦る。

だが、エレノアから聞こえた声は、近藤の心情とは真逆だった。

「にゅふふ〜！安心して、ご主人様！害はないから！！」

ヘラヘラと笑う声に、近藤はイラツとしたが、次第に煙が無くなり見渡せるようになった。

「~~~~！！あらあら！まあまああ！！」

エレノアが頬に手を当てニヤニヤ笑っている。
気のせいかな、よだれが・・・

「エレノア！！なんなんだ、あの煙は！！」

近藤は怒りながらエレノアに詰め寄ろうとした。
だが、足が何かに引っ掛かりまへのめりにこけてしまった。
間一髪で、床に手について怪我を防いだが、近藤は何か違和感を感じた。

今、何に躓いた？

さっきまで何も無かったはずだ。

近藤は足元を見た。

靴が脱げていた。

そして、ズボンから足が見えなくなっていた。

正確には、ズボンが長く、足がズボンに隠れていた。

近藤は少しでも多くの情報を得ようと手を見た。

制服の袖が長い。

手が小さくなっている。

色が白い。

直ぐさま立ち上がり、体を触り現状を確認する。

細い。

筋肉がない。

服がでかい。

目線が低い。

声がハスキーになっている。

エレノアがニヤニヤしながら見下ろしている。

・・・まさか！？

近藤は急いでガラスに写りこむ自分を確認した。

そこには、小さく、色白で、気の弱そうな、ヒョロッとした

子供の姿の自分がいた。

「はあああああつつ！！」

近藤は意味不明の奇声を発した。

「なんとまあ・・・」

はやては呆れていた。

やっと『子供事件』またの名を『こどものじかん』が鎮静化したと思っていたら、尽力していた当人が子供になってしまっていたのだ。しかも、今までの流れと全く関係ないやり方で。

「飴で子供になるて・・・メ○モか？なあ、○ルモか？」

はやてがジト目で近藤を見た。

ちなみに、子供になった近藤はというと、とりあえず制服はエリオがクリーニングに出していたものを勝手に借りた。

しかし、制服がブカブカだった。

そんな近藤は、エレノアの膝の上でうんざりしていた。

「くそ・・・もう誰も信じない・・・何も口にしない・・・」

「はうゝん、ちっちゃいご主人様はかわいいのゝ、ほーら、よしよしー！」

近藤はエレノアの膝の上で悪態をついていたが、エレノアは周囲にお花畑を展開させトリップしていた。

近藤の顎を撫でる姿は、ムツゴロウさんのようである。

今近藤ははやてとエレノア、リインイエしかない部隊長室にいた。近藤が、とりあえず部隊長のはやてに報告して、対応を促そうとしたのだ。

だからこの状態になったことはこの部屋にいる者以外は知らない。

当然ながら、はやては近藤の変わり果てた姿に驚いた。

だが、それよりも最初誰だかわからなかった。

思わず「誰の子？何処の子？」と聞いてしまった。

その言葉で近藤のガラスハートにビキツとヒビが入った。

はやては近藤の事を今現在の大人の姿でしか知らない。

なのはやヴィータからは昔の近藤は特徴のない、影の薄い男だったと聞かされてはいたが、はつきりいつて眉唾ものだった。

しかし、子供の姿になった近藤を見て納得した。

近藤は美少年ではない。

かといって、ブサイクでもない。

パーツだけを見れば、優しそうな目、鼻筋が通り、口元もいまはへの字になっているが大きくもなく、小さくもない。

色白だし、線が細いし、髪も黒髪でサラサラの長髪である。

右目の眼帯も、サイズが合わなかったのか医療用の少し大きめの四角い眼帯をしている。

つまり、あまり特徴がない。

学校で同じクラスになっても、記憶に残るようなクラスメイトにはならないだろう。

「近藤さん、今の姿は何歳なんや？」

はやては観察するようにエレノアの膝の上に座る近藤を見た。

近藤は手を広げて自分の体を見回した。

「うーん、10歳くらいですかね？」

「え！？10歳！？それで！？ちっさ！！」

はやては驚くが、まあ無理もない話である。
今の近藤の身長は、エリオより小さいのだ。
エリオの制服がブカブカなのだから当然ではあるが、まさかエリオと同じ年でそこまで身長の差があったとは。

「ふむふむ、身長115.7？、体重21kg・・・ですね」

いつの間にかリインEEが近藤の身長を計っていた。

「115？！？21kg！？子供ときの私より小さいやんか！・・・
あっ」

だが、そこまで言うてはやてはしまったと思い小さい声をあげた。
たしか近藤は小さい頃両親に虐待を受けていた。

ドメスティックバイオレンスだけでなく、ネグレクトもだ。
ネグレクト、つまり、子供に食事を与えない虐待である。

そのため、近藤の成長は平均のそれより遅い。

リンディに保護された6歳のときも、知能は3歳児並で体もガリガリだったという。

成長不順による影響なのだろう。

そう考えると、26歳で身長が175？、筋骨隆々のガツシリとした体格に成長した姿は奇跡に近い。

「ほーら、高いたかい！」

そんな暗い雰囲気のはやてを他所に、エレノアは近藤を放り投げて喜んでいた。

リインIIもいつの間にか近藤の頭の上に陣取っていた。

「髪の毛サラサラですう！座り心地最高ですね！」

「・・・死のう。もう死のう」

近藤は目を虚にしながら物騒な事を呟いていた。

「・・・ぶっ」

三者さんよりの態度に、暗い事を考えていた自分がバカらしくなり、クスリと笑うはやてだった。

「ところで、いつになったら元に戻るんや？」

はやては、皆が落ち着いたのを見計らって質問した。

「要はクスリやる？効き目なんか数時間ちゃうの？」

はやての理論に、近藤はパアッと明るい表情をした。

「本来は、ね」

エレノアがいやらしい笑みを浮かべていた。

「私が飴の成分をチョコチョコイといじってね、効き目は『数時間』から『一生』にグレードアップ！」

それを聞いた途端、近藤は絶望の表情をした。

だがはやては冷静だった。

「エレノアさんほどの人やってたら、解毒剤を用意してないはずがない、ちゃいますか？」

はやては鋭い視線でエレノアを睨んだ。

すると、エレノアは目を細めた。

「はやてちゃん・・・アナタ、ご主人様に似て鋭くなったわね。たしかに、解毒剤はあるわ」

そう言い、エレノアは小瓶をポケットから取り出した。小瓶の中には赤い飴玉が入っている。

「この赤い飴玉を食べれば、元に戻るわ」

エレノアがそういうや、近藤は小瓶を奪おうと身をのりだした。だが、リーチの差はいかんともし難く、エレノアは小瓶を近藤の手の届かない位置に持ち上げた。

近藤は立ち上がり必死の形相でピョンピョンジャンプするが、エレノアはニヤニヤしながらそんな近藤を見下ろした。

「くっ、この！」

近藤は必死である。

必死であるが故に、そこには笑いが起こる。

「ぷっ、あ、あのいつもは冷静で、物事を達観しとる近藤さんが・・
・くくく、必死に・・・飴玉を取ろうとしとる・・・くひひひ」

「滑稽ですう・・・ぷひひー！」

はやては笑いを堪えようと口に手をあて我慢するが、リインエエはあからさまに笑い転げている。

「ちくしょー！笑ってないで手伝えよ！！」

近藤は涙目でキレた。

その時、部隊長室の自動ドアが勢いよくバーンと開け放たれた。ドアが壊れそうである。

「おい、八神はやて！おやじどのを知らないか！？知ってるだろう！！」

ドアの前にはアルク、ステラ、エクレールがいた。

先頭にいるアルクはパーカーにミニスカートと、元気良さをアピールする服装だ。

「今日は映画館へ連れていってくれる約束をしているのです」

ステラが白のワンピースにリボンの付いた麦わらタイプのカンカン帽子、肩からピンクのポーチを下げるという『おでかけスタイル』で言う。

「どうせ、毎度の如くおやじどのに仕事押し付けてるんだろ！早く出せ！！」

アルクは腰に手を当てはやてを指差し踏ん反り返る。

「……えらい言われようやなあ……」

自分の子供時代の姿の少女に無茶苦茶言われ、少しへこむはやてだった。

そんななか、七分丈のシャツにベストと短パンという活発そうな服装をしたエクレールは、はやての方を見ず、エレノアとエレノアにピョンピョン飛びついている近藤（小）を見ていた。

じー。

「くっそ、この！」

じー。

「おーほっほー！悔しかったら大きくおなりなさい！」

じーー。

ピコーン！

閃いた！！

「なんだ、今度はパパリンが子供になっちゃったのか？」

時間が止まる。

近藤でさえも、信じられないといった顔をしてエクレールを見た。

「エクレール・・・お前、俺のことわかるのか？」

何故かプルプル震えながら恐る恐るエクレールに近付く近藤。

「ん？何言ってるの？誰がどう見てもパパリンじゃん。けどちっちゃいなー」

エクレールが可愛らしく首を傾げる。

次の瞬間、近藤が壊れた。

突然涙を流し、エクレールに抱き着いたのだ。

「俺はお前が大好きだー！」

今まで、散々顔が怖いだの、子供が泣くから近付くなだの、その顔で人殺せるねだの言われ、あまつさえ子供になったときにはやてに「誰の子？何処の子？」と言われ近藤のガラスハートはヒビだらけだった。

そこへエクレールのあの言葉である。

近藤にとって、今のエクレールは女神に見えていることだろう。

だからこそ、愛情表現として近藤はエクレールに抱き着いた。

だが、近藤のほうがエクレールより体が小さい為、小さい弟がお姉さんに甘えているようにしか見えない。

それでも、エクレールは近藤に大好きだと言われて感激していた。

「僕もパパリン大好きー!!」

エクレールも自分の身長より小さい近藤を抱きしめた。

「エクレールー!!」

「パパリン!!」

子供二人が抱き合い、片方は泣き（近藤）、もう片方は悦に浸りハアハア言っていた（エクレール）。

あまりの衝撃の事実固まっていたアルクとステラだったが、すぐにハツとし、現在のエクレールの羨ましい状況に焦る。

「お、おやじどの!も、勿論わ、我も気づいてたぞ!?だから、我にもハグを!!」

「父上、当然私も気づいていました。さあ、私の胸に飛び込んで来てください」

アルクとステラが両手を広げ、いい笑顔で近藤にアピールする。

だがエクレールは近藤を離さない。

近藤も、二人の声が聞こえていないようで、エクレールから離れない。

アルクとステラの方を見て、見下すような眼差しで、フフンと鼻を鳴らした。

「愛の差だな。この差はでかいぞ?」

「ぐっ!？」

「くう・・・」

エクレールからの痛恨の一撃と、悔しさのあまり、アルクとステラは膝をつく。

そしてエレノアは、エクレールをうらめしそうに見つめ、親指の爪を噛む。

「・・・トンビに油揚げを搔っ攫われた・・・」

「自業自得やろ・・・」

「ですね」

カオスな状況の中、冷静にツツコミを入れるはやてとリインイエだった。

第14話 人を信じるのにも限度がありますよね（後書き）

あとがきはありません。

だって、小説本文があとがきみたいな内容じゃん？

第15話 人は見た目で判断してはいけません（前書き）

ネタは結構あるが、書くとなると手が動かない。

何故かって？

本当に書いたら捕まるから。

それほど卑猥な内容。

だめだ・・・欲求不満か、ストレスか・・・

この・・・夏のバカヤロー！！

第15話 人は見た目で判断してはいけません

前回までのあらすじ

近藤がエレノアの謀略によって子供の姿に。

しかし、大人のと看とは真逆の容姿に誰も子供が近藤だと気づかない。

近藤は泣きそうになった。

そんなとき、エクレールが近藤であることに気づいたのだ！！

近藤は感激のあまりエクレールと抱き合う。

「俺はお前が大好きだー！」

「僕もパパリン大好きー！」

そしてポカーンな外野。

てな感じの前回でした。

エクレールはニコニコ顔で近藤と手を繋ぎ、機動六課の廊下を歩い

ていた。

近藤もわずかに笑っている。

それを羨ましそうに後ろで見ているアルクとステラ。

「くっ・・・何故あやつはおやじどののあの姿を一発で当てたのだ？」

アルクは苦しそうに声を漏らす。

「恐らく、普段から直感で行動しているエクレールだからこそ、というところでしょうか？何か動物的カンのようなものでピンときたのでしょうか」

ステラは顎に手をやり目を細めながらそう分析した。

「ようするに、エクレールはバカということか？」

「まあ、極論では」

二人の負け惜しみである。

現在は近藤とマテリアル三人で行動している。

はやてとリインEEは当然仕事である。

エレノアはエクレールに近藤を盗られ「泥棒猫！」と捨て台詞を吐いてどこかへ消えた。

近藤は後ろで悔しそうな顔をしているアルクとステラを見て苦笑した。

そして、空いている片方の手を二人に差し出した。

「ほら、拗ねてないでこっちにおいで」

その言葉を聞いたアルクとステラはパアツと明るい顔になるが、すぐに険悪な雰囲気になる。

「空いている手はひとつ」

「つまり、手を繋げるのはどちらか一方ということ、ですか」

アルクとステラの視線が交差し、火花が散る。

二人の間の空間が歪んで見える。

そこへ、驚くべき選択をした者がいた。

「二人で手を繋ぎなよ」

なんと、エクレールがアツサリと近藤と手を離す。

アルクとステラは信じられないといった表情をした。

だが、エクレールはニヤリといじわるそうな笑みを二人に向けた。

「僕とパパリンの愛はお前達より深いからな！手を繋ぐくらいどうってことない！」

余裕発言である。

「……くっそう……」

アルクが悔しさを漏らす。

「……エクレールのくせに生意気……」

ステラも呪詛の籠った言葉を呟いた。

だが、結局アルクとステラは近藤と手を繋ぎ機嫌を取り戻した。

「うむ、これは新鮮だな！」

「父上の方が身長が低いところなるのですか……しかし、なんと小さい手……プニプニです」

アルクは満面の笑顔で、ステラはわずかに微笑みながら近藤と繋いだ手を堪能していた。

近藤の姿はマテリアル達より小さい。

だから、手の大きさも必然的に二人より小さくなる。

近藤の肉体年齢が自分達とほぼ同じであると聞いたとき、マテリアル達は驚いていた。

だが、まあ人間だしイロイロあるのだろうと子供らしからぬ思考によって解決された。

「じゃあ映画館へ行くか・・・と、ヴィヴィオを呼ばないと」

近藤はアルクとステラに挟まれ、黒服に連行される宇宙人のような構図で指示する。

「そうだな！じゃあヴィヴィオのところに行こー！」

エクレールがオーと拳を振り上げ先頭に立ち歩く。

「私、もう堪忍袋の緒が切れました！！」

「おおー、似てる似てる！」

「やりますね、エクレール」

「えへへ」

ヴィヴィオの元へ向かっている途中、エクレールがなにやらアニメのキャラの物真似をし、それに拍手するアルクとステラ。

近藤には何の物真似かわからなかったが、突っ込んだらダメなんだと直感的に感じたので口出ししなかった。

「では、次は我だな！うーむ・・・何をしようか・・・よし！」

アルクは目をつむり、手を前で組み祈るような体勢をとる。

そして、ゆっくりと目をあけると、なにやら無駄にキラキラとさせ、わずかに震えた。

「・・・お、横暴ですわ、お姉様の意地悪！」

「おお！すごい！似てるぞ！！」

「ええ、すごく百合百合しい雰囲気が出ています。まさに山百合会」

「・・・」

とにかく、近藤は口を挟まなかった。

「では、次は私です。ふむ・・・あれでいきましようか」

そっいうや、ステラは手を腰に構え、足を肩幅に広げ、右腕を前に突き出した。

正拳突きである。

「ちえりおー！」

普段のステラでは考えられないような可愛らしい声を出す。

「・・・なにやってるのステラ？」

少し呆れた顔のなのはがいつの間にかヴィヴィオを連れていた。

「なつ、高町なのは！？いや、こ、これは・・・！？」

途端、顔を真っ赤にしてアタフタしだすステラ。

相当恥ずかしいようだ。

「すげー、ステラがあんなに慌てるの初めて見たー！」

「うむ、レアだな。お宝だ」

端では顔を真っ赤にしているステラを、ニヤニヤしながら見ているエクレールとアルク。

ステラは二人を睨むが、顔が真っ赤なので全然怖くない。

「オホン！まあ、この話題は終わりにしましょう。それで、高町なのは、私たちに何か用があるのですか？」

ステラは無理矢理話題を変えた。

本当に無理がある。

なのはは苦笑したが、用件を言うことにした。

「今日は近藤さんがオフシフトでしょ？それでヴィヴィオを映画館に連れていってくれるって聞いたから、ヴィヴィオを近藤さんの所へ連れていこうとしてたの」

「なんだ、丁度我等もおやじのと一緒にヴィヴィオを迎えに行こうとしていたのだ」

「すれ違いにならなくてよかったな」

「・・・ん？」

二人のこの言葉になのはは違和感を覚えた。

おやじのと一緒に・・・

つまり、マテリアル達は近藤と共に行動していることになる。

しかし此処に近藤はいない。

いるのはマテリアル三人と知らない子供一人。

ん？

そもそもあの子供は何処の子だ？

なのはは考えていると、隣でヴィヴィオがその子供、近藤をガン見していた。

じー。

じー。

じーー。

ピコーン！

ととのいましたー！！

「おおさまちっちゃんくなったんだー！かわいいねー！！」

ヴィヴィオは近藤の頭を撫でだした。
ナデナデ

瞬間、近藤は涙を滝のように流した。

「うう・・・俺をわかってくれる人がまたひとり・・・こんなにうれしいことはない・・・！」

おろろんと号泣する近藤を見て、己のふがいなさを痛感するアルクとステラ、そしてライバル出現に危機感を募らせるエクレール。

「くっ・・・何故我はあの時おやじどのがわからなかったんだ・・・！？」

「今ほど自分の無能さを恨んだことはありません・・・」

「ヴィヴィオめ・・・やるな・・・」

だが、慌てる人が若干一名。

なのはである。

「ちよっ、ちよっと待って！？ヴィヴィオ、この男の子のこと・・・なんて言った？」

なのはは恐る恐る聞く。

だが、ヴィヴィオはなのはが何故そんなにおっかなびっくりなのか
がわからないため、首を傾げた。

「なのはママわかんないの？ちっちゃくなっただけど、おおさまだよ
？」

「・・・えええええつつ！？」

なのはの絶叫が廊下に響き渡った。

「・・・なるほど、エレノアさんが・・・」

なのはは指を顎にあて、事の経緯を聞きふむふむと頷く。

「メ。モちゃんみたいな話ですね」

なのはは苦笑しつつ呟いた。

まったく、あの人は余計な事しかないな・・・と小声で呟く。

しかし、となのはは近藤を眺める。

身長はヴィヴィオより少し大きいくらいだが、これでも10歳当時の
姿らしい。

小さすぎないか？と考えたが、近藤の幼少期の体験を思い出しすぐ
に考えを改めた。

それにしても、現在の大人の姿とは真逆な姿である。

近藤には悪いが、はつきりいって面影のカケラもない。

美少年というわけではないが、優しそうな目元に、整った顔立ちではある。

色白で、サラサラの黒髪、華奢な体格、恐らく近藤がこの姿でなのは達と同じクラスになっても目立つことなく、すぐに忘れ去られる存在だろう。

ああ、そういえば初めて任務で一緒になったときの印象って、そんな感じだったなあ、としみじみ思うのはだった。

「でもヴィヴィオよくわかったね。近藤さんには悪いけど、今の子供の姿って大人の時とは真逆じゃない？はつきり言って、かわいいし」

なのはは未だに近藤の頭を撫で続けるヴィヴィオに質問した。

「か、かわいい、とか、言わないで、ください！」

近藤は若干顔を赤くした。

言われ慣れていない言葉に戸惑ったのだ。

口調もしどろもどろである。

なのはは、そういうところがかわいいんだけどなあ、と心の中で思った。

「なのはママ、人を見分けるのは見た目で判断するんじゃないよ？たましいでかんじるの！」

「おお、ヴィヴィオいいこと言った！そうだ！僕は魂レベルでパリンを感じてるんだ！言うなれば、愛！ラブ！！アイラビユーパ

パリーン！！」

ヴィヴィオとエクレールがはしゃぎだした。
それをまた悔しそうに見るアルクとステラ。

「くっ……ヴィヴィオにまで遅れをとるとは……これはかなり
キツイ……」

「私たちの父上への愛は本物なのに……悔しいです」

「まあ、エクレールは純真無垢って感じだしね。ヴィヴィオも素直
な子だし」

なのはが思った事を口にする、アルクとステラは即座に反応した。

「高町なのは……それは我等が薄汚れていると言いたいのか？」

「いくら私のオリジナルとて、聞き捨てなりませんね。私たちはと
ても『よいこ』なんですよ」

なのはの素直な感想がお気に召さないアルクとステラは、ジト目で
なのはを見、非難の声をあげた。

闇のかけらがよいこもくそもないと思うが。

「あのな、なのは隊長は、お前達二人が大人びているといっている
んだ。変な勘繰りするな」

アルクとステラの対応に困っているなのはに、近藤は助け舟をだし
た。

ただし、未だにヴィヴィオに頭を撫でられているが。

「いいこ、いいこ」

ヴィヴィオが壊れた。

近藤は撫でられる摩擦を感じながらも、ヴィヴィオを無視してアルクとステラを見る。

「二人が『よいこ』なのは俺が一番知ってるから、な？」

近藤は二人の頭を撫でる。

近藤の方が身長が低いため、少し構図がおかしいが、それでも二人には効果抜群だったようだ。

「おお・・・これはこれで・・・」

「・・・父上、私の胸がきゅんきゅんです」

アルクとステラがハアハア言い出した。

なんかもう收拾つかないそうなので、近藤が適当に切り上げ、これ以上時間を無駄にしたら映画が見れなくなると言った。

するとマテリアル達とヴィヴィオはおおいに焦り、すぐに出発することになり、近藤はマテリアル達とヴィヴィオと共に映画館へ向かうことにした。

「子供だけで大丈夫かな？」

なのは心配するが、近藤を子供として数えている時点でもう毒されている。

「だいじょーぶだぞー！はじめてのおつかいみたいなもんだなー！」

エクレールが呑気にそう言う。

アルクやステラは突っ込みたい衝動に駆られたが、これ以上ここで長居していたら映画が見れなくなるのでグッと我慢した。

「それじゃあ、行ってきます」

近藤はなのはに礼をし、マテリア達とヴィヴィオを連れて映画館へ行くとした。

そこへ、またタイミング悪くややこしい人間が現れた。

「ねえなのは、大輔さん知らないかな？ちょっと報告書のこと聞きたいことがあるんだ」

フェイトである。

フェイトの登場に、マテリア達とヴィヴィオの顔を見合わせ、小さく頷いた。

ちびっこ四人の意見は一致していた。

無視である。

これ以上時間をロスするわけにはいかない。

ちびっこ四人は何も言わず、近藤の手を引き出て行こうとした。

だがフェイトも執務官、近藤の姿を目ざとく見つける。

「・・・？その男の子、誰かな？」

フェイトの発言に、マテリア達とヴィヴィオは目を見開いた。
なのはも隣で苦笑している。

そして、近藤はというと・・・

「・・・うん、そんなもんだよ。普通そんなもんだよ・・・」

ズーンと肩を落とし、落ち込んでいた。

そして、ちびっこ四人は近藤を慰めつつ、フェイトの前を通り過ぎるときに一言ずつ言った。

「フェイトママ、愛が足りないよ・・・」

「ふがいない・・・僕は恥ずかしいぞ」

「気にするな、貴様は薄汚れた大人なのだ。誰も責めはせんよ」

「言っておきますが、愛の力ならば、私の方が上ですから」

言いたい事を言っ、ちびっこ四人と近藤は機動六課を後にした。

「・・・？な、なんなの・・・？」

フェイトの呟きにも、なのはは苦笑するしかなかった。

第15話 人は見た目で判断してはいけません（後書き）

ヴィヴィオが壊れた・・・

何故だろうか、活躍させようとすると、例外なくキャラが変態になる・・・

ヴィヴィオ・・・ごめんよ。

第16話 人は追い込まれるとどんな行動をとるかわからない（前書き）

前回、マテリアルたちがものまね（？）をしていましたが、意外とキャラがわからなかった方がいたようなので、発表します。

エクレール・・・ハートキャッチプリキュア

アルク・・・マリア様が見てる

ステラ・・・刀語

です。

どれもおもしろいですよ。

第16話 人は追い込まれるとどんな行動をとるかわからない

「あの子供が大輔さん？」

フェイトはなのはから事情を聞き、目を剥いた。
しかし、すぐに笑い出した。

「まさかー！だって真逆じゃない」

そう、近藤の幼少期の姿は、今の成人の姿とはことごとくが逆なのだ。

肌の色、肉付き。

これだけですでに別人である。

また、幼少期から18歳までの近藤は髪を適度に伸ばしており、サラサラの髪で大人しそうな雰囲気があるが、26歳での髪型は短く切り、ツンツンに逆立てている。

髪型ひとつで人の雰囲気はガラリと変わる。

近藤の場合、それ以前の問題だが。

そもそも子供の頃から筋肉ムキムキなこと事態がありえないのだが、何故か近藤の大人の姿を見ていると子供の頃もこうなんだろうなあと思えてくる不思議。

フェイトは信じられず笑うが、なのはは真剣である。

「ヴィヴィオはあの姿の近藤さんを一発で当てたんだよ。それにエ

クレールも」

フェイトは笑いを止める。

ツーンと汗が頬を伝う。

「・・・本当なの？」

フェイトの問いになのははコクリとひとつ頷いた。

そして、マテリアル達とヴィヴィオに言われた事を反芻する。

『フェイトママ、愛が足りないよ・・・』

『ふがない・・・僕は恥ずかしいぞ』

『気にするな、貴様は薄汚れた大人なのだ。誰も責めはせんよ』

『言っておきますが、愛の力ならば、私の方が上ですから』

そして、子供の姿の近藤の、落胆した姿を思い出す。

フェイトは顔を真っ青にし、立ち尽くした。

ところ変わって近藤とちびっこ四人は、クラナガンの映画館に無事到着した。

「さて、なんの映画を見るんだったつけ？」

「『まじかる天使チェリー・ブロッサム THE MOVIE』！」

ヴィヴィオが両手を振り上げ言う。

「・・・ああ、管理局が撮影協力したっていう・・・」

いまや管理局を代表するまで成長した、なのはとフェイトを元に制作したことで有名になった特撮番組、その劇場版である。

魔法とは無縁の世界で生活していたチェリー・ブロッサムは、ある日傷ついたイタチを拾う。

そのイタチはチェリー・ブロッサムに、世界中に散らばったアレグリアシードを探す事を手伝って欲しいとお願いし、チェリー・ブロッサムはイタチから魔法の力を授かる。

途中、謎の少女スノウ・ドロップが現れチェリー・ブロッサムと衝突する。

スノウ・ドロップも己の願いのためにアレグリアシードを集めていたのだ。

何度となく衝突するチェリー・ブロッサムとスノウ・ドロップ。

次第に二人は敵同士であるのに、ある感情が芽生える。

はたして、スノウ・ドロップがアレグリアシードを集める目的とは？

チェリー・ブロッサムとスノウ・ドロップはどうなる？

というのがあらずじである。

魔法の戦闘などの技術協力に管理局が携わり、またなのはとフェイトも映画の制作に協力したので、かなりリアルな魔法の戦闘が繰り広げられ、娯楽作品として完成度が高いらしい。

それに、チェリーブロッサムとスノウ・ドロップ役の子がなのはとフェイトにそっくりなうえ、演技も素晴らしいとして映画評論家も太鼓判を推す映画に仕上がっている。

近藤はチケットを買いに窓口へと向かい、ちびっこ四人は映画館のロビーでパンフレットやら、グッズやらを眺めていた。

「管理局って手広くやってんなー」

エクレールは少し呆れていた。

それに対し、ステラはエクレールに同意するように、管理局に対して鼻で笑った。

「・・・我は納得いかん！」

アルクは突然怒りだした。

それを見たステラとエクレールは、またかといった顔をした。

「何故高町なのはとフェイト・テストロッサの二人を元にしたキャラがいるのに我のオリジナルである八神はやてを元にしたキャラが出ないのだ！！」

アルクはダンダンとおもいつきり地面を踏みつける。

「しかもテレビシリーズも、もうすぐ終わるではないかー!!」

ウガーッと吠えるアルク。

普段聞き分けのいい子なのに、たまに癇癪を起こすのがアルクの弱点である。

こうなるとアルクは手がつけられない。

近藤がいればすぐに鎮静化するが、その近藤はまだ窓口でチケット購入をしていた。

ステラとエクレールもどうしたものかと悩んでいると、ヴィヴィオがはい、と手を挙げた。

「だいじょうぶだよ! 『まじかる天使チェリーブロッサム』は第二期が決定してるから!」

ヴィヴィオがそう言うと、アルクはピタッと動きを止めた。

「しかも、新キャラでチェリーブロッサムのお友達としてはやてお姉さんそっくりな人が出てくるから!」

アルクはギギギと錆び付いたブリキの人形のようにゆっくり首をヴィヴィオの方へ向けた。

「・・・本当か?」

アルクの目はウルんでいた。

「本当だよ！しかも、そのお友達にはちゃんと騎士が四人ついてるって書いてた！！」

現実をなぞらえるなら、騎士四人とはヴォルケンリッターにあたる人だろう。

だとすれば・・・

「そ、そうか！そうだな！我が出ないはずが無いものな！は、はは、はははははっ！！」

アルクは目尻に涙を溜めながら笑った。

それは安心か、喜びかはわからない。

ステラとエクレールは、ヴィヴィオの見事なアシストにホッと胸を撫で下ろした。

近藤とちびっこ達は無事映画を見終え、帰路にたっていた。各々が映画の話題で盛り上がり、賑やかな帰路となった。

「ちっちゃいなのはママとフェイトママかつこよかった〜！」

ヴィヴィオは映画に大満足のご様子で、ホクホク顔である。

「いやいや、アレはチェリー・ブロッサムとスノウ・ドロップだから。でもまあ、魔法戦闘は確かにリアルで迫力あったなー！」

エクレールも満足いく内容だったようだ。

「私としては、露出過多が目立ったように思えます。何故あんなにお風呂のシーンやローアングルのカットが多いのか・・・理解に苦しみます」

ステラは映画に不満があるようだった。

内容は良しとしても、何故かサービスカットが多かった。

これは子供向けの映画のはずである。

無用なサービスは子供の情操教育の弊害となるのではないか？

そういえば、映画を見に来ていた観客は、比率的に大人の男性が多かったような気がする。

お風呂のシーンなどでは、近くにいた男の興奮したような息遣いが聞こえ、気持ち悪かった。

それに、家族連れもいたが、父親の方が熱心に映画を見ていた印象もある。

「我は大満足だ！最後のいいとこどりで『ハルト・リーゲル』が登場したところなどは、おもわずスタンディングオベーションしてしまった！！」

アルクが興奮しながら言っている『ハルト・リーゲル』とは、第二期からの新キャラのことである。

つまり、はやてをモデルにした子供だ。

映画では二期の宣伝を兼ねて特別出演していたのだ。

しかも、チェリーブロッサムとスノウ・ドロップがピンチのときに颯爽と助けにきて、三人力を合わせて敵を倒しという、まさにいいとこどりの役である。

四人とも、笑顔ではしゃぐ姿を見た近藤は、連れて来てよかったと

思った。

本当は映画を見た後、レストランへ赴く予定だったが、近藤が子供の姿になってしまったため自嘲した。

子供だけ、しかも低年齢層だけでは店員にいろいろ言われそうだからである。

近藤はなのはにそう連絡すると、なら一緒に食事を探ろうということになった。

宿舎に帰り、食堂で夕食を探ろうと皆連れ立って歩いていると、なのはと合流する。

「なのはママ」

ヴィヴィオがトテトテと走りなのはに抱き着く。

なのはは、笑顔でお帰りなさいと言い、ヴィヴィオの頭を撫でる。そしてヴィヴィオは今日見た映画の事をなのはに熱弁する。

その光景事態はほほえましいものだ。

だが、なのはから少し離れた柱から、チラチラと見え隠れしているのが視界に映る。

それはフェイトだった。

金色の長い髪がチラチラ映り、ヒョコツと顔を出したかと思うと、怯えたような顔をしてすぐ柱に引っ込める。

「・・・うつとーしいなー」

エクレールはイライラしだす。

「言いたい事があるならば堂々とせんか！馬鹿者が」

アルクもフェイトの行動に不快感をあらわにする。

「ふん、己の犯した罪がわかったようですね」

ステラは口角を吊り上げニヤリと笑う。

どうみても9歳がする笑い方じゃない。

「罪？フェイト隊長は何かしたのか？」

近藤が首を傾げると、なのはが苦笑混じりにフェイトがああなった経緯を説明した。

まあ一言でいうと、子供の姿の近藤を見て誰かわからなかった、ということだ。

「あれだけ嫉妬深く、いつもベタベタと父上に張り付いているのに、いざ父上に緊急事態が起こっても認識できない。ふう、なんと独りよがりの愛情でしょうか」

ステラが肩を竦め、ヤレヤレと首を振る。

グサツ！

「うつ！」

フェイトは胸を押さえる。

「ふん、仕方なからう。アヤツは心が薄汚れた大人なのだ。しかし、いつまでもああやっていじけて、根暗で、始末に終えんな」

アルクはフンと鼻を鳴らし、近藤と手を繋ぎギュツと力をこめる。

グサグサツ！

「うつうつ！？」

フェイトは胸を押さえ、苦しそうに前屈みになる。

「まあ、パパリンへの愛情度が低い証拠だな！パパリン傷ついもんな！。もう弁明の余地ないな！！」

エクレールは新しいおもちゃを見つけたように、楽しそうに言う。

グサグサグサツ！

「ぐはっ！！」

フェイトはショックのあまり膝をつく。

・・・吐血は・・・してないな。

近藤は柱の影で膝をついているフェイトを見てため息をついた。そして、近藤はフェイトの所へ歩み寄る。

「その程度のことではいちいち傷つかないでください」

なんという光景だろうか。

大人の姿でひざまづくフェイトが、子供の姿で腰に手をやりやレやレと困った顔をしている近藤に怒られている。

安西先生・・・バスケやりたいです・・・！

「だ、大輔さん・・・」

フェイトは目を潤ませて近藤を見る。
上目遣いで。

近藤も顔には出さなかったものの、おもわずかわいいと言いつつに
なった。

「もう気にしてませんから」

近藤はニコリと笑う。

子供特有の邪気の無い、無垢な笑顔とは違い、どこか大人っぽく、
優しいが、子供に似つかわしくない笑顔。

いわゆるギャップである。

近藤は自覚のない、悪魔の技を発動した。

すると、フェイトはだばーっとよだれを垂らし、近藤に襲い掛かり

抱きついた。

「反則！反則だよー！！」

ぎゅうつつとおもいつきり近藤を抱きしめるフェイトは目が逝っていた。

「ぐはっ、く、くるし・・・はな・・・」

近藤はフェイトのハグに苦しみだす。

筋肉の壁に覆われている大人の姿ならば耐えられるだろうが、今の貧弱な体ではリミッターを振り切ったフェイトの腕力に耐えられない。

フェイトがあまりにもきつく抱きしめるものだから、近藤の肋骨と背骨がミシミシ悲鳴をあげる。

「わー！？ブレイク！ブレイク！！」

「おやじどのの口から内臓が飛び出るだろうが！！はやく離さんか！！」

「いえ、もしかしたら体が切断するかも・・・いや、そんなことより一刻も早くこのバカデカラ女を引っぺがしましょうー！」

「フェイトママー！おおさまの口から白い魂みたいの出てるからー！！？」

「きゃー！？フェイトちゃん！？近藤さん死んじゃうよー！！」

なんとか皆でフェイトを近藤から引きはがしたが、近藤はグツタリ

としており、泡をふいていた。

こうなったらもう夕食どころではなかった。

フェイトは食堂で床に正座させられ、更にはバインドで拘束され、マテリアル達となのはから説教をくらっていた。

「自分とパパリンの力の差を考えろよ！このバカ！！」

「碌なことせんな、この塵芥！！」

「いつそそのバカチカラを炭鉱などで役立たせれば？」

「・・・言いすぎだよ、あなた達・・・でも、まあ・・・冷静になる必要があるよね」

まさに言葉攻めである。

フェイトは俯き、ダバダバ涙を流し、反省していた。

そしてヴィヴィオはというと・・・

「おおさまー！いたいのいたいのとんでけー！」

必死に近藤の痛みを和らげようと近藤の腰を撫でていた。

第16話 人は追い込まれるとどんな行動をとるかわからない（後書き）

さて、今回オリジナルの「まじかる天使チェリーブロッサム」というのを出しました。

当初、劇場版のNANOHAを出そうとしたんですが、フェイトのプライベートはあまり公に出せるものではないなと思い、オリジナル設定にしました。

もしかしたら、まじかる天使に関わる話を書くかもしれません。

第17話 人は時に鬼にならなければならない(前書き)

さて、本編ほつたらかして投稿します。

基本こちらはバカな話ばかりです。
魔法関係ないです。

これは本当にリリカルなのはなのだろうか？

でも気にしない！！

だって書いていておもしろいから！！

第17話 人は時に鬼になればならない

フエイトによる近藤殺人未遂の説教が終わると、とりあえず食事を採り、近藤とマテリアル達は自室へ帰った。

「さて、じゃあ風呂に入って寝るか」

近藤がそう言うと、マテリアル達の目が光った。
キランではなく、ギンツ！といった感じで。

「そうか、風呂か。ではおやじどの、我と一緒に入ろう」

アルクは近藤の手を引っ張り部屋を出て行こうとした。
だが、出口を素早くエクレールとステラが塞いだ。

「抜け駆けは感心しないな」

「父上の小さな体を隅々まで見るというミッションは譲れませんね」
ガルルルと犬のように威嚇するエクレールとステラを見たアルクは、
小さく舌打ちをし、ため息をついた。

「わかったわかった。ならば全員で仲良く入ればよいのだろうか？」

アルクの言葉に、コクリと頷くエクレールとステラ。
しかし、三人のお風呂計画は脆くも崩れる。

「いや、俺一人で入れるし」

近藤のこの言葉に、マテリアル達は絶望の表情をする。

「そ、そんな！父上の小さなぷにぷにな体を堪能できないのですか！？」

「パパリンにシャンプーハットつけてサラサラの髪を洗えない！？」

「おやじどのの紅葉のような小さな手で背中を洗ってもらえないのか！？」

三人は目に涙を浮かべて批難する。

正しい事を言っているのは近藤なのに、あんな悔しそうな顔を見ているとこつちが悪いような気がする。

だが、聞き捨てならないのはステラの言葉である。

プニプニ？

俺太ってるか？

近藤は腹の肉をつまみながら悩んだ。

それはともかく、近藤は鬼にならなければならない。

マテリアル達に羞恥心を植え付けなければ、将来痴女になりかねない。

「ち、父上、その小さくプニプニな体で隅々まで洗えるんですか？」

「洗えるよ。あとプニプニってなんだ？」

ステラは泣きそうな顔でなんとか一緒に風呂に入る理由を探そうとしていたが、近藤がいとも簡単に答えるのでガツクリとその場で崩れ落ち、「プニプニが・・・プニプニが・・・」と呟いていた。だから、プニプニってなんだ？

「シャ、シャンプー目に入ったら痛いんだよ！？一人じゃ大変だよ！？」

「入らないよ」

エクレールがあわあわと手を動かしながら近藤を説得するが、近藤はぴしゃりと言う。即答されてしまい、エクレールはガーンと自分で口にして固まる。

「せ、背中の中の流しっこは・・・ダメなのか？」

アルクは胸の前で人差し指をつつき合わせながら、上目遣いで近藤を見遣る。

「・・・それは三人でしなさい」

近藤は少し悩み、アルクにNOと言った。すると、アルクは目に大粒の涙を溜め・・・

「いやだー！我は小さいおやじどのと風呂に入るんだー！！」

駄々をこねだした。

床に寝転び、手足をバタバタさせる姿はまさに癩癩を起こした子供である。

「小さいおやじどの背中洗って我也洗ってもらうんだー!!」

アルクは喚き散らす。

さすがに、これには近藤が困る。

しかし、何故マテリアル達はここまでして近藤と風呂に入りたがるのだろうか。

「あー、いーけないんだー、パパリンてばアルク泣かしたー」

「ああ、かわいそうなアルク。これも全て父上のせいですね。プニプニのせいですね」

ここぞとばかりに近藤を責め立てるエクレールとステラ。

俺は悪くないのに・・・

近藤は頭を抱えた。

「そんなお困りの時は私にお任せー!!」

そんな声と共に部屋のドアが勢いよくバーンと開け放たれた。

そこには、エレノアが立っていた。

しかも、なにやらニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて。

「ご主人様、取引をしましょう」

「取引、だと？」

近藤の頭に警笛が鳴る。

エレノアの言う取引がろくなものではないと。

絶対不利なことだと。

「・・・言ってみろ」

近藤が訝しみながらエレノアの条件提示を求めた。

「マテリアル達と私、四人と一緒に風呂に入ったら、この大人になる赤い飴玉を差し上げます」

「なあっ!？」

驚愕の表情をする近藤に対し、歓喜の表情をするマテリアル達。
今のマテリアル達にとって、エレノアは救世主だろう。
だが、近藤にとっては悪魔でしかない。

赤い飴玉という最大の弱みを出したエレノア。

たしかに、近藤は元の姿に戻りたい。

そして、戻るためには赤い飴玉が必要だ。

しかし、しかしだ。

赤い飴玉の譲渡の条件がよろしくない。

マテリアル達はこの際仕方がない。
まだ子供であるし、今回だけ大目に見よう。
だがエレノアはダメだ。

近藤は悩む。

「何悩んでるの？昔はよく一緒にお風呂入ってたじゃない」

「なにー！？」

エレノアの爆弾投下に敏感に反応するマテリアル達。
アルクもいつの間にか泣き止んでいた。

「エリリンって生まれたときから今の姿だろ！？」

「それなのに、父上とエリリンは頻繁に一緒にお風呂に入っていた
のですか！？」

「おやじどの！エリリンとそんなことしておきながら、我らを拒む
とは、あんまりではないか！？」

批難轟々である。

「まてまて！昔エレノアと風呂に入ってたっていうのは、あくまで
仕方なくなんだよ！」

ゾクッ！

そう言ったとき、近藤の背後から凍えるような気配を感じた。
冷や汗がドバッと吹き出る。

部屋の空気が重く感じ、息苦しい。

前を見ると、顔を青ざめさせているマテリアル達とエレノアが、近藤の背後にいる人物を見てカタカタ震えていた。

近藤はゆっくりと振り向いた。

「ふーん・・・一緒にお風呂に・・・どういう理由があるのか・・・聞きたいなあ・・・」

そこには、笑顔で、煌めく金髪を逆立て、どす黒いオーラを撒き散らしているフェイトがいた。

とりあえず、近藤は事情説明をした。

正座で。

簡単に言っと、発現したばかりのエレノアは体は大人でも、中身が赤ん坊以下だった。

つまり、何もしないし、できない。

赤ん坊ならば、泣いたりして意思表示するが、エレノアは全く動かない。

まるで人形のように。
魔法に関することはなんでも知っていたが、一般常識は皆無だったのだ。

風呂の入り方すら知らなかったし、風呂というものの自体知らなかったのだ。

仕方なく近藤はエレノアと共に風呂に入り、洗い方から、風呂のマナー等を教えた。

「そんなもの、一回でわかるんじゃないですか？何で『頻繁』に一緒に入ってたんですか？」

フェイトの金髪は逆立ったまま近藤の前で仁王立ちしている。
まるでスーパーサイヤ人である。

いわばスーパーフェイトか。

「そ、その・・・エレノアはなぜか一般常識の物覚えが悪くて・・・それで、何回か・・・」

近藤は汗をダラダラと流し、ビクビク震えながら事実を答えた。

「はい！覚える気ありませんでしたから！！」

エレノアが近藤の隣で元気よく拳手する。

正座で。

「なんで・・・覚える気がなかったのかなあ・・・？」

フェイトがユラリと首をエレノアに向ける。
今のフェイトはもう怨念の塊の悪霊のようである。

マテリアル達はベッドの上で固まって震えていたが、フェイトの発するオーラにヒイツと悲鳴をあげる。

「だって・・・ご主人様がかいがいしく私にいろいろしてくれるのが嬉しかったんだもん・・・すぐに覚えたら、もうしてくれなくなつて淋しいじゃない・・・」

エレノアは口を3のように尖らせばつぶつぶ呟く。

「お前、あんだだけ無表情だったのに、そんなこと考えてたのか？」

近藤は驚く。

当然だろう、発現したばかりのエレノアには感情などというものはなく、ただ無表情で近藤の指示を待つロボットのようだったのだから。

だが感情が無いながらも、そんな自分に対し、かいがいしく世話を焼く主に、少なからず興味が沸いたのだろう。

もしかしたら、そんな地道な努力と誠実な行動が、エレノアに感情を芽生えさせたのかもしれない。

そして近藤のたゆまぬ努力のかいあって、現在のような天真爛漫な性格になった。

少し教育方針間違えたかな？と思っているのは内緒だ！

エレノアの気持ちかわかるフェイトは、どす黒いオーラを引っ込め、

髪も元に戻り、ため息をついた。

結局、エレノアも子供なのだ。

ただ近藤に甘えたいだけなのだろう。

その行動が行き過ぎているのが悩みものだが。

「何故こうなる・・・」

近藤は現状の異常さに頭を抱える。

「ほらほらー、パパリン早く泳ごうよ！」

「エクレール、何度も言いますがお風呂で泳いではいけません」

「むふふ！おやじどのの為に新品のタオル貰ってきたぞ！」

何故だろう、近藤は流されるままマテリアル達と風呂に入っていた。

しかも女湯。

近藤は洗い場で椅子に座り、頭を抱えていた。

たしかに、マテリアル達と風呂に入ることとは了承した。

エレノアとは、今度海に行くということを手打ちにした。

フェイトもそこらが落としたところだろうと了承した。

だが、そこからの記憶がない。

いつの間にか裸で風呂に入っていた。

しかし、何故女湯なんだ？

こんなところ他の女性局員に見られたら何を言われるかわかったものではない。

いや、最悪変質者として逮捕されるかもしれない。

一人ウンウン唸っていたが、エクレールに強引に引っ張られマテリア達と仲良く湯舟に浸かる近藤。

本当にこの男は押しに弱い。

近藤は脳をフル回転させ、現状打破を考えていた。

だが、湯舟につかっているせいか、頭がボーッとして考えがまとまらない。

そこへ、浴場の入口ドアが勢いよく開け放たれる。

近藤はビクッと体を強張らせた。

「ビクビクする父上・・・はふう・・・ゾクゾクします・・・」

ステラが横で物騒な事を呟くが、そんなこと気にしてられない。

とりあえず近藤は死角になるようにマテリアル達の影に隠れる。

「ご主人様ー！背中流してあげるー！！」

入口に立っていたのはエレノアだった。

ただし、素っ裸で。

体をタオル等で隠そうともしない堂々とした姿は、男らしい。

それを見た近藤はますます焦る。

話が違う!!

やばい!

男としての機能が働く!!

近藤はマテリアル達やエレノアに背を向け、必死に気を落ち着かせていた。

ひっひっふー

ひっひっふー

しずまれー

しずまれー

だが、近藤はいきなり強い力によって抱き抱えられ、湯舟から引き上げられた。

「ご主人様ー、お背中流しまーす!」

エレノアの怪力によって近藤は呆気なく洗い場に連行されるのだ
た。

第18話 人は甘えるにも勇気がいるときがあったり（前書き）

本日はオタクの祭典「コミックマーケット」開催日初日ですね。

恥ずかしながら私サークル参加します。

初めてですよ、コミケ！

しかし問題が。

私と同じサークルの友人が、東京に向かっている途中でサークルチケットを家に忘れたと連絡が！

それが0時過ぎ・・・

私も友人も地方の人間なので、大丈夫か？と心配しつつ、私は国際展示場駅で車で来る友人を待つのです。

え、私はどうやって来たかって？

前日一人で新幹線乗って、一人でスパラクーアでくつろいでましたが、何か？

第18話 人は甘えるにも勇気がいるときがあったり

近藤の風呂はそれはもう壮絶なものだった。

エレノアに裸で抱き着かれ、反則のような双丘を押し付けられ自我を失いかけるわ、エクレールがシャンプーハットを近藤に付けてニコニコしながら後ろからではなく正面から頭を洗いだし、その際にエクレールが体に巻いていたバスタオルが取れて「やん、パパリンのえっち！」とか言うわ、アルクが近藤の背中だけでなく体中洗いだして「おおー・・・白い・・・イロイロ小さい・・・」とか言うて近藤の心を傷つけるわ、ステラが近藤の体をベタベタ触りまくって「ウフフ・・・プニプニ・・・プニプニ・・・」と言いながら悦に浸るわ。

終いには運悪くなのはとヴィヴィオが浴場に入ってきたことだ。

近藤は洗い場でエレノアとマテリアル達にもみくちゃにされているというカオスっぷりで、近藤は泣きながらなのはに助けを求めた。

「なのは隊長助けてください！後でいくらでも謝罪します！！だから、とりあえず現状をなんとかしてください！！」

普通助けを求める場面ではない。

ここは、なのはが近藤を怒る場面である。

男の人がなんで女湯にいるんですか近藤さんのえっちー！

といった具合に。

スターライトブレイカーをぶっ放されても文句はいえないだろう。しかし、何故かなのは近藤を助けようとせず、だが近藤を追い出そうともせず、ニコリと笑いこいた。

「皆仲いいね。あ、そうだ、私も近藤さんの背中流してあげる」

「おおさまー！ヴィヴィオも頭洗ってあげるー！」

などと言う始末。

どうもなのは小さくなった近藤を、最早大人の男性として認識しなくなったようである。

そこにヴィヴィオも参加し、なのはが背中を流し、ヴィヴィオが頭を洗う。

「おおさまー、かゆい所はないですかー？」

「小さい背中だねー、かわいいねー」

今度はなのはとヴィヴィオのサンドイッチである。

これは親子丼というのだろうか？

ああ、またカツ丼たべたいなあ・・・

あ、そういえば義父さんの墓参りしばらく言ってないな・・・今度の休みに行こう。

もう近藤は現実から逃避し、思考を麻痺させた。

一刻も早くこの地獄のような、されど極上の天国が終わることを願

って。

このカオス風呂に恥ずかしさから入る事ができず、脱衣所で悔し涙を流して浴場を羨ましそうな目で見ていたフエイトがいたと、後に通りすぎりのはやてが語った知られざる真実である。

風呂という心の洗濯を行ったにも関わらず、何故か心も体もボロボロになった近藤は、もう何もする気になれず寝ることにした。

だがまたここで紛争が勃発する。

「パパリンの横で寝るのは定員二名！」

「そんなプニプニな父上に悪戯・・・もとい、抱き着いて寝れるチャンス・・・プニプニは誰にも渡しません」

「ステラよ・・・貴様とんでもない事を口走ったな・・・だがしかし、我も譲る気はサラサラないぞ!!」

マテリアル達は火花を散らす。

「じゃあ実力で勝ち取る？」

エレノアが指をパキパキと鳴らす。

やる気満々だ！

「それはダメだ！僕らが実力でエリリンに勝てる訳がないだろ！」

エクレールが両手を交差させバツテンをつくり、エレノアの案を却下する。

「じゃあじゃんけんで！」

ヴィヴィオが拳を振り上げる。

「うん、いいんじゃないかな」

なのはがヴィヴィオに賛同する。

「負けないよ！」

フェイトがフンスと鼻息荒く気合を入れる。

何故近藤の部屋になのはやフェイト、ヴィヴィオまでいるのだろうか？

近藤は疲れてまともに働かない脳で考えた。

だが、導き出した答えは・・・

もうどうでもいいや

だった。

じゃんけんでヒートアップする女性陣を他所に、近藤はうつらうつらと船を漕ぎ出した。

体が子供になったことで、サイクルも子供に近くなったのだろう。それに、今日は肉体的にも精神的にも疲れる一日だった。

近藤はギヤーギヤー喚く女性陣の声をBGMに、こてんと眠ってしまった。

座っていた場所がベッドであつたため丁度いい。

近藤はそのまま、夢の中へと沈んでいった。

そして近藤が寝ている間に、新たな乱入者が現れ、なんとその乱入者が勝利を搔つ攫い近藤はお持ち帰りされた。

いい匂いがする。

やわらかい。

いつものスプリングのベッドとは違う柔らかさ……ウォーターベッドだろうか？

体がベッドに沈む。

それにしても柔らかい。

顔にあるこの柔らかいもの、これは枕だろうか？
弾力があり、それでいてふわふわしている。
顔を埋めて柔らかさを堪能する。

ああ、いい匂いだ……

とにかく柔らかくて、スベスベしていて、温かくて……
すごく安心する……

トクントクンと鼓動が聞こえて……

……ん？

鼓動？

近藤の寝ぼけている脳が徐々に覚醒していく。
なんていい匂いがするんだ？

なんでウォーターベッドで寝てるんだ？

なんで違う枕で・・・いや、そもそもなんで枕に顔を埋めている？

自分の体勢は・・・横向きに寝ている。

なのになんで顔に枕がある？

それに、なんで鼓動がある？

・・・まさかエレノアか！？

近藤はガバツと体を跳ね起こした。

そして、近藤は絶句する。

枕だと思って顔を埋めていた物体と、その持ち主に。

「んっ・・・近藤さっくん？まだ起きるの早いでっ・・・もうちょい寝とこうなっ・・・」

それははやてだった。

そして近藤が顔を埋めていたのは、はやての胸の谷間だった。

はやては大きめのワイシャツをパジャマ代わりにして寝ていた。

そして、シャツのボタンは何個か外れており、はやての白く形の良い胸元が大きく開かれていた。

はやてはまどろみながら起き上がる近藤の頭を掴み、グイッと自分の胸元に引き寄せる。

寝るときは当然ノーブラであるため、近藤ははやての胸の柔らかさを直に顔で体感した。

実は、はやては意外と胸が大きい。

普段なのはやフェイトより小さく見えるのは、二人より小さい身長
のせいである。

そしてなにより着痩せするのだろう、近藤の顔ははやての柔らかい
たつぷりとボリウムのある胸の谷間に挟まっている。

「~~~~っ!？」

近藤は叫びそうになった。

なんで!？

なんで俺ははやて隊長と寝ている!？

しかもココはどこだ!？

いや、それよりもこの状況から脱出しなければ!

近藤はなんとかはやてから離れようとした。

だが、はやては近藤の頭と体をガッチリホールドしており身動きが
とれない。

ただ、顔をモゾモゾと動かすのみである。

ああ・・・柔らかくて気持ちいい・・・

・・・は!?!? いかんいかん! 自我を保て! 心頭滅却だ!!

「うーん・・・近藤さんは甘えん坊さんやな・・・よしよし・・・」

はやては寝言のように呟く。

どうやら近藤がはやての胸に顔を埋めてもがいているのを、甘えていると思っているらしい。

赤ん坊をあやすように近藤の背中をポンポンとリズムよく叩く。

いかん！

これは一刻も早く脱出しなければ！！

早く離れなければ！

じゃないと気が狂ってしまう！！

とりあえず現状では脱出は不可能だ。

チャンスを待とう。

近藤は大人しく寝たふりをして様子をうかがった。

「すー・・・すー・・・」

しばらくすると、はやての穏やかな寝息が聞こえてきた。

そして、近藤の体をホールドしていた力も徐々に抜けていく。

好機到来だ。

近藤は素早くはやてから抜け出した。

「ん……」

はやては近藤のいた空間を手で探る。

だが、すぐ力が抜けそのままパタリと寝てしまった。

近藤はミッションを遂行し、手の甲で額の汗を拭う。

そして一息つくと、今度は後ろからいきなり体を引っ張られた。

そしてそのまま、また誰かに引き寄せられ、ガッチリホールドされた。

「がっ!？」

油断していたためにうめき声をあげてしまう近藤。

・・・また柔らかい感触を後頭部に感じる。

今度のもかなりのポリウムである。

うしろから羽交い締めされた感じの格好になった近藤は、なんとか逃亡ルート確保と犯人を特定しようと頭をフル回転させる。

「静かに。はやてちゃんが起きちゃうよ」

小声で耳元に囁くような声。

息遣いが近藤の耳をくすぐる。

おもわずゾクゾクと身震いしてしまった。

「いい子だから、大人しくしようね」

ぐずる子供をあやすような優しい声。

確かに聞き覚えのあるこの声に、近藤はため息をついた。
そして、小声で質問する。

「・・・なのは隊長、これはどういう事でしょうか？」

近藤を抱きしめた第二の人物は、なのはだった。

「ん？私とはやてちゃんがじゃんけんで勝ったから、一緒に寝てるんだよ？」

なのはは事もなげにそう宣う。

なのはは近藤を抱きしめながら、近藤の頭にほお擦りする。
サラサラの髪の毛の感触が気に入ったようである。

「・・・なんでお二人がじゃんけんに参加しているのですか？」

近藤には訳がわからなかった。
そもそも皆が自分と一緒に寝たがっているというところからおかしいのだ。

まあマテリアルやエレノアはわかる。
甘えたいのだろう。

ヴィヴィオにしても、自分と同じくらいの体格の子供がいてうれしくて、一緒に寝ると言ったと思う。

フェイトに関しても、まあ自分達はそれなりの関係であるから、一緒に寝たいと思う事は別段不思議ではないと思う。

しかしなのはとはやては違う。

仕事仲間として良好な関係を築いているとは思っていたが、こんな自分のような年上の異性と、しかも恋愛感情を抱いていない者に対して躊躇無く一緒に寝るなどという暴挙に出るとは思ってもみなかった。

彼女達の倫理感を疑う。

「今の近藤さんは、保護欲を掻き立てられるというか、母性本能をくすぐられるというか・・・」

「俺26ですよ？四捨五入したら30ですよ？」

「でも今の見た目は子供そのものでしょう？」

「っ！あのね・・・！？」

近藤は、異性に対して危機感を全く持たないなのはに苛立ち、後ろから抱き着かれた体勢を振りほどいてなのはと向かい合い、声を荒げて反論しようとした。

すると、なのはは近藤の口元に人差し指を軽く触れさせ、ニコリと笑った。

なのはもはやてと同じく大きめのワイシャツをパジャマ代わりにし

ており、前のボタンも上の何個かはとめられておらず、なのはの胸元が大きく開き、白く形の良い胸の谷間があらわになっていた。近藤は顔を赤くしてなのはから目を逸らした。

「いいじゃない。たまには甘えても」

なのはの言葉に、近藤は固まった。そんな近藤をなのはは優しく抱き寄せる。

「近藤さんがいつもお仕事がんばってくれてるから、私たちはやりたいように、自由に動ける」

なのはは近藤の頭を髪をすくようにゆつくりと撫でる。

「でも近藤さんはがんばりすぎだと思う。それに、私達を頼ったり、甘えたりしないし。まあ、それでも解決しちゃうから文句は言えないけど・・・」

だから、となのはは優しく、諭すように言葉を続ける。

「これは日頃の恩返し。たまには私たちを頼って欲しいし、甘えて欲しいの。だから、今の私にはこんなことしかできないけど・・・」

撫でた頭を、なのはは自分の胸に引き寄せ、近藤の背中をかるく摩る。

「せっかく子供の姿になったんだし、子供は子供らしく、大人に甘えようね？それが、子供の仕事なんだから」

なにやら言っている事が無茶苦茶な気もするが、近藤はなのには対する印象を改めた。

どうやら、なのはは全てをわかったうえで行動しているようだ。

すべてを一人で抱え込み、一人で解決し、仲間を頼ることもせず、しかし黙々と無茶苦茶な量の仕事を文句一つ言わずに行う男。不器用な人だ。

そんな不器用で武骨な人だからこそ、私たちは信頼するし、好意を抱く。

今日は日頃のお礼も兼ねて、丁度体も子供の姿になったし、ゆっくりと甘えてもらって、骨休めしてもらおう。

私には、私たちには、それくらいしかできないから。

なのははゆつくりと、優しく近藤の背中をポンポンとリズムよく叩き続ける。

近藤はなのはのそんな仕草に、昔を思い出した。

小さい頃、変わってしまった環境に慣れなくてふさぎ込んでいた自分に、同じようにして一緒に寝てくれた女性。

彼女もよく自分の髪を優しく撫で、背中や肩をリズムよく叩いてあやしてくれた。

リンディさん――

近藤は目をつむり、懐かしさを感じた。

子供の頃を懐かしみ感傷的になったのだろうか、近藤は普段では絶対言わない一言を言い放った。

「・・・あの、本当に・・・甘えてもいいんでしょうか・・・？」

近藤がおずおずとなのはに聞く。

もじもじと恥ずかしそうにする姿に、なのははクスリと笑い近藤の頭をそつと撫でた。

「私でよければ、どうぞ」

なのはは頬を染めながら、ニコリと微笑む。

そんな笑顔が眩しくて、近藤は顔を赤くし、ごまかすように小さく一つ咳ばらいをした。

「で、では・・・失礼します・・・」

近藤はそう言うと、なのはの手を取り握った。

今の自分の手は小さいが、なのはの手も小さい。

なのはの手は綺麗だ。

キチンとケアしているのだろう。

でも、手の平にはマメが沢山ある。

それは日頃の訓練や、今までの仕事の積み重ねを感じる手の平だ。でも、誰かを守るための力強い手だ。

とても安心する手、護ってくれる手、優しい手。

近藤はなのはの手を軽く握ると、幸福感に包まれ、あっという間に夢の中へと旅立っていった。

「で、では・・・失礼します・・・」

近藤が前置きしてそう言うので、なのはは近藤が抱き着いて来ると思っていた。

胸に顔を埋めてくると思っていた。

男の人の大半は胸が好きらしいし、本当は恥ずかしいけど、言ってしまった手前拒否するわけにもいかず、近藤さんに休んでもらいたいのは本当だし。

・・・まあ近藤も今は子供の姿だし、そう思って割り切ろう。

そう、目の前の人は子供、ヴィヴィオと同じくらい小さな子供、男の子だ。

断じて26歳の男の人ではない。

というか26歳とは到底思えない。

こんな小動物を彷彿とさせるかわいい子供が26歳な訳がない！

ああ！なんと保護欲を駆り立てられるんだろう！

そつ頭の中で葛藤していると、キュツと手を握られる感触があった。

見ると、近藤が小さな手でなのはの手を握っていた。
もみじのような小さな手でなのはの手を両手でしっかりと握る。

なのはは拍子抜けした。

多少はえっちなことをされると覚悟していたのに、まさか手を握るだけとは。

先程の葛藤がバカバカしくなる。

これは、近藤がヘタレのせいだ、そうなのはは思うことにした。

なのはは意気地の無い近藤の顔を呆れた顔で見ようとしたが、その近藤の顔を見ておもわず息を飲んだ。

なんという幸せそうな顔だろうか。

近藤はなのはの手を握り、幸福に包まれたような顔だったのだ。

無邪気な、無垢な子供の、天使のような笑顔になのははおもわず顔を赤らめてしまった。

そして、近藤はそんな幸せに包まれたまま、早々に夢の世界へ旅立ってしまったようだ。

本当に幸せそうな、この世の幸福に喜ぶような笑顔のまま。

なのはは近藤の寝顔を見て、ドキドキと鼓動が大きく、早くなつていくのがわかった。

「はう……この寝顔は反則だよ……」

なのは空いている手で近藤の頭を髪をすくように優しく撫で、ぽつりと呟いた。

そして、その顔は赤いながらも笑顔だった。

本当に罪作りな子供だよ、近藤君！

そんなやり取りを、魔法で盗み見している者達がいた。

「そっかー、パパリンは手を握って寝ると安心するのーかー」

「父上・・・あ・・・あの寝顔は反則です・・・キュンキュンです」

「くそ・・・あそこでチョコキを出さねば今頃高町なのはのポジションは我だったのに・・・しかし、おやじどの・・・かわいいぞ・・・」

「ワイワイとはしゃぐマテリアル達と、

「なのはママいいなー。ヴィヴィオもおおさまと手つないで寝たいー」

指をくわえて羨ましそうな眼差しのヴィヴィオ。

「そうか・・・ご主人様は耳が弱いのか・・・これはじゃんけんに負けて、予想外の収穫だわ」

なにやら不穏な事をぶつぶつ言うエレノア。

「なのは・・・はやて・・・許さない・・・でも大輔さんのかわいい寝顔見れたから、今回は特別。・・・次こそ、私が・・・」

思考のベクトルがおかしいフェイト。

機動六課にプライバシーはないのだろうか？

結局、魔法での盗み見は徹夜で遂行された。

当然、翌日のフェイトは仕事で全然使い物にならず、シグナムに怒られっぱなしだった。

ちなみにはやてだが、なのはがはやてを起こし、手を繋いだ際の近藤の極上の寝顔を見て見事やられてしまい、なのはと二人で寝ずにずっと近藤の寝顔を見ていた。

「この寝顔は・・・あかんやろう・・・」

「うん、反則だよね・・・」

「・・・なあ、なのはちゃん？近藤さん・・・いや、近藤君と手繋ぐの交代せえへん？」

「・・・仕方ないなあ・・・一時間交代ね」

「よっしゃー！」

「ちよつ、声大きい！！」

そして一時間経ち、なのはと交代したはやては、近藤の手を握った途端顔を赤らめてしまう。

「こ、こんなに小さいんか・・・それなのに、なんや必死に握ってくるし、プニプニやし・・・体温高いな・・・ほんま、赤ちゃんみたいや・・・」

「うん、ステラがやたらプニプニ言うのがわかるね」

「・・・この癒しはちっちゃいシグナム以上や・・・」

はやてとなのはは終始にやけながら近藤の手を交互に握り、近藤の寝顔を堪能していた。

そして、徹夜で近藤を観察していたため、二人もフェイト同様翌日

は寝不足で使い物にならず、ヴィータとシャマルに怒られたのだ
た。

第19話 今まで男の威厳が発揮された日があっただろうか？（前書き）

さて、お久しぶりです。

お待たせしました。

いや、待ってねーよ。

そんなこと言っちゃいじゃん！

第19話　今まで男の威厳が発揮された日があっただろうか？

近藤がエレノアの謀略によって子供の姿になった次の日、近藤はいつものようにフォワード達の早朝訓練に参加するため仮想シミュレーターへ向かっていた。

横では眠そうにあくびをするのはとフェイト、そして、それを諷めるヴィータとシグナム。

「まったく、睡眠不足とは何事か！下の者に示しがつかんだろうが！」

「・・・まあ、大体理由はわかるけどな」

ヴィータは呆れた顔で小さな近藤を見た。

時間は少し遡り早朝、宿舎の前でなのはやフェイトと一緒にいる小さな近藤を見たとき、何処かの子供が迷い込んだかと思った。

だから、ヴィータもシグナムも、最初小さな近藤に対して、「誰だおまえは？」と聞いた。

その言葉に、近藤の心は深く傷ついた。

表情を暗くし、今にも泣きそうな顔をした。

そんな表情を見たのはとフェイトはワタワタと慌てだす。

これにヴィータとシグナムは焦った。

なんだ、何か泣かせるような事を言ったか！？

もしかして以前会った事があるのか！？

それより、朝っぱらから子供を泣かせるなんて御免被りたい。

「わ、わりい、何処かで会ったか？うちの隊の子供か親戚か！？」

「う、うむ！なんならその身内のところまで連れて行ってやろう！だから泣くな！な？」

ヴィータとシグナムの親切が、さらに近藤の心に傷をつけ、えぐり、塩を塗りたくる。

近藤は半泣きになり、ガックリと肩を落とし、隅の方で膝を抱え体育座りをして拗ねてしまった。

そんな近藤の機嫌をとろうと、フォローを入れようと必死なのはとフェイト。

「あ、あたしらずいこと言ったか！？」

ヴィータはテンパる。

「お、おい・・・高町、テストロッサ・・・何故そんなに殺気立ってるのだ？」

シグナムは、いつの間にかものすごい形相で殺気を振り撒いて睨む

なのはとフェイトにたじろいだ。

「・・・あんなかわいい近藤君を泣かせて・・・」

「・・・ほんと・・・薄汚れた大人は近藤君を傷つけるだけだ・・・」

地を這うような声が響く。

自分達も最初気づかなかったのに、それを棚にあげてシグナム達を批難するのはとフェイト。

いつの間にかなのはとフェイトが近藤の事を『君』と呼んでいるのはなんだろう？

だが、聞き捨てならない単語に、シグナムとヴィータはうるたえた。

「ちょっと待て。おまえたち、今なんと言った？」

「このちっこいのが・・・近藤？」

ヴィータはプルプル震える手で指差す。

なのはとフェイトは体育座りでいじけてる近藤を慰めつつ、コケンと頷いた。

というやりとりの後、最初に戻り、なのはとフェイトを叱る二人になる。

「どうせ、昨日は近藤を一日中観察して寝れなかったんだろう？そういうばはやても眠そうだったな」

ヴィータが今朝のはやてを思い出す。

はやては目の下にクマをつくり、眠そうだった。

「昨日は私とはやてちゃんの二人で近藤君と一緒に寝たからね」

「何だと貴様ー！！」

なのはの言葉に、シグナムはレヴァンティンを近藤に突き付けた。

「お、俺は無実です！俺の意思じゃないんです！無理矢理なんです！それに何もやましい事はしてません！！」

近藤は両手をあげ、シグナムに必死に弁明する。

シグナムはチラリとなのはを見る。

すると、なのはさ苦笑しながら頷いた。

まあ、よくよく考えれば、近藤になのははやてに手を出すような根性は無いことなどわかるようなものだが。

「私たちは何もされてないよ。ただ、手を握って寝ただけだから」

なのははそう言いながら、昨晚の近藤の寝顔を思い出したのか、頬を桃色に染めた。

「・・・しっかし、なんで子供になったんだ？」

ヴィータは顎に手をやりながら近藤をじろじろ見る。

・・・うん、面影のカケラもないな。

つか、こいつ子供の時は結構かわいいんだ・・・

真剣な表情でそんなことを考えていたヴィータだった。

そして近藤に代わり、なのはが事の経緯を説明した。

それを聞いたヴィータとシグナムは呆れはて、さらに近藤に憐憫の目を向けた。

「・・・ほんつとにろくなことしねーな、ねーちゃんは・・・」

「しかし、なんだ、お前も災難だったな」

「うつ・・・同情の眼差しが痛い・・・」

近藤は向けられた眼差しに傷ついた。

「で？その赤い飴玉は貰えたのか？」

ヴィータが腰に手をあて近藤に聞く。
相変わらずの呆れ顔だが。

「今はまだ寝てますから、起きてからもらいます」

「悠長だな。姉上が約束を反古にするかもしれندろう？」

近藤がまだ飴玉を受けとっていないことに、ため息をつくシグナムだが、近藤は首を横に振る。

「いいえ、エレノアは約束を絶対に破りません。まあ、それまでに

無理難題をふっかけてきますけど」

エレノアのことを信頼している近藤に、シグナムやヴィータ、なのはとフェイトも驚いた。

この二人の絆は相当固いんだな、と改めて認識したのだった。

「とにかく、現状で仕事に支障をきたす心配はありませんので、今はこのまま行きます」

近藤はそう言うと、スタスタと歩きだした。

それを聞いたなのはとフェイトは、

（じゃあ、大人に戻らずに今のままでもいいんじゃないかなあ）

などと思いつつ、一人歩きだした近藤に急いで付いて行き、近藤の両側を陣取り手を繋ぎ歩きだしたのだった。

「お父さん子供になつたんですか!？」

「わー！私より小さい!」

「副隊長にも子供時代があつたんだ」

「こ、近藤副隊長・・・かわいいです・・・」

上から順番にエリオ、キャラ、スバル、ティアナである。

近藤達は、仮想シミュレータに着くと、既に準備運動をしていたフォワード達に挨拶した。

当然、フォワード達は子供になった近藤を見る。

なにせ、なのはとフェイトに挟まれて両手を繋がれている状態であるし、そもそも早朝訓練に小さな子供が来ること自体が異質なのだ。フォワード達は近藤をじーっと無言で見つめた。

そして、四人が一発で導き出した答えが前述の言葉である。

近藤は涙をボロボロ流し、感激した。

「俺・・・こんなにうれしい気持ちになったの初めてかも・・・」

どんだけ幸薄い人生なのだろうか？

「俺・・・ここに居てもいいんだね？」

「当然ですよ！」

「私はお持ち帰りしたいです!!」

近藤が涙ながら訴えると、拳を振り上げ肯定するキャラと、涎を垂らして周囲にお花畑が発生しているティアナ。

ティアナの場合、下手したら斧で殺されそうなのがするのは俺だけ

だろうか？

と少し失礼な事を考えた近藤だった。

「はいはい！じゃあ朝練始めるよ！！」

なのはがパンパンと手を叩き、緩んだ空気を引き締める。

だが内心（ああ・・・この子達は一目でわかったのに、私は・・・アルクの言うように、私も薄汚れた大人なんだ・・・）等と思い、気落ちしていた。

隣ではフェイトが肩を落として落ち込んでいた。

「私は・・・私は・・・薄汚れてるんだ・・・」

とブツブツ呟きながら。

朝練は滞りなくスムーズに進んだ。

フェイトは落ち込んで立ち直らないので放置。

フォワード達はなのはとヴィータの指導を受けていた。
なのはの指導がいつもより厳しいのは気のせいだろうか？

そして、近藤とシグナムはいつも通りフォワード達の動きを観察していた。

つまり、今近藤はシグナムと二人きりである。

シグナムは小さくなった近藤をチラチラ見る。

いつもは同じくらいの目線だが、今は近藤のほづが遥かに小さいため見下ろす形になる。

近藤は真面目にカリカリとメモを書いている。

チラチラ

小さいな・・・

チラチラ

黒髪が綺麗だな・・・天使の輪が出来るほどのツヤツヤな髪質・・・

チラチラ

色白だな・・・

特に会話の無いシグナムは、気になったのでさりげなく近藤に質問してみた。

「近藤、お前の今の肉体年齢はいくつなんだ？」

「おそらく10歳くらいです」

近藤の答えに少し驚くシグナム。

「・・・10歳にしては・・・その、小さいな・・・」

「そうですね。エリオの制服がブカブカですから」

近藤は今現在もエリオの制服を借りている。

はつきり言って大きい。

ダボダボである。

近藤は袖を持ってシグナムに見せるように広げ、苦笑する。

そんな仕草に、シグナムはうつつと小さく唸る。

代わりの服といっても、エリオの服以外に体格に近いものは無い。いや、あるにはあるが、それはヴィヴィオの服だったり、以前小さくなったシグナムの服だったり、女の子向けの服しかなかった。

実は昨日服について少し衝突があった。

エレノアやマテリアル達が、近藤に女の子向けの服を着せようとしたのだ。

もう着せ替え人形である。

さすがにそれは男のプライドが許さないと、近藤は頑として拒否した。

エレノアも、普段ならここで赤い飴玉を餌に無理矢理着せようとするのだが、近藤がマジで怒っているのがわかったため、やめた。

近藤のキレた時の恐さを知っているエレノアは、いつもからかっていながらも、ある一定のラインは越えないと決めていた。

そのラインとは、近藤のマジギレするラインである。

まあ、近藤のマジギレする沸点はかなり高いので、結構無茶しない限りは大丈夫なのだが。

なんだかんだでエレノアは空気が読めるのだ。

「ふむ・・・髪も長髪でツヤツヤのサラサラだな・・・」

「そうですね？」

シグナムはいつの間にか近藤の頭を撫でていた。

近藤自身サラサラの髪に自覚が無いので、気の無い返事をする。

「手も小さい・・・柔らかいな・・・プニプニしてる」

「そんなにプニプニですかね？」

そして近藤の手を取り、手の平をフニフニ触りだす。

ブツブツ呟きながら、それでも近藤の手を離さず触ったり揉んだりしていた。

「肌もスベスベでプニプニだ」

「・・・シグナム副隊長、顔近いです」

シグナムは近藤の頬をツンツン突いたり撫でたりする。

いつの間にかシグナムの顔は超至近距離にあった。
数字にすると、10センチ程である。

何故だろうか、シグナムの鼻息が段々荒くなっている気がする。

近藤は、間近に迫るシグナムの顔から距離を取ろうとのけ反る。

しかし・・・

「・・・ふむ、抱き心地もいいな。お前は体温高いな。抱きまくらとしてフィットするサイズだ」

シグナムは逃げようとする近藤を抱き上げ、頬をスリスリと擦り寄せた。

ギュッと抱きあげたため、近藤は足が地面につかず、ぶらぶらとした。

近藤は恐る恐るシグナムの顔を見上げた。

シグナムの目は逝っていた。

そして近藤はというと、未だ体験したことのない巨大な双丘に挟まれ身動きが取れないでいた。

さらにシグナムがきつく抱きしめるものだから、どんどんシグナムの双丘に埋もれていく。

シグナムの双丘・・・胸は、機動六課において1・2を争う大きさである。

本人は大きい胸に不満があるようだが、それはそれでその人の特徴であるし、女性らしい体つきと言われればそうだし、はやても喜んでいるしと納得はしていた。

そして、今その胸には小さな近藤が挟まっている。

なんとか脱出しようとしたが、子供の腕力は非力であるため逃げ出せない。

近藤はなんとか離れようと、シグナムに殴られる覚悟で胸を掴み押した。

しかし、シグナムの胸に手がずぶずぶと入り込み、ただ手に胸の柔らかさ伝わるのみである。

そして、近藤は顔を真っ赤にしながらかんたかならないかともがき続ける。

そんな小動物のような動きを見たシグナムは、保護欲を駆り立てられ、より近藤を抱きしめる。

「近藤、お前はかわいいなあ」

普段のキリツとした表情が嘘のように、近藤を抱きしめるシグナムの顔はにやけていた。

そして近藤は未だもがく。

逃げ道を探すために状況を把握する。

ハッキリ言おう。

めちゃくちゃ気持ちいい！

服の上からでもわかるボリューム。

大きいのに弾力があり、しかしフワフワと柔らかく、顔が胸に埋もれていくのだ。

天国である。

これはいかん！

麻薬だ！！

早く逃げださなければ！！

「ちよつ！助けてー！誰か助けてー！！」

近藤は堪らず叫んだ。

その声を聞いた他の面々は、シグナムと近藤の状況を見た途端眉間にシワを寄せ、殺気を放った。

「こらシグナム！朝練中に何やってんだ！！」

ヴィータは冷静にシグナムのしている事を怒った。

自分達が真面目に訓練してるのに、近藤とイチヤイチヤするとは何事か！！

下の者に示しがつかんとか言ってた本人が何してんだ！！

だが、ヴィータ以外の者は違った。

「あー！ずるいです！」

「私もお父さん抱きしめたいです！」

エリオとキャラコが非難の声をあげる。

「シグナム副隊長！次私！私に抱かせてください！！」

「スバル！私が先よ！！」

スバルとティアナがシグナムに催促する。

ちなみに4人ともなのは日頃に3割り増し訓練という八つ当たりによりボロボロである事を付け加えよう。

「いーなー。私も近藤君抱きまくらにしたいなー」

羨ましそうな声をあげるなのは。

「・・・おめーら・・・」

ヴィータは呆れ果ててしまった。

そして、いじけていたフェイトはというと、いつの間にか復活し・

・

「ちょっと！離れて下さい！近藤君を勝手に抱かないで！！」

「減るものでも無し、別に構わんだろうが！！」

シグナムが抱きしめている近藤を取り上げようと近藤の下半身を引っ張っていた。

「そうだ近藤、今日は私と寝ようか。そうしよう、それが一番だ」

「ちょっと！！さっきまではやてと寝た事に怒ってた人が吐くセリフじゃないですよ！？」

「ええい、やかましい！近藤は小さいのだ！プニプニなのだ！守ってやらんといかんだ！！だから誰かが添い寝してやらんといかんだろっが！！おまえたちに任せたら近藤が大変な事になるに決まっ

てるー!!」

ギヤーギヤー言い合うシグナムとフェイト、そして言いたいことを言う外野。

その間も、苦しそうな顔の近藤。

そして・・・

プチン

ヴィータはキレた。

「てめーらしい加減にしろー!!」

ヴィータの落とした雷によって、その場はおさまった。

「おめーら半径5メートル近藤に近付くの禁止な」

「ええー!!」

ヴィータの裁定に不満タラタラなのは達。

そこにシグナムまで加わっているのだからもう何がなんだか。

「あーうるせー！！それが嫌なら近藤にベタベタすんな！もう今日の訓練は終了だー！！」

ヴィータはそういうと近藤の手を引き、ドスドスと音を立て、大股で歩いていった。

「す、すみませんヴィータ副隊長・・・」

申し訳なさそうにシヨボンとする近藤。

ヴィータはそんな顔を見て、少し焦った。

「お前のせいじゃねーよ。あいつらが弛んでる証拠だ」

ヴィータはぷいっとソップを向き、照れ隠しにさらに歩く速度をあげようとした。

だが、近藤はヴィータよりも身長が低いため必然的に歩幅も違う。

近藤はヴィータと手を繋いでいるため、なんとかついていこうと必死に小走りする。

そんな必死な近藤に気付いたヴィータは立ち止まった。

「あつ、わ、わりい！」

「い、いえ、いいです・・・」

ヴィータは謝るが、近藤はいいと言う。

息切れしながら、近藤はヴィータに必死についていこうとしたのだ。

そんな姿が、アヒルの子供のようで、ヴィータの琴線にふれた。

そしてよくよく考えると、ヴィータは近藤と手を繋いでいるのだ。改めて繋いだ手の感触を確かめる。

小さい。

温かい。

柔らかい。

なるほど、皆がプニプニいうのも頷ける。

ヴィータは近藤と繋いでいる手をじーっと見つめていた。

「あの、どうかしましたか？」

近藤は小首を傾げながらヴィータを見上げた。
その仕種にヴィータはうつとめき声をあげた。

・・・こいつ・・・

・・・かわいいじゃないか・・・

なんか守ってあげたくなるじゃないか！

「な、なあ近藤？これからあたしと一緒に朝食採らないか？」

ヴィータは若干顔を赤くしながらそんな提案をする。

「え？はい、いいですよ」

近藤はフツと笑いヴィータの提案を了承した。

「そ、そっか。よ、よし！じゃあ早速メシ食い行くか！」

ヴィータはぱあつと笑顔になり、近藤と繋いでいる手に力を込めた。それに応えるように、近藤もヴィータの手を握り返す。

ヴィータの心拍数は跳ね上がった。

（ちくしょー！かわいいじゃねーか！）

ミイラ取りがミイラになった瞬間だった。

第19話 今まで男の威厳が発揮された日があっただろうか？（後書き）

なんとか本編のほうも更新したいなあ・・・

でもまとめきれない・・・

そしてまた違う番外編のほうがサクサク書けているという・・・
なんと5話くらいは書けている。

さて、そっちはいつ投稿しようかな？

第20話 男は不測の事態に弱い（前書き）

お久しぶりです。

久しぶりと言いながら、なんとも微妙な内容の話です。

うーむ、アイデアが枯渴したかな？

ともあれ、駄文ですが見てください。

第20話 男は不測の事態に弱い

近藤はヴィータと二人で朝食を採った。

なのは達はヴィータから近藤の半径5メートル近付く事を禁止されたため、離れた場所で朝食を採っている。

なのは達はなんとかして近藤に近付きたかったが、何かセンサーでも張り巡らしているのか、近藤の半径5メートルに少しでも侵入すれば、ヴィータが鬼のような形相で睨んでくるのだ。

これでは近付きたくても近付けない。

「近藤、おめーは食が細いな。そんなだから小せーんだぞ」

「いや、俺はいつも朝は野菜ジュースしか飲みませんから、これでも多いですよ。まあ、今の姿が小さいのは否定しませんが・・・」

「子供はもつと沢山たべて大きくなるんだよ」

「・・・俺大人ですし、一日の摂取カロリーはキッチリとってますから」

「ガキのくせに口答えすんな。ほれ、コレも食え」

「・・・俺26なんすけど・・・」

近藤とヴィータが楽しそうに話しながら食事を探っている姿を、ただ遠くから指をくわえ眺めるしかないのは達だった。

朝食を採り終え、午前の仕事に取り掛かろうと、オフィスルームで端末に向かう近藤。

ちなみに、オフィスルームの椅子が大きすぎて体に合わないので、食堂からいつもヴィヴィオが使っている子供用の高い椅子を持ち込んだ。

しかし・・・

・・・何故か暑苦しい。
息苦しい。

いや、理由はわかっているのだ。

「・・・皆さん自分の仕事があるでしょう？さっさと取り掛かってください」

近藤の座る机の回りには、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、フォワード達、そしてはやてが囲んでいるのだ。

・・・暑苦しい。

だが彼女達からいい匂いもする。

とりあえず近藤は皆に自分の仕事をするように注意した。
しかし、何故か皆動くのを渋る。

「いやしかしだな、おまえを一人で置いておくのは些か不安で・・・」

シグナムが何故かオロオロしながら言う。
もうキャラ変わってる。

「私、今日の仕事明日に回すから大丈夫！」

フェイトが拳を作り力強く言う。

「あ、私もそうしよう」

なのはがフェイトの案に賛同する。

何を言い出すのだろうか、我らの隊長殿は。
近藤はため息をついた。

「わかりました。じゃあ明日の俺の仕事分も全て皆さんにまわしますから」

皆が仕事しないなら、自分もしない。

近藤がそう言った途端、サッと隊長達の顔色が変わった。

「ほ、ほらほら！仕事は溜めたらあかん！皆キリキリ働こか！！」

はやてが慌てながら手をパンパンと叩いて皆を仕事にやる。

シグナムとヴィータは外回り、なのはは他の部隊へ教導、フェイトも執務官の仕事、フォワード達とはやても報告書類作成など、仕事は山積みなのだ。

「・・・ほら、ココとココ、計算式が違うからおかしくなるんだ」

「あ、あゝ・・・そうですか、えへへ、すいません」

近藤はスバルの報告書のミスを指摘するが、スバルは腑抜けた返事をする。

「スバル、お前わかってるのか？」

近藤は少し強く言った。

「ええゝ？わかってますよ。副隊長は小さくて温かくてジャストサイズなんですわ」

しかしスバルはわけの分からない返しをする。

そんなスバルを睨むティアナと、羨ましそうにするエリオとキャロ。

それもそのはず、近藤は今スバルの膝の上に座っているのだ。

いつもならスバルの後ろに立ちあれこれ指示するが、現在の子供の姿では立った姿勢では机の上のモニタが見えない。

そこでスバルは近藤を抱き上げ、膝の上に座らせ報告書の確認と指摘をしてもらっていたのだ。

スバルは二ヘラと表情を緩めながら近藤を抱きしめ、頭にほお擦りする。

「はゝゝゝウサギとか子犬を抱いているようなこの幸福感、保護欲を掻き立てられる存在ゝゝゝ副隊長は最強セラピストだにやゝ」

スバルがなんか難しい単語を呟くが、内容はくだらなかった。呆れた近藤は、スバルの膝の上からぴょんと飛び降りる。

「ああ！？副隊長ゝ！」

悲痛な声をあげるスバルだが、情状酌量の余地はない。

「スバルは今日のノルマー人でやること。終わるまで食事抜き」

「ひー！？そんなー！！」

近藤の言葉に頭を抱えて叫ぶスバル。自業自得である。

おろろんと泣くスバルを放置して近藤は自分の作業に戻る。

大人の姿のときと遜色ない手の動きで次々と書類を片していく。

子供がバリバリ仕事をするシールさと、有能であるという反則。中身は26歳だが、それでも自分達より小さい近藤の仕事ぶりに焦るエリオとキヤロ。

そんな、何故か焦りながら忙しくコンソールを叩くエリオとキヤロの姿に、彼等の心情など知る由もない近藤はフツと笑うのだった。

「副隊長、確認お願いします」

ティアナが近藤に声をかけ、データを近藤の端末に送り近藤の座るデスクの前に立つ。

デスクワークが有能なティアナはいち早く仕事を終わらせ、近藤に確認を求めた。

「ん、わかった………うん、問題ないよ。お疲れ様」

近藤はティアナから送られてきたデータをザッと見て、内容に問題が無いことを確認する。

ティアナの提出する書類は実にわかりやすく、合理的にうまくまとめられている。

それに彼女がミスするのはごく稀であるので、ハッキリいってほとんど確認の必要は無い。

まあ一応念のためにしているだけである。

近藤もティアナのデスクワークの優秀さは認めている。

まあコレは上司と部下の形式的なやりとりである。

「ティアナはいつも速くて正確だから助かるよ」

「ありがとうございます！」

近藤がティアナのデスクワークを褒め、ティアナがそれを敬礼で答える。

いつものオフィスのやりとりである。

実はこのやりとりはティアナの密かな楽しみの一つであった。

近藤に一番にお疲れ様と言ってもらいたいがためにティアナは誰よりも速く書類を仕上げる。

そして、お疲れ様と言われ、顔には出さないが内心でキヤーキヤー飛び上がらんばかりに喜んでいるのだ。

だが、現在は少々事情が異なる。

いつものゴツくて、色黒で厳つい近藤ではなく、小さく小動物を連想させるような近藤なのだ。

そんな子供な近藤に、お疲れ様と労いの言葉を貰い褒められる・・・

なんと幸せなことだろうか！！

ティアナは新しい性癖に目覚めた。

「・・・ティアナ、よだれ出てるぞ？」

ティアナは恍惚とした表情でよだれを垂らし、褒められたことを反芻していた。

そして、そんなティアナを見たエリオとキャロ、スバルは、自分も褒めてもらおうとスピードをあげ、その日はいつもより早く書類整理が終わったのだった。

ちなみに、はやては部長室で書類整理をしていたのだが、睡魔に

負け、リインもつられて寝てしまい、それを見つけたシャマルにこっぴどく怒られたのは余談である。

昼になり、近藤とフワード達は食堂で昼食をとっていた。

相変わらずテンコ盛りの皿を抱えてニコニコ笑っているスバルとエリオ。

そんな二人の食欲にも馴れた周囲。

そこへ、いままで寝ていたエレノアとマテリアル達が食堂に現れた。四人とも、まだ眠いのかフラフラしている。

「やっぱり僕らに徹夜なんて大人なことは早かったんだ・・・くあ・・・」

大きなあくびを隠そうとせず、目を擦るエクレール。

「・・・徹夜なんて・・・不良です・・・あふ・・・」

目をシパシパとしばたくステラは、手で口を抑える。

「体が痛い・・・ギシギシする・・・」

首をぐりんぐりん回しながら、半分寝ているアルク。

「お昼ご飯食べたらもう一回寝ようか？」

目の下にクマをつくったエレノアの提案に、コクリと頷くマテリア達。

そんな眠そうなエレノア達に、近藤は声をかけた。

「おい、エレノア」

「あ、ご主人しゃま、おはようございます」

若干呂律も怪しいエレノアはペコリとお辞儀した。

おはようございますって、もう昼なんだけど・・・
近藤は呆れ、ため息をついた。

「もう一回寝るのはいいが、先に赤い飴玉をくれ」

近藤はエレノアに手を差し出した。

それを聞いたマテリアル達は眠気が一気に吹き飛び覚醒した。

「パパリン元に戻っちゃうの!？」

「勿体ない・・・」

「我は凜々しいおやじどのも好きだからどっちでもいいがな。あ、でも小さいおやじどのと一緒に寝たかったな・・・」

マテリアル達はブーブー不満を垂れだした。

「ええ！？まだいいじゃないですか！」

「私、まだ副隊長とお風呂入ってないのに！」

「僕もお父さんと遊びたいです！」

「私も！」

フォワード達も好き勝手言う。

「んゝ、でもコレはご主人様との約束だからねゝ」

エレノアは困った顔をしながらも、ポケットから小瓶を取り出した。瓶の中にはコロコロと転がる赤い飴玉が一つ入っていた。

エレノアは周囲の猛烈な反発の中、その小瓶を近藤に渡そうとした。

そのとき近藤は気が緩んでいた。

ああ、これで元に戻る。

理性がガリガリ削られるような出来事がなくなる。

普通のオッサンにもどれる。

そう思っていたのだ。

だが、

ヒョイツ！

突如横から出てきた手によって小瓶は奪われ、

「え？」

近藤は素っ頓狂な声を上げた。

そして沸々と怒りが込み上げてきた。

誰だ、飴を横取りしたのは！？

近藤は飴を取り上げた人物を睨み見た。
そして表情をすぐに驚愕に変えた。

「あらあらゝまだいいじゃない、大輔君♪」

そこには、いつも以上にニコニコ笑うリンディが赤い飴玉を持って立っていた。

第21話 男はマジギレしそして伝説へ・・・（前書き）

いきなり、かつ無理やりですが、近藤子供事件は今回で終わりです。
これ以上広げたら收拾つかなくなるからね。

しかも、次回はこれ以上の混乱が起動六課を襲う予定です。

これ以上のトラブルメーカーとは誰か？

とりあえず、見てやってください。

第21話 男はマジギレしそして伝説へ・・・

「な・・・なんでリンディさんが・・・」

近藤は未だ驚きを隠さずにリンディを見上げる。

そしてリンディは言う。

「はやてさんから昨日報告を受けてたのよ。で、いてもたってもいられなくて来ちゃった」

てへつとウインクしながら舌をぺろつとだすリンディ。
年を考えて行動してほしいが、似合うから始末に困る。

そしてリンディは、もう我慢できないとばかりに近藤をかかえ、ギューッと抱きしめる。

「うふふ、本当に昔に戻ったのね」ああ、懐かしいわこの抱き心地・
・・・若返った気分・・・」

うつとりした顔で近藤にはお擦りするリンディに、皆動けなかった。

「ちよっ！？皆が見てますから、離してくださいー!!」

近藤は必死に抗議するが、リンディはそんな近藤の揚げ足を取る。

「あら、じゃあ皆が見てないところならいいのね？」

「そういう意味じゃありません!!」

近藤は顔を真っ赤にしてジタバタもがく。

そんな嫌がる近藤を見て、リンディは淋しそうな表情でとんでもないことを言った。

「そんなに嫌がることないじゃない？昔は『僕リンディさんと結婚するー!』とか言ってくれたのに」

「なにーっ!!?」

リンディの爆弾発言に絶叫する周囲

エクレール、ステラ、アルクはわなわなと震え、エレノアは泣きそうな顔をしていた。

「パ、パリンは年増趣味だったのか・・・!?!」

「・・・だから私達になびかなかったんですね・・・」

「こ、これは知りたくなかった事実だ・・・まさか若い我等より枯れた老婆がいいとは・・・」

口々に言いたい放題のマテリアル達である。

「・・・言いたい放題ね・・・流石に傷付くわ・・・」

リンディは頬をひくつかせ、笑みを固くする。

「俺はそんなこと言った覚えはない！そもそも子供の戯れ言だろう！？」

近藤は、それはもう顔を真っ赤にして否定した。

そんな幼少期の、しかも覚えていない恥部を暴露されていい気はないし、恥ずかしさしか湧かない。

実は近藤の初恋はリンディだったりする。

子供からすれば、母親のように優しく、美人がいつもニコニコと笑い、一緒にいてくれるのだからそんな感情が湧かないわけがない。

普段は奥手で大人しい子供だったが、リンディと二人きりのときは手を繋いだり、一緒に風呂に入ったり、一緒に寝たりと甘えん坊だったのである。

別に今のキャラが崩れることを危惧しているわけではないが、わざわざ恥部を曝すこともないだろう。

未だリンディに抱き上げられている近藤はジタバタともがく。

うーうーとうねりながらなんとか逃げようとしているのだが、それ

は逆効果だった。

「はう・・・近藤副隊長・・・なんか小動物みたいでかわいいです・
・」

ティアナがうつとりしていた。
もう胸がキュンキュンである。

「子犬みたいだにゃ」

スバルがそう言いながらよだれを垂らしている。
なんだろうか、子犬みたいに美味しそうに見えるのだろうか？

「うらやまし・・・い、いや、かわいいな・・・」

「私も抱っこしたいな」

男として羨ましそうな眼差しを向けるエリオに、指をくわえて見ているキャロ。

「見てないで助けるー!!」

近藤の悲鳴に近い叫びは食堂に鳴り響いたのだった。

「大輔くーん! からかい過ぎたのは謝るから出てきてー!」

リンディが叫びながら扉をドンドンと叩く。

「パパリーン！逃げ場はないぞー！」

「故郷のご両親が泣いてるぞー！」

「・・・何を言っているのですか、二人は」

エクレールとアルクは立て籠もる犯人を説得する言葉をなげかけ、それを聞いたステラが呆れる。

エクレールとアルクの言葉はあながち間違っただけではなかった。

なぜなら、現在近藤はエレノアを連れて自室に立て籠もってしまったためである。

皆あまりにも近藤をおもちやのように扱うので、近藤はとうとうキレてしまい、エレノアを連れて自室に戻り、鍵をかけ立て籠もったのだ。

「それよりなんでエリリンなんだよー！パパリーン！」

「そうだぞー！我等と一緒にの方が楽しいぞー！」

「それには同意します」

言いたい放題のマテリアル達である。

ちなみにフォワード達は訓練の為此の場にはいない。

さて、そんな騒がしい外野に変わり、近藤の自室では静寂が支配していた。

近藤は椅子の上であぐらをかき、腕を組んで「そりゃあもう怒ってますよ」と言わんばかりの形相だ。

対してエレノアは床で正座させられていた。

「・・・」

「・・・・・・」

近藤は無言でエレノアを睨み、エレノアは気まずさから目を反らしている。

心の中では小さい近藤に怒られて、なにやら「やだ・・・こんな小さくてかわいい子に怒られる大人の私って・・・」と変な感情が湧き出てきているのだが、近藤がマジで怒っているので顔には出さなかった。

そして静寂を破ったのは近藤だった。

「・・・エレノア、お前俺に隠してることあるだろう」

子供の声ながら、ドスの聞いた声色に、エレノアはビクッと体を硬直させた。

「・・・さあ、なんのことやら？」

エレノアは近藤とは目を合わせず、しかし焦りにダラダラと汗を流

していた。

あくまでしらばっくれるエレノアに、海のように心が広い近藤も我慢できず、切り札を出した。

「・・・お小遣カット」

「すみません！正直に話します！後生ですからそれだけはお勘弁を
ー！！」

エレノアは即座に土下座し吐いた。

「・・・やっぱりチャーム（魅惑）の呪いを混ぜてたのか・・・」

予想通りの解答に、近藤は怒りつつも呆れていた。

「おかしいと思ってたんだ。俺は別に美少年でもない普通の背格好なのに、皆過剰にチャホヤするから。つーかチャームは禁呪だろうが・・・いや、この年齢詐称飴自体が禁忌だロストロギアな」

エリオのような美少年なら女性にチャホヤされてもおかしくないだろうが、近藤はひいき目に見ても中の中、カッコイイとは言えないけど、まあどちらかと言えばかわいい部類じゃない？
程度である。

「・・・いや、それは関係ないと・・・」

「あ？」

「ひいつ・・・なんでもないです・・・」

しかしエレノアが異論を唱えようとすると、近藤が睨みつけエレノアは蛙のような声を出し萎縮してしまった。

実際エレノアが飴玉に施したチャームの呪いは微々たるものだった。

あら、なんかこの子供気になるわね・・・

程度の。

だがそういうきっかけというのは意外と重要である。

目立たない存在で”あろうとする”近藤に注目させてしまうのだから。

よって、皆が壊れてしまったのは呪いのせいではなく近藤自身の魅力なのだが、キレてしまった近藤に何を言っても無駄であるためエレノアは近藤の言葉にNOでもYESと言うしかないのである。

エレノアがビクビクしていると、近藤が手を差し出してきた。

「赤い飴玉出せ」

有無を言わせない近藤の言葉にエレノアはますます萎縮するが、エレノアは首を横に振る。

「今ここにはありません」

「何処にある……」

近藤が赤い飴玉の場所を聞き出そうとしたとき、部屋の外から一層騒がしい声が聞こえた。

「ステラえもーん！パパリン出てきてくれないよー！」

「大丈夫だよエク太くん！てれれれってれー！」

『赤い飴玉ー！』ピカピカー！

「おおー！心の友よー！我等の手元には赤い飴玉がそれぞれひとつづつ、合計三つあるではないかー！まさに我の物は我の物、貴様の物も我の物だなー！！」

「……いや、それはちょっと使い方違うかなー……？」

「なんだとう！？エク太のくせに生意気だぞー！」

「あ、それは合ってますよアルクアン」

ガタンッ！と近藤は椅子の上で立ち上がる。

なんだこの会話は！？

どこぞの猫型ロボットやダメな眼鏡少年、そしてなんたらニズム全開なガキ大将を真似たような喋りは無視して、何故エクレール達の手元に赤い飴玉がある！？

近藤は子供とは思えない鬼気迫る表情でエレノアを見た。
エレノアはひいっと悲鳴をあげ、洗いざらいぶちまける。

「赤い飴玉は4つ作ったの！1個はご主人様ので、あと3個あまるから、マテリアル達にあげたの、あの子達大人になりたいって言うてたから！！でも、まさかリンディさんが来て取り上げるなんて思いもよらなかったの！！」

近藤は歯を食いしばる。

この判断でエレノアを責めるのは可哀相だ。

たしかにリンディが乱入してきて赤い飴玉を没収するとは夢にもおもわないだろう。

そこで、近藤は気になることをエレノアに聞いた。

「ちょっと待て、あの飴玉の効果は確か一生だったはずだ。まさかマテリアル達はあの飴玉飲んで、ずっと大人の姿でいるということか？」

近藤は想像する。

大人の姿になったマテリアル達を。
おそらくなのは、フェイト、はやてそっくりの美人になるだろう。
しかし思考は子供。

パパーン肩車してよー！

・・・ムチムチの太股で顔を挟まれて・・・

おやじどの！背中をながしてやろう！

・・・すべすべの肌をスポンジ代わりに背中を洗う・・・

父上、一緒に寝ましょう

・・・スケスケのネグリジェで・・・

・・・いかん、いかんぞこれは！

そんなことがこれから毎日続けば狂ってしまう！

俺のライフはレッドゾーンになってしまう！！

意外と想像力豊かなムツツリな近藤である。

近藤は顔を真っ青にするが、エレノアがその考えを否定する。

「彼女達は魔法生命体です。肉体変化は自由にできます。ただ、あの子達は変身魔法が苦手らしくてあの飴玉を欲しがっただけなんです」

「・・・つまり、あの飴玉はあいつらにきっかけを与えるだけで、いつでも自由に大人になったり子供になったりできるってことか？」

「そうですね、魔法による大人への変化というのを体感して、一度でも体で覚えてしまえば後はその応用でどうとでも出来ると思いま

す。なんだかんだであの子達も魔法に関しては天才ですから」

ようするにこれからは自由自在に変身できるということか。

それはそれで困ったことになりそうだが、今はそれどころじゃない。

近藤はリンディから赤い飴玉を奪い返す事を諦めている。

リンディは近藤が頭が上がらない数少ない人物であり、逆らおうという気すら起きない。

つまりリンディに対して近藤は泣き寝入りするしか選択肢がない。

だがマテリアル達の手元には別の赤い飴玉がある。
それを誰かから譲り受けるしか方法がないのだ。

近藤は扉に手を付き、交渉を始めた。

「ステラ！エクレール！アルク！誰でもいいから、その赤い飴玉を俺に出来ないか！？」

切実な叫びである。

近藤大好きなマテリアル達なら、近藤から懇願されれば喜んで言うことを聞くだろう。

普段ならば、であるが。

しかしマテリアル達は、近藤の願いを渋り始めた。

「ええー、そうしたら大人になれないじゃーん」

エクレールの不満げな声が扉越しに聞こえてきた。

「お、俺に飴玉を譲ってくれたらお菓子好きなだけ買ってやるぞ！」
反応が悪い事に焦った近藤は、物で釣ることにした。

「うーむ、我のアダルトな魅力でおよじどのを悩殺出来なくなる事を考えると、些か釣り合わん気がするな・・・」

不満の声を上げるアルク。

ヤバイ！

マテリアル達にとって大人になるということは、とてつもなく魅力的であり、優先順位が高いようである。

このままでは交渉が決裂してしまう！

もう背に腹は代えられない！

「・・・これからは、い、一緒に寝てやるし・・・お風呂も一緒に入ろう！これでどうだ！？」

近藤は最後のカードを切った。

扉の向こうではエクレールとアルクがおおっと声をあげていた。

好感触！

近藤は勝ちを確信した。

しかし、願いははかなくも崩れる。

「・・・父上、残念ですが私達の願いはもっと大きいのです」

ステラが静かに語り、周囲はシーンと静まり返る。

「・・・願いつて・・・なんだ？」

ゴクリと喉をならし、近藤は聞いた。
そして返ってきた答えがこれだ。

「私は父上との子を授かりたいのです」

「おまえ俺を犯罪者にしたいのかー！！」

「さ、流石にそれはまずいと思うわ・・・」

思わず絶叫する近藤と、困惑するリンディだったが、ステラは淡々と語る。

「犯罪？まずい？大人の姿になった私達を孕ませると犯罪になるのですか？ならないですよ？だって大人なんですから。あ、年齢ですか？ご心配なく、私達は闇のかけらの魔法生命体、正式な年齢を言えば私達の稼働時間以前も計算すれば100歳はいつてるハズで

す。それに私達と父上は正式な血縁関係ではない。言うなれば他人です。他人同士の大人が恋愛をする。ほら、別に条例や倫理にひっかかる箇所など一つありませんよ」

一方的なステラの論法を聞いた近藤は、ガツクリとうなだれた。扉越しにステラのドヤ顔が容易に想像出来たからだ。

いいぞいいぞー！もつといったれー！と応援の声をあげるエクレーとアルク。

もう収拾がつかない事態である。

「・・・大輔君、とりあえず出てきてくれるかしら？もう何もしいし、飴玉も返すわ」

とにかく、マテリアル達の暴挙を未然に防ぎましょう。

リンディのこの言葉が合図となり、近藤は部屋から出ると同時にマテリアル達の持つ赤い飴玉を没収、リンディから飴玉を受け取りこの事件は終息したのだった。

その後あっさりと近藤は赤い飴玉を飲み込み、元の姿に戻った。

しかし飴玉を没収されたマテリアル達からは非難轟々である。

マテリアル達は近藤が元の姿に戻った事については特に何も言わなかった。

マテリアル達からすれば、大人であろうが子供であろうが近藤であることには変わりがなく、それによって好意が変化することはないのだ。

「僕達の若くてピチピチな魅力でパパリンを正常にするハズだったのにー！おとなはひきよーだー！！」

「おやじどのの目を覚まさせる算段だったのだが・・・やはりおやじどのは熟女が好みなのか・・・！？」

「・・・仕方ありません・・・多少負担がかかりますがこの体で父上を受け入れるしか・・・」

「・・・こえーよみんなのその発言！そんなに俺を犯罪者にしたいのか！？」

善悪など考えず自分に素直な子供の発言に、近藤も戦々恐々である。

「・・・大変ねえ大輔君」

マテリアル達の悪口に慣れたリンディが頬に手を添えシミジミ言う。

これを機に、近藤はマテリアル達にキッチリと正しい教育を施す事

を誓ったのだった。

そして外回りから帰ってきたのは達は、近藤が元の姿に戻っていることにおおいに落胆したのはいうまでもない。

おまけ

「あーあ、もつと近藤君の小さい姿を堪能したかったなー」

「何を贅沢な事を言っている、高町。貴様は近藤君と一緒に寝たのではないか？」

「シグナム副隊長、それを言うなら私は近藤副隊長を抱きしめてもいませんよ！」

「ティアナさん、それは僕とキャロも一緒ですよ！」

「そうです！」

近藤のいない場所では前線メンバーが全員集まり、それぞれ不満を口にしていた。

まあ、全部近藤の事だが。

「安心していいわよー!!」

甲高い声と共にクルクル回りながらエレノアが前線メンバーの輪に乱入してきた。

そして、手に持つ瓶には肉体年齢を下げる青い飴玉が一杯に入っていた。

「青い飴玉がこんなに一杯・・・」

「つまり、副隊長をまた子供にできる・・・ということですね?」

それを見てフェイトとスバルが呟き、皆期待を寄せるが、近藤は二度の過ちは冒さない。

二度とこの青い飴玉を口にしないであらうことは明白だった。

そこに、エレノアが悪魔の囁きをする。

「この飴玉を砕いて料理に混ぜるもよし、溶かして飲料に混ぜるもよし・・・」

「・・・飴じゃなくても効力あるんだ・・・」

フェイトが呟くと、再び子供の姿になった近藤を想像する。
つられてなのは達も伝染したかのように各々近藤と色々するビジョ
ンを思い描く。

「・・・ふふ」

「・・・ふふふふ・・・」

よだれが出てきた。

頭の中でやばい想像が完成してしまったのは達は、ニヤリと笑み
を浮かべ不穏な笑いをあげる。

「待っててね、近藤君!!」

近藤の受難は始まったばかりである。

第22話 男は本当の自分に気づき、変態になる（前書き）

今回、完全に原作から離れた内容にしました。

まあ、番外編だし？

お祭りみたいなものだし？

いいよね？

というわけで、どうぞー

第22話 男は本当の自分に気づき、変態になる

さて、メタな事を書くがこれは番外編であり、本編とはなんら関係ない。

したがって、登場人物達の、各々進む道も変わる。

いふなれば、これは別の物語であり、どこかで分岐してしまった、またひとつの可能性なのだ。

広域指名手配犯ジュエル・スカリエッティは大きく展開するモニタにくぎ付けだった。

映っているのはマテリアル達である。

ヴィヴィオと共に元気よく芝生を走りまわるエクレールとアルクに、木にもたれ掛かり静かに読書するステラ。

この映像はドゥーエが近藤を隠し撮りしたときたまたま撮れた映像で、マテリアル達の素性等も調べあげスカリエッティに報告したの

だ。

スカリエツティはその映像を受け取ってからというもの、ずっとマテリアル達の映像ばかり見ていた。

研究室から出ず、一人でずっと。

外からの呼びかけに応えず、ウーノさえ寄せつけず、さらに食事も採らなかった。

こんな事が三日続き、流石に心配になったウーノは、トーレとセツテを連れて研究室の閉じられた扉の前に立った。

「いいのか？もしかしたら大事な研究の最中かもしれんぞ？」

トーレが最終確認の為にウーノに聞く。

「たとえ大事な研究だとしても、三日も飲まず食わずなんて体に悪いわ」

ウーノは心配そうな眼差しで扉を見つめる。

トーレはふんとため息をつき、ＩＳインパルスブレードを展開させ、足を広げゆっくりと腰を落とす。

セツテも無言でブーメランブレードを振りかぶった。

そしてトーレとセツテが扉を無理矢理こじ開けようとしたとき、不意に研究室の閉ざされていた自動扉がシュツと軽い音と共に開いた。いきなりの事にビクツと体を硬直させるトーレとセツテだったが、

中から現れた人物を見ておもわず息を飲んだ。

中から現れたのは当然スカリエッティだったのだが、一瞬誰だかわからなかったのだ。

三日も飲まず食わずだったため少し痩せこけ、無精髭も生えてはいるが、明かにおかしいところがあつた。

目だ。

あのいつもの、金色の濁ったような生氣を感じない性根が腐ったような瞳が、今はキラキラと輝いているのだ。

こんな生きる喜びに満ちた瞳のスカリエッティを誰も見たことがない。

「あ……あの……ドクター？」

ウーノも別人と錯覚しかけ、おもわず「？」と疑問形になってしまった。

「ああ、なんだいウーノ？」

心なしか声も爽やかで明るく聞こえる。

スカリエッティの変貌に怯んだウーノは、スーハーと深呼吸して気を落ち着かせゆつくりと口を開いた。

「……この三日間食事も採らず何をなさっていたのですか？」

若干怒気を孕んだ声なのは仕方ないことだろう。

ウーノはそれこそ食事が喉を通らない程スカリエッティを心配していたのだから。

よく見れば、ウーノの目の下に僅かにくまができていた。寝ることもできない程スカリエッティの身を按じていたということである。

そんなウーノの心情を知ってか知らずか、スカリエッティは遠くを見るように目を細めフツと笑った。

「なに、人生を見つめ直していたのさ」

「じ、人生・・・ですか？」

いきなり何を言い出すのかとウーノは訝しんだが、当のスカリエッティは大まじめである。

「私は一体何がしたかったのだろうか？ 植え付けられたかもしれないこの欲望に疑問を持ったのさ」

スカリエッティは自分の手の平を見つめ呟く。

スカリエッティは時空管理局の最高評議会によって生み出されたクローンである。

開発コードを『アンリミテッド・デザイア無限の欲望』という。

そんな最高評議会によって植え付けられたかもしれない己の欲望に疑問を持ちはじめた。

すでにその欲望は最高評議会の思惑を外れ、『この世の全ての破壊』という破滅的な欲望となっており、そういう意味ではスカリエッティ自身が抱いた欲望であると言える。

しかしスカリエッティはあるきっかけを以て、改めて内なる欲望に

問い掛けた。

私は、私がしたいこととは何だったのか？

その答えを導き出すのにスカリエッティは悩み、苦しみ、傷ついた。そんな拷問のような自問自答が三日続き、スカリエッティは答えを得た。

スカリエッティの本当の願い

欲望

初めて自分の真の心を感じ取ったスカリエッティは、深い霧から抜け出て雲ひとつない晴天と大海原に飛び出したような気分だった。

「ウーノ、私は管理局に自首するよ」

「はあ!？」

スカリエッティがとんでもないことをいうものだから、ウーノも変な声を出してしまった。

今まで蚊帳の外だったトーレとセツテも突拍子ないスカリエッティの発言に驚く。

「私は、私が本当にしたかったこと、願い、欲望がわかったのさ」

舞台俳優のように大仰に手を広げるスカリエッティ。

本当の願い

「本当の願い・・・ドクターは何を望んでいたのですか？」

ウーノは知りたかった。

絶大な信頼をおく我等が生みの親たるスカリエッティの願い。いつも、そしてこれからもずっとスカリエッティの側にいると誓ったウーノはスカリエッティの気持ちが知りたかった。

だが、その答えはいささかウーノには許容し難いものだった。

スカリエッティは目の前にモニタを展開させた。
映しだされたのは、先日ドゥーエから報告を受けたマテリアルなる謎の少女達。

スカリエッティは息を大きく吸い込み、堂々と言う。

「私は ロリコン だったのだ!!」

「・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・はあ？」

ウーノはスカリエッティのカミングアウトに目を白黒させ、トーレは聞き違いかと耳をほじくる。
セツテは無表情で立ち尽くすのみである。

「ああ・・・エクレールたん！無邪気に、そして元気に走り回って！ミニスカートとニーソの間で光り輝く絶対領域が眩しいよう！アルクたん！皆に意地悪しつつもすっかりフォローを入れたり、仲間外れされて拗ねたりするツンデレがいいよう！！ステラたん！いつも我関せずと一人読書するツンクールさがいいよう！！」

スカリエッティはハアハア言いながら身もだえはじめた。

「ド、ドクター？」

あまりの変わりようにウーノは引き気味ながらもスカリエッティに声をかける。

しかしスカリエッティは既に自分の世界に入り込んでおり、ウーノの声は届かない。

「ああ、皆まで言うな！わかってるさ！ロリコンのモットーは『ゴーロリータ、ノータッチ』だ！！遠くで、近くで見て愛でるのが真のロリコンさ！！決して接触してはならない！すればロリコンから

ペドフェリアにジョブチェンジだからね!!」

「・・・あの」

「でも私は生で见たいのだ!近くで見たいのだ!エクレールさんの絶対領域を!アルクさんのツンデレを!ステラさんのツンクールを!!」

「・・・ドクター」

「だから私は自首して、管理局に寝返り、マテリアルの側にいる!!」

スカリエッティの高らかな自首宣言と、ガックリと膝をつくウーノの啜り泣く声がアジトに響き渡った。

「——というわけで、私達は地上本部を襲撃する前に管理局に自首することになりました」

ウーノは疲れ果てたように集まった妹達に報告した。

椅子に座りウーノの話を聞いていたナンバーズ達は驚きに目を見開く。

ウーノは、スカリエッティが簡単に指針を変え、自首するという実質敗北宣言をすることに反発が起これると思っていた。

しかし、ウーノの予想は外れる。

まず地上本部に潜入しているドウーエにその事を報告すると、手を挙げて喜んでいた。

まあこれは想定内である。

しかしアジトにいる他の妹達だ。

「マジか！？よかったー！近藤さんと戦わなくて済むんだー！！」

ノーヴェは両腕を振り上げ喜ぶ。

「よかった・・・」

ホッと胸を撫で下ろすオットーと、それを見て微笑むディード。

「ふーん、まあいいんじゃないっすか？」

「ま、ドクターがそう言うならあたしは別にいいよ」

ドライなウエンディとセイン。

「あの小さな聖王に酷いことをしなくて済むんだ・・・」

ディエチもホツとする。

まあこの反応は当然といえば当然である。

なにしろ彼女達には管理局を襲撃する理由はないのだ。

ただスカリエッティがしろと言ったからする、言っなければそれが理由だった。

「・・・納得いかんが、ドクターがそう言うならば仕方ない」

「・・・今までの私の稼働時間は何だったのだ・・・」

ムスツと膨れるトーレに、落ち込むチンク。

ちなみにセツテは、スカリエッティが自首すればもしかしたら近藤の近くに居られるかもしれないという期待感にトリップしてしまっていた。

「・・・うへへへ・・・じゅるり・・・えへへへ・・・」

・・・何も見ていないし、聞いていない。
ナンバーズ達はセツテを無視した。

あまり反発のない事に、ホツとしつつも情けなくなるウーノだったが、ひとり眉間に皺を寄せて怒っている者がいた。

「私は納得できません、ウーノ姉様！」

パンツと机を叩き立ち上がるのはクアットロだ。

クアットロはナンバーズの中でウーノに次いでスカリエッティの思想に心酔していた者である。

スカリエッティのそんなくだらない理由で世界を混乱に陥れる一大計画がパーになるなど、納得できるものではなかった。

ロリコンで、マテリアル達がかわいすぎるから、馬鹿な計画などやめてマテリアル達の近くに居たい？

ふざけるな！

クアットロは怒り心頭である。

変態だとは思っていたが、まさかここまで『馬鹿』な『ド変態』だったとは！

もうこうなったらスカリエッティなど関係ない！
自分一人で計画を遂行してやる！！

クアットロは拳をきつく握り誓った。

しかし現実は残酷である。

「クア姉弱いじゃん」

ノーヴェのオブラートに包まないストレートな言葉にクアットロは大ダメージを受けよろめく。

だが『悪女たれ』をモットーとしているクアットロはそんなことではめげない。

「私にはこの頭脳があるわ！この知謀を駆使すれば・・・」

「その知謀とやらで高町なのはの『極悪極太無慈悲全力全壊馬鹿砲撃魔法』を防げるんスか？」

ウエンディは頭の後ろで腕を組んでクアットロに言う。

「『歩くロストロギア』八神はやてを止めれるの？」

セインが机に肘をつき、あごを乗せてけだるそうに言う。

「『金色の閃光』フェイト・テストロッサ・ハラウンを止めれるのか？是非見たいな」

チンクはカップに入った紅茶の匂いを楽しみつつクアットロに投げかける。

「ヴォルケンリッターもいるよ」

オットーはクッキーをはむはむと噛みながら言う。

「あの新人達もバカにできないよね」

ディエチが後ろで束ねた髪を前に持ってきて、毛先の枝毛などを見ながら呟く。

「それに忘れてないか？あっちにはお前が嫌う近藤もいるし、そのユニゾンデバイスたる『ミスクリスタル』エレノア嬢もいるのだぞ？」

トーレは腰に手を当てため息をつく。

「今だからこそ言うが、私はあの近藤という男に全く勝てる気がしない。戦いが回避できて、正直ホッとしている」

純粋な戦闘能力はナンバーズ随一のトーレが戦わずして負けを認めたことに驚くナンバーズ達。
さらにウーノが追い討ちをかける。

「ドクターは自首するからガジェットとか、ゆりかごを動かす段取りとか、研究施設なんかの戦力となるものは一切貸さないわよ」

つまり、クアットロは一人裸一貫で管理局を相手しなければならぬのだ。

セツテは未だ涎を垂らしトリップしているので放置。

気がつけば、クアットロを味方するものは誰ひとりいなかった。

そして思い知る。

自分の力量では管理局には、機動六課に太刀打ち出来ないこと。皆の力がなければ自分ひとりでは何も出来ないのだと。

「う……」

ヨロヨロとふらつきながら後ずさりするクアットロは、椅子の足に躓き尻餅をつく。

「……………」

床に座り俯き、肩がフルフルと震える。

それを見たウーノは、ふがない妹達に怒りを覚えたのだと思った。実際ウーノは情けない妹達に怒りを通り越し呆れ果てていた。

「……………うう……」

くぐもった声がし、怒りの声をあげると思ったが、違った。

「うわあああ~~~~ん!!」

なんとクアットロは泣き出した。

まるで子供のように大声をあげ、バタバタと手足を振り回す。

「ばか——!!いくじなし——!!あんぽんたん——!!近藤でべそ——!!」

支離滅裂過ぎて何に怒っているのかわからない。

「…………」

ウーノは眉間に指を這わせ大きくため息をついた。

マテリアル達は自分達があずかり知らぬところで一人の変態を覚醒させ、未曾有の重大事件を未然に防いでいた。

おまけのナンバーズ会議

「ところで、ドクターはロリコンなんスよね？」

ウェンディはオレンジジュースを、ストローでちゅーっ音をたて飲み、ウーノに質問する。

ウェンディの質問に、納得したくないウーノは、苦しそうに顔を歪め仕方なく小さく頷く。

「じゃあなんでドクターはあたしら全員をちっちゃい子で造らなかつたんスか？」

ウェンディは至極当然の疑問を投げかける。

一部のナンバーズ（チンクとオットー）を除き、全員大人と言ってよい体格と、モデルのようなメリハリのある女性らしい体つき（セインを除く）をしている。

いふなれば、スカリエッツィの趣向とは対極に位置するのだ。だがウーノはため息をつきこう言った。

「・・・自覚がなかったらしいわ」

つまり、スカリエッツィはつい最近まで自分がロリコンであるなど思ってもいなかったということだ。

「ああ、なるほど。でもよくよく思い出してみれば、ドクターってチンク姉やオットーなんかを私達より気にしてたよね」

ディエチが顎に指を這わせながら思い出す。

スカリエッツィは無意識だったのだろうが、ナンバーズの中でチンクとオットーの扱いだけは何故か優遇されていた。

露骨な優遇ではなかったのであまり気にしていなかったが、ロリコンをカミングアウトした今では説明がつく行動である。

「・・・嫌なことを言うなディエチ」

チンクは、スカリエッツィに無意識ながら舐められるように視姦されていたという事実震えた。

「・・・もうやだ」

オットーなどは半泣きになりスカリエッツィを嫌悪しだした。

「・・・待て、ならばルーテシアお嬢様などはドクターにとってド

ストライクなんじゃないか？私の記憶では、ドクターはお嬢様を可愛がってはいても、やりとりにそんな性的なものは感じなかったが・
・・」

トーレはフムと腕を組み天井を眺め考え込んだ。

しかしウーノはさらにとんでもない事をぶちまける。

「・・・人間には興味ないらしいわ」

ようするにスカリエッティは『小さい女の子（幼女）』という分類の、さらに『人間以外』というピンポイントフェチだったのだ。マテリアル達は魔法生命体であるので、スカリエッティの性癖の範疇に入り、ナンバーズ（チンクとオットー）もソレに当て嵌まる。しかしルーテシアは人間である。

スカリエッティの食指は、自覚していなかった昔でも無意識下で動かなかったのである。

「・・・ちよつとウーノ姉、その理論でいったら、小さな聖王の器もストライクゾーンってこと？」

デイエチが恐ろしいことを言う。

確かに聖王の器たるヴィヴィオは人造魔導士の技術で造られた存在であるため、スカリエッティのカテゴリから行けば人間に該当するかどうかわからない。

デイエチはヴィヴィオにハアハアしているスカリエッティを想像し、鳥肌が立った。

だがウーノは言う。

「ドクターの中では聖王の器は人間に分類されるらしいわ。人造魔

導士は存在した人間をそのまま造り出すから人間と変わらないんですって」

「・・・なんだそのややこしい仕分けは・・・」

トーレはスカリエッティのこだわりにも呆れる。

スカリエッティの細かなこだわり、それは男のロマン（スカリエッティの中だけの）である。

なんともややこしい性格と性癖の持ち主だ。

ちなみにスカリエッティはウーノに言っていないがシヨタ属性も持ち合わせている。

男の娘など大好物だ。

本来ならエリオがスカリエッティの毒牙にかかるであろうが、スカリエッティの定めたカテゴリに入らないためセーフである。

「・・・あたしドクターが生みの親じゃなかったらぶっ殺してるわ・・・」

「つか、親がロリコンなんて知ったら普通グレるっス。そんで家出するっスね」

「今からでも先に近藤の所行って保護してもらっ？」

「それがいい」

ノーヴェ、ウェンディ、セイン、オットーが口々に言いたい事を言う。

スカリエッティのあまりの嫌われように、ウーノは泣きたい気分だった。

ちなみにセツテはその日ずっと涎を垂らしてトリップしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8720j/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS はじまりの魔法 番外編

2011年2月9日18時54分発行